

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第258集

板倉遺跡発掘調査報告書

一般国道343号鳶ヶ森地区道路改良事業

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

板倉遺跡 正誤表 (岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第258集)

頁-行	誤	正
P 1 7 - 3	低幹木	灌木
P 1 7 - 3	幹木や幹木の・・・	喬木や喬木の・・・
P 1 0 5 - 5	土取跡にいて・・・	土取跡について・・・
P 1 1 5 -	写真の天地および上下が反対となっている。	
	P 8 の基本層序実測図を参照されたい。	

板倉遺跡発掘調査報告書

一般国道343号鳶ヶ森地区道路改良事業



巻頭写真1 調査区全景（西側から撮影）



巻頭写真2 調査区全景（東側から撮影）



1、SI-01竪穴住居跡全景



2、壁に立てられた備平礫



1、赤色顔料検出状態



2、顔料塊拡大写真

巻頭写真4 赤色顔料の検出状態と顔料塊拡大写真

序

岩手県には縄文時代の遺跡を始めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成6年3月現在で8,771カ所に及ぶ遺跡が確認されています。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えて行くことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実もまた、重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も、今日的な課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、交通網の整備を目的とした、一般国道343号の改良工事に関連して平成7年度に発掘調査を実施した板倉遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、縄文時代後期の住居跡や土坑をはじめ、縄文時代早期や前期の土器など貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県土木部千厩土木事務所や大東町教育委員会を始めとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成9年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は、岩手県東磐井郡大東町猿沢字板倉63ほか、に所在する“板倉遺跡”の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は「一般国道343号鷹ヶ森地区改良工事」に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。発掘調査は、岩手県土木部千歳土木事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議・調整を経て財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に搭載されている遺跡番号は“NF50-2064”、調査略号は“IK-95”である。
4. 調査面積・野外調査期間、および調査担当者は次のとおりである。
 - (1)発掘調査面積 3, 875㎡
 - (2)野外調査期間 平成7年4月12日～同年7月21日
 - (3)調査担当者 文化財専門調査員 吉田 充 期限付専門職員 阿部 慎
5. 検出した遺構の種類と数は以下のとおりである。

(縄文時代) 竪穴住居跡14棟、竪穴遺構3棟、土坑33基、焼土2基、掘立柱建物跡1棟

(近世～近代) 掘立柱建物跡3棟、掘立柱建物跡様に配列する小型土坑群2群、土取跡2箇所
6. 分析・鑑定は、次の方々と機関に依頼した。
 - (1)石質鑑定 佐藤二郎 (長内水源工業株式会社)
 - (2)赤色顔料の分析 小山陽造(青森県 八戸工業高等専門学校 物質工学科)
 - (3)放射性炭素年代測定 株式会社古環境研究所
7. 空中写真撮影および写真測量は(株)シン技術コンサルに委託した。
8. 本報告書で使用した地形図は国土地理院発行「陸中大原」(1:50,000)
9. 本遺跡の調査で得られた資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

巻頭写真 1～4

序

例言

〈本 文〉

I. 調査に至る経緯・経過	1	する土坑群	75
1. 調査に至る経緯	1	4. 焼土と粘土貯蔵について	84
2. 調査の経過	1	V. 遺構外出土の遺物	87
II. 遺跡の位置・環境	3	1. 縄文土器	87
1. 遺跡の位置	3	2. 弥生土器	87
2. 地勢・地質の概観	3	3. 土器と土製品	88
3. 調査区周辺の地形	3	4. 石器	88
4. 基本層序	6	VI. 分析・鑑定	100
5. 調査区域の状況	7	1. SI-01住居跡出土炭化物の年代測定	100
6. 周辺の遺跡	9	2. SI-01住居跡出土の赤色顔料分析	101
III. 野外調査と室内整理について	14	VII. まとめ	105
1. 野外調査の方法	14	1. 竪穴住居跡	105
2. 室内整理について	15	2. 土坑について	106
IV. 遺構と出土遺物	19	3. 掘立柱建物跡、および同建物跡様に 配列する土坑群	107
1. 縄文時代の竪穴住居跡	19	4. 遺物等から見た遺跡の時代	108
2. 土坑について	41	報告書抄録	144
3. 掘立柱建物跡と同建物跡様に配列			

〈表〉

表1：板倉遺跡周辺の遺跡表	10	表3：遺構外出土の石器一覧	90
表2：遺構内出土の石器一覧	86		

〈図 版〉

第1図版 日本に見る遺跡の位置	2	第8図版 SI-02～08住居跡	27
第2図版 遺跡の位置と周辺地形	4	第9図版 SI-02住居跡出土遺物	29
第3図版 遺跡周辺の地勢	5	第10図版 SI-09住居跡・SK-23土坑と 出土遺物	31
第4図版 基本層序と層序対比	8	第11図版 SI-10住居跡・SK-26土坑と 出土遺物	33
第5図版 遺構配置図	17	第12図版 SI-11住居跡	35
第6図版 SI-01住居跡と出土遺物(1)	20		
第7図版 SI-01住居跡出土遺物(2)	22		

第13図版	S I-12住居跡と出土遺物、 S K-27土坑……………37	第32図版	S B-04 掘立柱式建物跡様土坑群断面図……………82
第14図版	S I-13住居跡、S K-28・29土坑…39	第33図版	S B-05 掘立柱式建物跡様土坑群断面図……………83
第15図版	S K I-01竪穴状遺構と出土遺物…42	第34図版	S B-06 掘立柱式建物跡様土坑群断面図……………83
第16図版	S K-01土坑他と出土遺物(1)……………44	第35図版	S B-07 掘立柱式建物跡様土坑群断面図……………84
第17図版	S K-01土坑他と出土遺物(2)……………45	第36図版	焼土層と粘土貯蔵……………85
第18図版	S K-01土坑他と出土遺物(3)……………46	第37図版	遺構外出土遺物(土器1)……………91
第19図版	S K-01土坑他と出土遺物(4)……………47	第38図版	遺構外出土遺物(土器2)……………92
第20図版	S K-02・05~08土坑と出土遺物…51	第39図版	遺構外出土遺物(土器3)……………93
第21図版	S K-03・04土坑と出土遺物……………52	第40図版	遺構外出土遺物(土器4)……………94
第22図版	S K-09~11・14土坑と出土遺物…59	第41図版	遺構外出土遺物(土器5)……………95
第23図版	S K-12土坑と出土遺物……………60	第42図版	遺構外出土遺物 (土器6、土製品1)……………96
第24図版	S K-13土坑と出土遺物……………61	第43図版	遺構外出土遺物 (土器7、土製品2)……………97
第25図版	S K-15~18土坑と出土遺物……………67	第44図版	遺構外出土遺物(石器1)……………98
第26図版	S K-19~22土坑と出土遺物……………68	第45図版	遺構外出土遺物(石器2)……………99
第27図版	S K-24・25土坑……………74	付図版	調査終了間際の状況(空撮図化)
第28図版	S B-01掘立柱式建物跡……………76		
第29図版	S B-02・03 掘立柱式建物跡様土坑群……………78		
第30図版	S B-02・03 掘立柱式建物跡様土坑群断面……………79		
第31図版	S B-04 掘立柱式建物跡様土坑群……………81		

〈写真図版〉

写真図版1	調査区全景……………111	写真図版12	S I-12住居跡、S K-27土坑…122
写真図版2	低位面遺構等分布状況(1)……………112	写真図版13	S I-13住居跡、S K-28・29土坑123
写真図版3	低位面~ 高位面西側遺構等分布状況(2)……………113	写真図版14	S K I-01竪穴状遺構……………124
写真図版4	高位面遺構等分布状況(3)……………114	写真図版15	S K-03・07・08土坑……………125
写真図版5	基本層序……………115	写真図版16	S K-09・10・06・11土坑……………126
写真図版6	S I-01住居跡……………116	写真図版17	S K-22・25・12・02・19土坑…127
写真図版7	S I-02~08住居跡重複状況……………117	写真図版18	S I-01住居跡出土遺物……………128
写真図版8	S I-02・03・08住居跡……………118	写真図版19	S I-02・09住居跡出土遺物……………129
写真図版9	S I-09住居跡、S K-23土坑…119	写真図版20	S I-10住居跡、S K-26土坑・ S K I-01竪穴状遺構出土遺物…130
写真図版10	S I-10住居跡、S K-26土坑…120	写真図版21	S K-01土坑出土遺物(1)……………131
写真図版11	S I-11住居跡……………121	写真図版22	S K-01土坑出土遺物(2)……………132

写真図版23	S K-01土坑出土遺物(3)……………	133	写真図版28	遺構外出土遺物(土器3)……………	138
写真図版24	S K-03・04・10・12 土坑出土遺物……………	134	写真図版29	遺構外出土遺物(土器4)……………	139
写真図版25	S K-13・15・19・20・21 土坑出土遺物……………	135	写真図版30	遺構外出土遺物(土器5)……………	140
写真図版26	遺構外出土遺物(土器1)……………	136	写真図版31	遺構外出土遺物 (土器6・土製品)……………	141
写真図版27	遺構外出土遺物(土器2)……………	137	写真図版32	遺構外出土遺物(石器1)……………	142
			写真図版33	遺構外出土遺物(石器2)……………	143

I. 調査に至る経緯・経過

1. 調査に至る経緯

一般国道343号は、陸前高田市を起点とし、大東町を経て水沢市に至る延長約64.9kmの主要幹線道路である。地域産業経済の発展を支える基幹施設であり、かつ観光路線としても重要な役割を担っている。

「一般国道343号高ヶ森地区道路改良事業」は、東磐井郡大東町猿沢字小森63-1から東磐井郡東山町田河津字真山236-1に至る、未改良区間を改良するものである。未改良区間の延長距離は、10.532kmである。

当該区間は、幅員が狭小で屈曲が多く未舗装とあって、大型車通行止めとなっている区間であるとともに、普通自動車でもすれ違いに支障を来すため、主要交通は迂回しているのが現状であり、また冬期間は全面通行止めとなり、幻の国道と言われている。一般国道343号の最後の未改良区間として、地元関係者は元より、沿線住民から道路整備が強く望まれていたところである。

岩手県としても、要望に応え沿岸部と内陸部を結ぶ横断道路としての重要性に鑑み平成2年度から国庫補助事業による、道路改良工事に着手したものである。

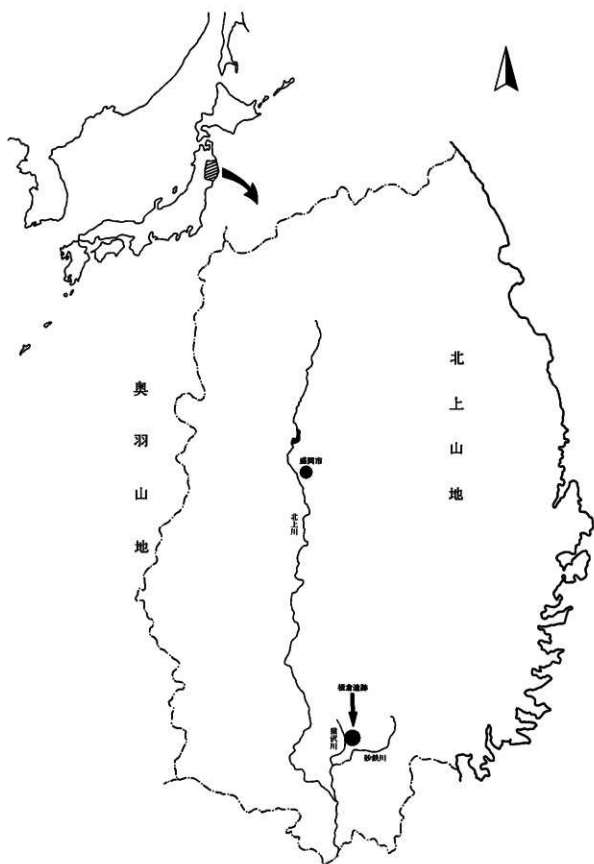
本事業は、総延長5.6km幅員を2車線として橋梁4橋、トンネル2ヶ所等で結ぶ計画であり、現況路線より約5.0kmの短縮となり安全で快適な走行を確保した路線として、地域間交流を促進し産業経済の振興、更には観光開発等に果たす役割が大いに期待されるものである。

本事業に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成6年10月岩手県教育委員会から岩手県土木部千厩土木事務所に対して平成7年度事業についての照会がなされ、平成6年10月27日付「千土第849号」により、千厩土木事務所から岩手県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査を依頼した。その結果として岩手県教育委員会から同年11月4日付「教文第688号」により分布調査結果の回答がなされ、次いで同年11月28日付「千土第939号」によって試掘調査を依頼している。試掘調査の結果は、同年12月2日付「教文第798号」により、板倉遺跡については本調査の必要がある旨の回答がなされた。

以上の経過により、本道跡の発掘調査は平成7年度の(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

2. 調査の経過

野外調査は、平成7年4月1日付契約により、平成7年4月12日に開始し、同年7月21日まで行なった。その後、平成7年11月1日から室内整理・報告書の作成を行ない、報告書の印刷・発行となった。



第1図版：日本にみる遺跡の位置

II. 遺跡の位置・環境等

1. 遺跡の位置

板倉遺跡は、岩手県東磐井郡大東町猿沢字板倉53ほか地内で、大東町役場の西北西およそ9位 置
kmに、そして東日本旅客鉄道大船渡線猿沢駅（東山町）の北北東約4.3km付近の河岸段丘上に位
置している。遺跡の北側には猿沢地区商店街が近接し、南側には江戸時代に築造されたと言わ
れている“清水川”（すずがわ）堰堤が隣接している。また遺跡の西側、約250m付近を猿沢川
がほぼ南流している。《国土地理院発行五万分の一地形図「陸中平原」NJ-54-14-10（一関10号）
図幅中、北緯39度1分10秒、東経141度17分55秒付近に位置している。》

大東町は、岩手県南部に位置するとともに北は青森県八戸市付近にはじまり、南は宮城県牡 大 東 町
鹿半島に至る南北240km余、東西最大幅77km余の紡錘形に発達した北上山地の南西部に形成され
た町である。町域の大部分は、標高120m～800m前後の山地および丘陵地で、丘陵は標高200m
付近を境に、200m以下の丘陵地と、200m～400mの丘陵地に大別され、河岸段丘や谷底平野の発
達は弱く、何れの河川流域でも狭小である。町域の周辺には、北は江刺市・住田町が、南には
千厩町と室根村が、東に陸前高田市、西に水沢市と東山町などの市町村が接しており、町域の
面積は約278km²である。

2. 地勢・地質概観

岩手県の地勢は、北上川ならびに馬淵川流域の河谷低地帯をはさみ、西に奥羽脊梁山脈、東 地 勢 概 観
に北上山地が各々南北に伸びている。北上山地は、前述のように南北240km余、東西77kmほどの
紡錘形に発達した山地であり、その標高は山地中央付近で高く、南および北に行くに従って次
第に低くなっている。また、北上山地は随所に残丘状山地や隆起準平原などが認められ、地形
発達上老年期の地形で、起伏に乏しい様相を呈している。しかし、本遺跡のある大東町および
周辺の高所としては、大鉢森山（732.9m住田町）、大鉢森山（634.0m水沢市境）、蓮葉山（787.
8m）、阿原山（782m）、原台山（894m）、天狗岩山（774.7m）などをはじめとする標高600m
以上の山々が多く見られ、それらの起伏量は400～500mと大きいものである。

これらの山地のうち大鉢森山（水沢市境）と蓮葉山との谷間に源流を発する猿沢川は、寒沢 地 形 形 成
川との合流点から下流約3kmの間は川幅を広げ、沖積平野が広がり、この間には大別3面の河
岸段丘が発達している。本遺跡は、この3面のうち高位2面の河岸段丘（砂礫段丘）にわたっ
て立地しており、遺跡は標高117m～126mの範囲に広がっている。

大東町周辺の地質は主として古生代の粘板岩・砂岩・石灰岩・輝緑凝灰岩・頁岩・チャート 地 質 概 観
およびこれらを買いて突出している中生代の花崗岩類から成り立っている。それらの表層を新
第三期の安山岩・安山岩質集塊岩・凝灰岩・砂岩などがおおっており、地域によって多少の差
異が認められる。

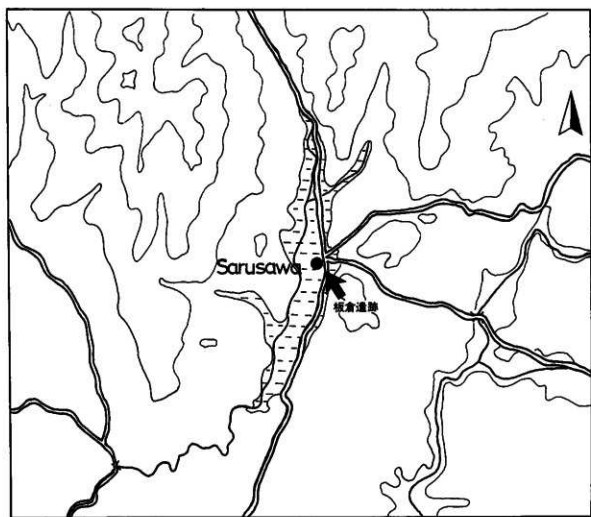
3. 調査区周辺の地形

本遺跡は、山地および丘陵地に挟まれる形で、ほぼ南流する猿沢川左岸の丘陵地を侵蝕・形 周辺の地形



第2图版：造跡位置图

1 : 50,000 縮中大原



0 1(km)



第3図版：道跡周辺の地勢

成した砂礫段丘上に位置している。猿沢川流域に分布する段丘は、同町内の他河川流域と同様に狭小であり、また谷底平野の発達も同様に狭小である。

段 丘 前述の砂礫段丘は、低位面（標高111～119m）と高位面（122～126m）に区分されるが何れの段丘も新第三期の砂岩層・粘板岩層や古時代の石灰岩を基盤岩とし、その上に径10～30cmの亜角礫や亜円礫を含む砂礫層の堆積が見られる。更にその上位には粘土質の褐色土、火山灰性褐色土などの堆積が見られるが、本遺跡内では、褐色土等が薄く下位の砂礫が浮上散乱している地点が多く見られる。

猿沢川流域の詳細な段丘区分については不明であるが、本遺跡の立地する低位・高位の段丘は更新世段丘群と考えられる。

微 地 形 調査区域は、北東～南西方向におよそ125m、最大幅およそ30mと細長い。調査区の微地形は、AⅠ区1～18とAⅠ区s-21とを結ぶラインで大別され、ラインの北東側は標高122～126mの高位面で、ラインの南西側は標高117～119mの低位面となっている。高位面の傾斜度は100分の4前後、低位面の傾斜度は100分の5前後となっている。

なお、これらの低位面と高位面との間の段丘崖部にも狭小な緩斜面が存在する。低位面・高位面の各々の基本層序については、基本層序の項で説明を行なう。

4. 基本層序

(1) 低位面 (AⅠ区o-13)

- I 層：シルト質暗褐色土 (10Y R3/3) で、粘性が見られ、締まりはやや良好である。しかし、笹等の根により不規則な粒状構造土が見られる。本層はかつての耕作土であり、盛土部をのぞくと層厚は25cm前後である。
- II 層：シルト質黒褐色土 (10Y R2/3) で、粘性が強く、締まりは良好である。層厚は4～10cmと地点による差異が見られる。本層は縄文時代の遺物を包含するが、あまり多くはない。また、本層下部からIII層上部には10～30cmの偏平な亜角礫～亜円礫が散在する。
- III 層：粘土質黒褐色土 (10Y R3/2) で粘性・締まりともにやや良好である。層厚は4～10cmと一定しない。なお、本層の下部からIV層上部が遺構の確認層である。
- IV 層：粘土質の褐色土 (10Y R4/6) で径2～6cmの礫を不規則に、かつ少量含む粘土質土。締まりは良好である。層厚は0～40cmと一定せず、地点によっては欠失している。
- V 層：砂礫質の褐色粘土層 (10Y R4/6) である。粘性・締まりともに良好である。層厚は不明であるが、段丘礫層へ漸移する。

(2) 高位面

- I 層：本層は、基本的な色調は同様であるが、粒状構造や締まり、混在物などで以下の2層に細分した。
 - I a 層：シルト質黒褐色土 (10Y R3/2) で、粘性はあるものの、笹や草木等の根が繁茂し、顆粒状構造の土層である。締まりは良くない。層厚は15～20cm前後で、かつての耕作土である。
 - I b 層：シルト質黒褐色土 (10Y R3/2)。植物の細根は入りこむが、顆粒状構造土ではない。

- い。やや緻密で径1～3mmの小礫や炭化物粒を含む粘性土である。層厚は5～20cmである。
- II 層：粘土質暗褐色土(10Y R3/4)で、粘性・締まりともに、やや良好である。本層中には小粒～中粒の炭化物や径1～1.5mmの高温石英が多量に含まれる。層厚は10～40cmと一定しない。なお、本層は縄文時代の遺構の埋土として、あるいは覆土として堆積しており、少量の縄文時代遺物を包含している。
- III 層：本層は、色調のわずかな差異と構成物である浮石・高温石英の多少、あるいは粘土分などの相違で以下のように細分した。本層の上部は侵蝕や人間の活動などにより起伏が著しい。なお、本層上面が縄文時代遺構の確認面である。
- III a 層：火山灰質の褐色粘土層(10Y R4/6)で発泡性の弱い風化した浮石(径1～2mm)と多量の高温石英を含んでいる。粘性・締まりとも良好である。層厚はやや不安定であるが概ね30～35cmである。
- III b 層：火山灰質の褐色粘土層(10Y R4/4)で、III a 層よりも粘性が強く、締まりは良好である。浮石については不明であるが、高温石英を少量含んでいる。層厚は5～7cmである。
- IV 層：円礫混じりの火山灰質褐色粘土層(10Y R4/4)で、少量の高温ガラスを含んでいる。粘性・締まりとも良好である。混在する円礫の大きさは2～3cmのものを中心とするが、最大のは10cmほどである。層厚は概ね30cmである。

5. 調査区域の状況

(1) 調査開始時の状況

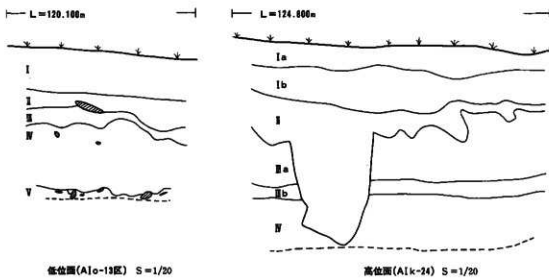
調査開始時における高位置の状態は、事業用地買収後には耕作を放棄しており背丈の低い雑草やツル類に覆われていた。畝の形跡は雑草等に覆われて不明瞭ではあったが、刈り払い後には畝の形跡が現れた。高位置と南側に接する清水堤の間にある段丘崖部は、段丘崖斜面を保全するためか広葉樹の林となっている。

S I - 0 2 ～ 0 8 住居跡が位置する高位置の西側から低位置に移行する斜面部、そして低位置の一部には清水堤から波濼された土砂が厚く堆積していた(0.3～2.5m)。波濼土の中には未分解の草類や樹幹片、そして径30cm前後の垂角礫等が混在していた。この波濼の時期は不明であるが、波濼作業が行なわれた話が伝わっていることや、清水堤の西辺から南辺の貯水池側は、コンクリートブロック等により被われていることから、比較的新しい時期に堤の改築が行なわれ、その際に波濼も行なわれたものと思われる。

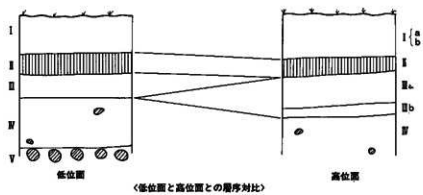
低位置の東側には前述したように堤の波濼土が厚く堆積し、また低位置全体は密生する笹・低位置低幹木等に被われており、疎らに幹木や幹木の切株が点在している。

(2) 調査開始直後の状況

高位置全体を通して耕作土・盛土等を削ぐと、東側約5分の2の区域は低くなり、西側約5分の3ほどはやや高い地形状況を呈する。清水堤側の南側段丘縁辺部と西側のS I - 0 2 微地形～0 8 住居跡が分布する周辺では本来の表土層およびII・III層がうすく、耕作土層や波濼土層を除去すると礫まじりのIII～IV層、あるいは礫層が露出し、基本層序のII～III層が不明瞭と



〈基本層序…低位圖と高位圖〉



第4図版：基本層序と層序対比

なる。

調査区西側の段丘崖部（斜面）では高位面のIV層以下の礫層が不規則に露出し、段丘崖部の中間にも狭小な緩斜面部の存在が明らかとなった。

低位面は、第I層が耕作土としての特徴をもつものの密生する笹の状態や幹木の年齢等から、低位面大分以前に耕作を放棄した畑地であったと考えられる。表土層であるI層、あるいはII層を除くと多数の土坑様の落ち込みが確認されたが、これらのほとんどは内部に残存する根（木植）などの状況、木質の検査等から桐の木の植栽痕であることが判明した。

Ⅱ. 板倉遺跡周辺の遺跡

岩手県教育委員会文化課発行の「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」では、大東町内には本遺跡を含め122遺跡が存在する。しかし、その多くは未調査のまま詳細については不明な遺跡が多い。その分布は、町内を西流する砂鉄川とその支流の流域に集中している。それぞれ、浪民・大原地区は砂鉄川、猿沢地区は猿沢川、沖田・鳥海・中川地区は興田川、摺沢・曾慶地区は曾慶川に沿って分布している。

旧石器時代の遺跡は、猿沢地区の百目木遺跡、1ヶ所のみである。

旧石器時代

縄文時代の遺跡は75遺跡と全体の約3分の2を占めるが、未調査の遺跡が多く、時期が判明しているものは41遺跡にすぎない。また、発掘調査の報告例もきわめて少ないが、大原地区の大明神II遺跡は1994年に大東町教育委員会によって発掘調査され、竪穴住居跡3棟が検出され、その内1棟は中期末の土器を伴う。その他、前期から後期にかけての遺物が出土している。また、大原地区の下川原遺跡は、昭和初期に出土した土器を巡る当時の縄文時代終末期論争、いわゆる「ミネルヴァ論争」の舞台として有名である。

縄文時代

古代の遺跡としては、土師器、須恵器の散布地として5ヶ所の他に、古代の標跡とされる鳥海郷がある。鳥海郷についてはあくまでも擬定地であり、安倍頼時と鳥海三郎宗任父子が居住したという説もあるが定かではない。

古代

また、猿沢地区の金塚古墳、大原地区の大明神古墳の2ヶ所の古墳については、時代は不明である。

大東町は城館跡の確認調査が進んでおり、他市町村の遺跡に比較して中世城館の占める割合が非常に多い。前述の「包蔵地一覧」では、中世の35遺跡すべてが城館跡である。また、大東町教育委員会による「大東町の城館」によれば、それらを含め57ヶ所が城館跡とされる。しかし、発掘調査がなされたのは、鳥海地区の伊勢館遺跡のみである。伊勢館遺跡は大東町教育委員会によって1982年に調査され、掘立柱建物跡56棟を検出し、15・16世紀の船載・国産の陶磁器が出土している。本格的な城館であるが、館主は不明である。なお、大原地区の田手館は近世の城館跡とされ、近世の遺跡に含める。

中世

近世の遺跡としては、城館跡、一里塚、供養塚、鉄山跡など7ヶ所と数が少ないが、この中近世で鳥海地区の文久山鉄山跡、中川地区の京津畑鉄山跡は文久年間の海軍伊藤とされている。

近世

〈参考文献〉

岩手県教育委員会(1995)「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」

岩手県教育委員会(1989)「遺跡基本図」

大東町教育委員会(1994)「大東町の城館」大東町文化財報告書第15集

大東町教育委員会(1995)「大明神II遺跡発掘調査報告書」大東町文化財報告書第16集

大東町教育委員会(1984)「伊勢館遺跡発掘調査報告書」大東町文化財報告書第8集

表1 板倉遺跡周辺の遺跡一覧表(1)

No	遺跡名	種別	縄文時代						平安時代				中世	近世	時代不明	所在地	
			縄文土器			縄文石器			須恵器	土師器	石器	その他					
			前期	中期	後期	前期	中期	後期									
		旧石器															
1	峠一里塚	一里塚															遺沢
2	千人塚	祭祀跡															遺沢
3	築山館	城跡跡															遺沢
4	沢田	散布地								○							遺沢
5	金塚古墳	塚墓															遺沢
6	東不明	散布地															遺沢
7	飯倉	無落跡	○														遺沢
8	小森	散布地															遺沢
9	小向	散布地															遺沢
10	七里塚	一里塚															遺沢
11	森の上	散布地															遺沢
12	渡戸館	城跡跡															遺沢
13	金取	散布地															遺沢
14	野掛館	城跡跡															遺沢
15	大畑清沢	散布地															遺沢
16	大畑柳沢	散布地															遺沢
17	小倉畑	散布地															遺沢
18	関根	散布地															遺沢
19	中館	城跡跡															遺沢
20	新渡戸	散布地															遺沢
21	中野台	散布地															遺沢
22	古谷館	城跡跡															遺沢
23	若宮館	城跡跡															遺沢
24	島海館	城跡跡															島海
25	川崎館	城跡跡															島海
26	祖母館	城跡跡															島海
27	美女森館	城跡跡															島海
28	古戸前	散布地															島海
29	伊勢館	城跡跡	○														島海
30	島海I	散布地															島海
31	島海II	散布地															島海
32	島海III	散布地															島海

表1 坂倉遺跡周辺の遺跡一覽表(2)

No	遺跡名	種別	旧石器	縄文時代					平安時代				近世	中世	時代不明	所在地
				縄文土器			石器その他	時期不明	土師器	須恵器	その他					
				前期	中期	後期										
33	鳥海IV	散布地														鳥海
34	鳥海V	散布地								○						鳥海
35	鳥海VI	散布地								○						鳥海
36	上中川	散布地										○				中川
37	花崎館	城跡								石器、磨石						中川
38	中大洲	散布地								チップ						中川
39	日陰	散布地														中川
40	柏木館	城跡														中川
41	栗野館	城跡														中川
42	新城	散布地														中川
43	石茶坂	散布地								石器						沖田
44	寛石館	城跡														沖田
45	日向	散布地								土偶						沖田
46	天海田	散布地						○		石器						沖田
47	館	城跡														沖田
48	樽館	城跡														沖田
49	奈良峰	散布地														沖田
50	前田野	散布地														沖田
51	市蓮	散布地														沖田
52	下渡民	散布地						○		○						沖田
53	萩館	城跡														淡民
54	伊勢堂	散布地								○						淡民
55	和田沢	散布地														淡民
56	月山I	散布地														淡民
57	月山II	散布地														淡民
58	月山III	散布地														淡民
59	水無I	散布地								○						淡民
60	水無II	散布地								○						淡民
61	横塚館	城跡														淡民
																空堀、馬場跡

表1 根倉遺跡周辺の遺跡一覧表(3)

No	遺跡名	類別	旧石器	縄文時代					平安時代			中世	近世	時代不明	所在地
				縄文土器		石器		土師器	須恵器	その他					
				前期	中期	後期	晩期				その他				
62	跡の沢I	散布地													大原
63	跡の沢II	散布地													大原
64	跡の沢III	散布地													大原
65	跡の沢IV	散布地													大原
66	跡の沢V	散布地													大原
67	鳥神	散布地													大原
68	西山	散布地													大原
69	竜眼寺	散布地													大原
70	山吹飯	埴輪跡													大原
71	大明神古墳	古墳													大原
72	大明神II	集落跡													大原
73	田手飯	埴輪跡													大原
74	矢ノ目I	散布地													大原
75	矢ノ目II	散布地													大原
76	新山飯	埴輪跡													大原
77	御霊神庭	埴輪跡													大原
78	藤ヶ崎I	散布地													大原
79	藤ヶ崎II	散布地													大原
80	坂木	散布地													大原
81	山口溝穴	住居跡													大原
82	高木壺	埴輪跡													大原
83	朝霞館	埴輪跡													大原
84	隈の平	散布地													大原
85	廻籠	埴輪跡													大原
86	中田	散布地													大原
87	外大久保	散布地													大原
88	赤見館	埴輪跡													大原
89	弘川	散布地													大原
90	新田I	散布地													大原
91	新田II	散布地													大原
92	戸巻飯	埴輪跡													大原
93	雨澤館	埴輪跡													大原

表1 板倉遺跡周辺の遺跡一覧表(4)

No	遺跡名	種別	旧石器	縄文時代			平安時代			中世	近世	時代不明	所在地	
				縄文土器			土器	須恵	土師					その他
				前期	中期	後期								
94	下川原館	城跡跡							城跡跡			大塚		
95	下川原	散布地			○				空壕			大塚		
96	内野館	城跡跡										大塚		
97	小沼	散布地										掘沢		
98	森矢	散布地										掘沢		
99	八町館	城跡跡							空壕			掘沢		
100	山の神館	城跡跡							空壕			掘沢		
101	掃網	散布地										掘沢		
102	百目木	散布地										曾渡		
103	界田	散布地	○									曾渡		
104	和野	散布地										曾渡		
105	高瀬沢 I	散布地										曾渡		
106	高瀬沢 II	散布地										曾渡		
107	猫館	城跡跡										曾渡		
108	猫館	散布地										曾渡		
109	西館	城跡跡										曾渡		
110	中館	城跡跡										曾渡		
111	上曾渡	散布地										曾渡		
112	横道	散布地			○							曾渡		
113	五百水 I	散布地		○								曾渡		
114	五百水 II	散布地		○								曾渡		
115	文久山家山跡	城跡跡										曾渡		
116	京澤屋敷山跡	城跡跡										曾渡		
117	九戸山	散布地										曾渡		
118	鍋倉	散布地										曾渡		
119	殿沢	散布地			○							曾渡		
120	長者	散布地										曾渡		
121	羽折沢館	城跡跡										曾渡		
122	千寿塚	祭祀跡										曾渡		

III. 野外調査と室内整理について

1. 野外調査の方法

(1) 調査区の区画設定

本道跡では、下記の三角点4点を成果点として使用し、調査区の区画割付用基準点3点を設置した。

三角点	(三角点名)	(1) 倉林	X=-105,369.97	Y=-40,420.26	H=-333.98
		(2) 伊勢堂	X=-105,937.20	Y=-39,536.67	H=-248.71
		(3) 岩婦	X=-107,656.17	Y=-39,766.37	H=-184.26
		(4) 金取	X=-109,623.53	Y=-39,505.48	H=-124.097
基準点	(基準点名)	基準点1	X=-107,580.000	Y=40,200.000	H=124.097
		基準点2	X=-107,555.000	Y=40,250.000	H=126.077
		基準点3	X=-107,584.000	Y=40,168.000	H=122.751

区割設定 調査区の区割設定は、調査対象範囲全域に4×4mの小調査区を組むグリッド方式によって大調査区、小調査区の割付設定を行なった。区割の単位は、大調査区を上記の基準点をもとに区画線が公共座標第X系にのる100m四方の大区画とし、その中を4m四方の小区画に細分している。

大調査区 大調査区は、調査対象範囲が東西方向に125mほどで、南北方向の最大幅約30mであったことから基準点1を基点として真北方向を算出。その延長線を境界とし、西側にAⅠ区を東側にAⅡ区を設定した。結果として大調査区名は、AⅠ区とAⅡ区の2区画である。

小調査区 小調査区は、上記の大調査区画の各辺を4mで分割し、大調査区全体に4m四方の小調査区を割りつけている。各々の辺には、西から東へアラビア数字の2桁“01～25”まで、北から南へアルファベットの小文字a～rまでを付与し、これらの組み合わせで小調査区名とした。調査区域全体の中での位置・名称は、例としてAⅠ区a-01あるいはAⅡ区r-10のように表した。

(2) 粗掘・遺構検出・精査等

試掘 粗掘・遺構検出に先立って層序確認・遺構確認面の把握そして遺構分布状況の把握のためにAⅠ区の低位面の傾斜部では任意の、平坦部では調査区画に沿ったトレンチ方式で、またAⅠ区の高位面からAⅡ区にかけては小調査区に従ってアランダムに試掘を行なった。その結果として、第4図版に示した層序断面が本道跡の低位面と高位面との標準的な層序であることが判明した。試掘調査の後は、遺構密度の低いAⅡ区の東から粗掘・検出・精査を開始した。

精査の方法 検出した遺構は、原則として住居跡・竪穴遺構の場合には4分法により、土坑類は2分法により調査を進めたが、遺構の重複の著しいものは土層観察のベルトが必ずしも適切な位置とはならなかった。

遺物の記録 遺構内出土の遺物については、埋土での分層によりとりあげているが、床面からの出土遺物はほとんど見られず図化記録・写真撮影を行なったものは少ない。遺構外出土の遺物について

は、原則として小グリッドごとに出土層位を記録して収納しているが、適時写真撮影や出土位置の記録を行なっている。

(3) 図化記録・写真撮影

平面図作成は、グリッドに合わせた1mメッシュを基準にした支距法を基本として図化作業を行なっている。住居跡・土坑類は、平面図・断面図とも20分の1を原則とし、焼土遺構については10分の1とした。断面図のうち埋土が単層のものについては、その性状等を野帳に記録し、完掘後に断面形状を図化した。なお、一部の複雑な遺構平面図については写真測量による図化を行なっており、野外調査終了の直前にはラジコン・ヘリによる調査状況の撮影および付図版に示した全体状況の図化を行なっている。

写真撮影は、35mm白黒1台、35mmボジカラー1台、6×7白黒1台の計3台で写真記録を行なっている。

(4) 遺構の命名

遺構名は検出した順に次の記号を用いて命名することとし、さらに室内整理の段階で遺構としての認定から除外したものを除いて命名し直している。

SI：竪穴住居跡 SKI：住居跡様竪穴遺構 SK：土坑類 SD：溝 遺構記号
SN：焼土遺構 SB：掘立柱式建物跡および類似する土坑配列
SX：その他の遺構

2. 室内整理について

(1) 作業内容

遺物の処理は、水洗い・ラベルの添付を行い、遺物の仕分け登録をした。土器は接合復元・実測図作成・トレース、あるいは採拓と写真撮影を行なっている。石器は実測図作成・計測・トレース・写真撮影の順に進めた。

遺構関係は、図化原因の点検一修正一合成の後、一部については清絵を作成しトレース図の作成を行なっている。

これらの作業と併行して計測値の確認、観察、分析鑑定の依頼、文章原稿等の作成をおこなっている。

(2) 遺構図版

各遺構図は以下の縮尺を原則としたが、これに従わない場合は図版中にスケール、または縮尺率を付している。

住居跡等の平面図・断面図……………S=1/40~1/60

土坑類の平面図・断面図……………S=1/40

焼土の平面図・断面図……………S=1/20

遺構配置図…発掘調査時に作成した略配置図(S=1/100)をもとに、作成しているが、印刷仕上がりは縮尺不定となっている。なお、付図版として示した調査状況図は、検討の結果遺構でなかったもの、調査の都合上掘削した跡や極新期の攪乱、桐の根跡などの明らかな植栽痕も含まれている。

(3) 遺物図版

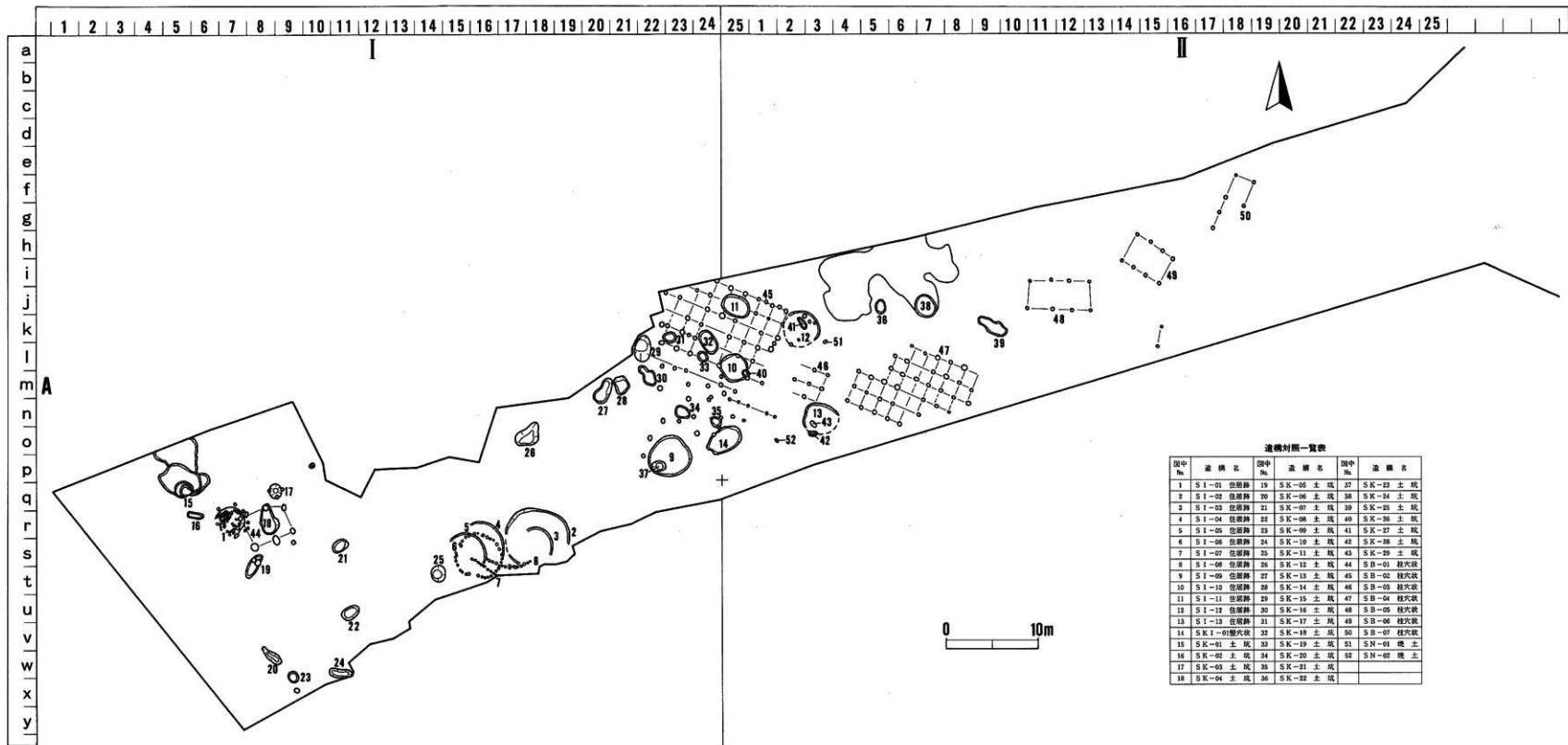
本遺跡から出土した遺物は、遺構内出土の遺物と遺構外出土の遺物とは区別して掲載している。遺構出土の遺物については、遺構図と同一図幅中に、あるいは連続する図版順に割りつけている。なお、重複する遺構を同一図幅とした場合には遺物も同一図幅内に掲載している。掲載遺物の縮尺率は以下の縮尺を原則としたが、大破片の場合は必ずしもそのとおりでなく、個別にスケール・縮尺率を示している。

土器の実測図……1/2～1/3 拓影……1/2～1/3 土製品……1/2～1/3

剥片石器……2/3～1/2 礫石器……1/3～1/4

(4) 写真図版

写真の縮尺率は、遺構写真・遺物写真とも不定である。



遺構配置一覽表

図中 No.	遺構名	図中 No.	遺構名	図中 No.	遺構名
1	S I-01 包蔵跡	19	S K-05 土坑	37	S K-23 土坑
2	S I-02 包蔵跡	20	S K-06 土坑	38	S K-24 土坑
3	S I-03 包蔵跡	21	S K-07 土坑	39	S K-25 土坑
4	S I-04 包蔵跡	22	S K-08 土坑	40	S K-26 土坑
5	S I-05 包蔵跡	23	S K-09 土坑	41	S K-27 土坑
6	S I-06 包蔵跡	24	S K-10 土坑	42	S K-28 土坑
7	S I-07 包蔵跡	25	S K-11 土坑	43	S K-29 土坑
8	S I-08 包蔵跡	26	S K-12 土坑	44	S B-01 柱穴
9	S I-09 包蔵跡	27	S K-13 土坑	45	S B-02 柱穴
10	S I-10 包蔵跡	28	S K-14 土坑	46	S B-03 柱穴
11	S I-11 包蔵跡	29	S K-15 土坑	47	S B-04 柱穴
12	S I-12 包蔵跡	30	S K-16 土坑	48	S B-05 柱穴
13	S I-13 包蔵跡	31	S K-17 土坑	49	S B-06 柱穴
14	S K I-01 壘穴状	32	S K-18 土坑	50	S B-07 柱穴
15	S K-01 土坑	33	S K-19 土坑	51	S N-01 礎土
16	S K-02 土坑	34	S K-20 土坑	52	S N-02 礎土
17	S K-03 土坑	35	S K-21 土坑		
18	S K-04 土坑	36	S K-22 土坑		

第 5 図版：遺構配置図

IV. 遺構と出土遺物

本章では、各種の遺構と遺構内埋土等から出土した遺物について説明を行なう。遺跡の調査ははじめに対象区域は、前述したように東西方向およそ125m、南北方向の最大幅約30mの範囲にあり、地形的には西に張り出した段丘であるため比較的日当たりの良い地形である。

微地形との関係で遺構群の分布を大きく分けると低位面と高位面に分けられるが高位面の遺構分布群は更に西側と東側とに区分される。

低位面の遺構は、平面形や柱配置が不明な縄文時代の住居跡群と敷石をもつ住居跡、そして縄文時代と考えられる円形や楕円形あるいは小判形の土坑が不規則に分布している。低位面の住居跡は、8棟あるいはそれ以上が重複した地点と敷石住居跡とは25～30mほど離れている。

高位面の遺構群は、西側に縄文時代の竪穴住居跡と土坑が比較的まとまっており更にそれらと重複する形で近世～近代?の植栽痕や掘立柱式建物跡様に配列する浅い土坑群が分布している。高位面東側では、縄文時代の遺構は検出しておらず、近世～近代と考えられる掘立柱建物跡と考えられる幾つかの小型の土坑群3群を検出している。

今回の調査で検出した遺構種および数量は、整理の結果、竪穴住居跡14棟、住居跡状竪穴遺構3棟、土坑35基、焼土遺構2基、掘立柱式建物跡4棟、同建物跡様に配列する小型土坑144基、その他近代～現代に属すると考えられる土取跡2地点である。土取跡その他の極新期の攪乱は調査区全体に分布しているが、高位面中央付近の北側と低位面北側のものが規模としては大きいものであり、小さなものは遺構配置図から除外している。更に、低位面・高位面とも柵その他の(当初柱穴と考えられたが整理の結果)木根痕と判断したものや明らかな植栽痕は除外しているので付図版とした調査終了近くに撮影し図化した図と遺構配置図とを比較していただきたい。

1. 竪穴住居跡

本項では、縄文時代の竪穴住居跡、および住居跡状竪穴遺構としたものの炉跡があることから住居跡としたものを含め、14棟について説明を行なう。住居跡状竪穴遺構については、特に項を設けず重複する土坑の項の中で一緒に説明を行なうこととする。

(1) S1-01住居跡 (第6・7図版、写真図版6・18、巻頭写真3・4)

低位面のAⅠ区r-08を中心にg-08、r-07にわたって位置している。

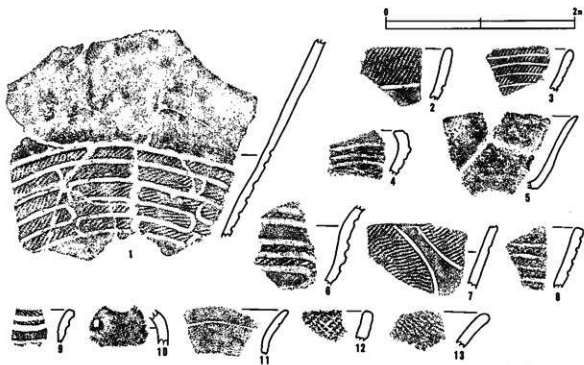
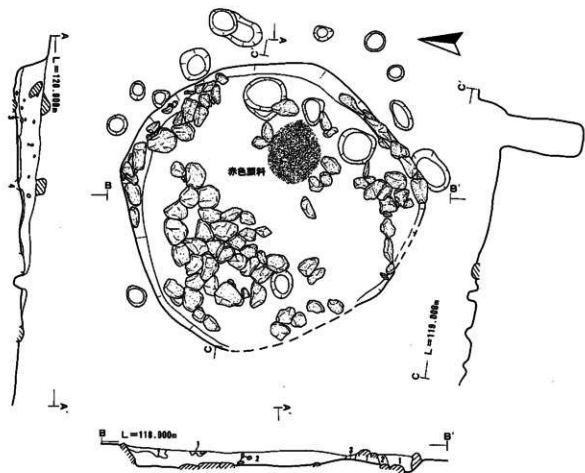
検出位置

低位面の斜面にあり、IV層の粘土質褐色土上面で概ね円形を呈する黒褐色土(埋土のI層)を検出した。検出の時点から南東側、および北東側、そして北西側のIV層と埋土である黒褐色土との境界付近に扁平な亜円～亜角礫が突出していた。本住居跡と重複する遺構としては、後述する掘立柱式建物跡SB-01の柱穴が本住居跡の埋土と床面を掘りこんでいる。

検出状況と
重複関係

平面形は、概ね円形を呈するが南西壁から西壁にかけては、壁の立ちあがり不明かあるいは不明瞭のため断言できかねる。規模は、北東～南西方向(斜面の傾斜方向)が320cm、斜面傾斜に直交する北西～南東方向300cm、壁は0～35cmを計る。

平面形・規模



第6図版：SI-01住居跡と出土遺物(1)

埋土は、4層に細分され黒褐色土～暗褐色土～褐色の粘土質シルト～粘土質土で構成される。埋土
これらの層中には、後述する壁面および床面に配置されていた偏平礫に由来すると考えられる
礫が混在する。礫の岩質は、中世界～古生界の石灰岩と粘板岩そして砂岩である。

埋土1：小粒炭化物を含むシルト質黒褐色土（10Y R2/3）でやや粘性があり、締りは普通かや
やである。

埋土2：シルト質黒褐色（10Y R3/2）と褐色の粘土質シルト（10Y R4/4）の大小ブロックが
不規則に混在する層である。本層中には、土器・石器を含み特に床近くから多く出土
している。

埋土3：シルト質黒褐色土（10Y R2/3、3/2）、シルト質暗褐色土（10Y R3/4）、褐色粘土（10
Y R4/6）の大小ブロックの混合土層で、全体的に粘性、締り、ともにある。

埋土4：褐色の粘性土（10Y R4/6）にシルト質暗褐色土（10Y R3/4）が混在した層で、粘性・
締り、ともに見られる。

壁は、西北西側および南西側を除けば、何れの壁もほぼ垂直に立ちあがっている。特に石灰岩の偏平礫が垂直に配置された周辺は垂直を呈する。また、西北西から南西にかけての壁は、
斜面の下方に位置するため、極一部を確認しただけで不明な点が多い。北西、北東、南東の壁
には、前述したように偏平礫が壁材として配置されているが、斜面下方の西北西～南西の間で
は偏平礫が存在せず、その痕跡が認められただけである。壁の高さは、北東～東側の斜面上方
で35cm、北側と南側では30cm～22cmである。（巻頭写真3参照）

全体的に大小の起伏が認められたが、これは床材として配置された偏平礫の配置痕跡（後世床の状
の攪乱？）と、掘りこみ床面の起伏に由来するものと考えられる。残されている床材の礫の上面
は概ね平坦で、整然と並べられているが、南側では礫の上面が起伏している。礫の形状は径20
cm～30cm、厚さ10cm～15cmの偏平な亜円礫である。岩質は壁材として用いられたものと同様に
中世界～古生界に由来する砂岩・石灰岩・粘板岩で構成されているが、石灰岩は少ない。床材
礫の重量は平均3kgほどで、最大重量のものでも4.5kgである。

床面の一部からは、通常の焼土とは異なる赤褐色土が確認された。これは炭化物小粒を含む
ものの焼土ではなく、硫化水銀朱（HgS）である。（分析の項を参照）

炉跡および炉跡の痕跡は、何ら確認できなかった。

炉について

竪穴部の床面および壁では、径30cm前後、深さ5cm～15cmの小土坑3基を確認しているが、柱
穴穴と言えるものではない。竪穴周辺には、大小12の柱穴状小土坑が存在するが、配列は不規
則であり、本住居跡に伴うものか否かは不明である。

本遺構では、増改築の形跡は認められない。

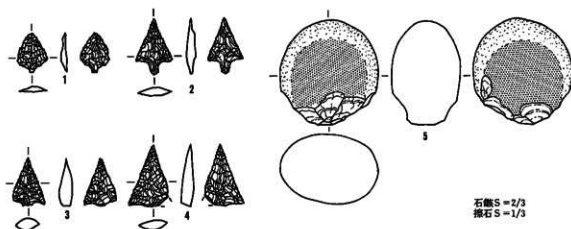
増改築

第6図版1～13の土器片や第7図版1～4の石鏃4点、擦・敲石1点、そして剥片が出土し
ているが、埋土の2層下部に包含されるものがほとんどで、床面に遺棄された状態での出土遺
物はない。石鏃および剥片の岩質は、チャートと黒曜石である。

遺物の出土

斜行縄文を地文とし、そのうえに平行沈線文を施したものの（3・4・8）、あるいは平行沈線
文と弧状沈線文を組み合わせたもの（1）、沈線文・狭い縄文帯・無文帯が並行して直線や弧状
文をなすもの（6・9）、磨消縄文部と縄文部とが沈線文により区画されるもの（7）、無文、あ
るいは無文地に口唇に並行する1条の沈線文をもつもの（5・11）や、縄文だけが確認された

土器



第7図版：SI-01住居跡出土遺物(2)

もの(12・13)など、多様な土器片が出土している。10の土器片は、穿孔1ヶ所をもつ卵形小型土器の破片と思われる。

(2) SI-02~03住居跡(第8図版、写真図版7・8)

本住居跡群の分布位置は、高位面の西側A区r-16~20、s-16~20の区域に位置している。本住居跡群および周辺には、清水堤の波濤土が1m以上の厚さで盛土されており本来の耕作土(1層)、下位のII層まで攪乱を受けている。また7棟あるいはそれ以上の重複により住居跡の壁は不明瞭~不明のものが多く、これら住居跡の新旧関係も不明瞭である。

(3) SI-02住居跡(第8・9図版、写真図版7・8・19)

平面形・規模 南半部が斜面下方であることやSI-03住居跡が重複していることから、平面形は不明である。検出部の規模は、東西方向720cm、南北方向310cmである。推定平面形としては、東西方向720cm、南北方向約620cmの楕円形と考えられる。

埋土 SI-03住居跡の埋土を含め全3層であるが、上位の埋土1層と2層はSI-03住居跡構築後の2次移動や堆積と考えられる。また埋土の2層は、色調はほぼ同様であるが締り具合、小ブロックおよび小礫・砂粒の配列から2a層と2b層とに細分される床近くを除くと分層不可能である。これらのことからSI-02住居跡の埋土は2a層と3層との2層と考えられる。
埋土2b層：黒褐色の粘土質シルト層(10YR2/3)。2cm~10cmの礫が混在し、2a層との境界付近ではシルトの分級がわずかに認められる。粘性あまりなく、締りは良好。
埋土3層：粘土質褐色土(10YR4/4)。極少量の炭化物粒を含む。粘性・締りともに良好。

壁の状態 床から急速に外傾して立ちあがっているが、北西側の壁はややゆるやかに立ちあがっている。なお、壁の高さは斜面上方で40cm~45cm、東・西では5cm~10cmである。本住居跡では、壁直下の床面、あるいは壁上位の検出面(高位面のIV層上面)には壁柱穴や柱穴は認められない。

全体的に斜面下方方向に傾斜し、ゆるやかな起伏が見られる。なお、断面作成位置付近では床の状態で壁の方向にわずかに下っている。床は特に踏み締められたり、貼り床を施したような形跡も認められない。また、西側ではS I - 0 3住居跡の床面との区別がほとんど不可能であると共に、S I - 0 3住居跡の壁も不明となる。S I - 0 2住居跡と同0 3住居跡の床面の高低差は、明瞭な東側で約7cmの段差をもっている。

明らかに炉跡、および炉跡と考えられる焼土層は確認できなかったが、位置的にS I - 0 3住居跡内の北東側の焼土(50cm×30cm)が本住居跡の炉の痕跡と考えられる。この焼土は、高位置の基本土層IV層が弱く焼変したものであり、S I - 0 3住居跡の汚損した床土(1cm厚)の下から検出している。炭化物粒、焼土ブロック、炉石の埋設穴は確認できなかった。

直接に関係すると考えられる柱穴は検出できなかったが、西壁を破壊する状態で1つ確認している。この柱穴は、本住居跡よりも上位(新期)のものと考えられる。

本住居跡では、増改築の形跡は認められない。

埋土の2 a・2 b層中から10数点の縄文土器片、土製円盤1点、石鏃2点、石匙1点が出土しているが、住居床面からの出土はない。また、遺棄状態や投棄状態のまとまった遺物の出土も認められない。(第9図版1～9、写真図版19)

S I - 0 2住居跡部分の埋土中からは、口縁より平行沈線文と弧状沈線文との組み合わせられる平行沈線文と弧状沈線文との交点付近に刺突と瘤をもつもので地文は斜行縄文RLrである(第9図版-1)。口唇に平行する沈線により縄文帯・無文帯が区画されるもの(2・3・6)や平行沈線で区画された中に鋸歯状あるいは鏢形状の平行沈線文が施されたもの(7)などが見られる。また、口縁突起部で縄文帯・無文帯が沈線により区画され曲線状や弧状の構成をなすもの(8)、そして外器面は縄文のみで内面に弧状沈線文が施されたもの(9)などがある。

石鏃は、一部が欠損した強凸基鏃と平基有茎鏃の2点である。

(4) S I - 0 3住居跡(第8図版、写真図版7・8)

東側の壁と南西側の壁、そして西南西～西部のS I - 0 2住居跡の壁を切っている部分を確認しているが、全体形状は確認できなかった。確認部の形状からの平面形推定は、東西方向510cm、南北方向425cmの楕円形を呈するものと考えられる。

本住居跡の埋土は2層であるが、下位の埋土2 a層はS I - 0 3住居跡の埋土2 b層の2次堆積と考えられ、床近くの極一部を除けば2 a層と2 b層の区分は不可能であった。

埋土1層 : 褐色を呈する粘土質シルト層(10Y R2/2)で、0.5～5cmの亜円礫が混在し、粘性はややあるが、締りは良くない。

埋土2 a層 : 黒褐色の粘土質シルト層(10Y R2/3)で、2～10cmの礫が混在する。2 b層に比べて締りがない。

床から比較的ゆるやかに外傾して立ちあがっているが、北～北西側ではS I - 0 2住居跡の床との差がなく、また南側ではS I - 0 8住居跡の壁柱穴と重複しているため不明の部分も多い。壁の高さは0～7cmほどである。(壁の高さはS I - 0 2住居跡の床面との差として計測したものである。)部分的に亜円礫の露出があり、やや起伏している。

全体的に住居中心より低い凹面状をなし、礫の突出や抜きとり痕と考えられるくぼみなど

のため起伏している。これらの起伏をカバーするために黒褐色の粘土質シルトが貼床?されている。その層厚は0～2cmであり、明瞭に貼床とは言えない(整地汚損土の可能性が高い)。

床面で確認した施設構造としては、床面のほぼ中央に位置する伊跡(焼土)と炉の東側や南側に散在する柱穴状小土坑4である。また、伊跡の北東側では床の汚損土の下から50cm×30cmの地山の茶色焼土を確認している。

炉について 伊跡と考えられるものは、床面で確認した不整形な焼土(75cm×65cm、厚さ8cm)である。焼土の周辺には熱による破砕礫が散乱していたが、埋設された礫や埋設穴は確認できなかった。焼土の状態は、焼土小粒中に炭化物が少量混在する。

柱 穴 柱穴は4つ確認している。これらの配列は非常に不規則であり、上屋構造を支えるための柱穴であったか、否かは不明である。柱穴の規模は、2:20×20cm、3:15×25cm、4:25×30cm、5:20×30cmで深さは15～20cmである。なお、伊跡の北側に45×45cm・深さ16cmほどの小土坑が存在するが、これについては、柱穴であるか住居内貯蔵穴であるかは不明である。本増改築住居跡でも増改築の形跡は認められない。

遺物の出土状況 S I - 0 2住居跡および本住居跡の2 a 層、2 b 層からの土器・石器の出土はあるが、住居内遺棄や投棄の状態の遺物出土は一切認められない。よって、本住居跡の時代・時期を決定する遺物は出土していない。

(5) S I - 0 4 住居跡 (第8図版、写真図版7)

平面形・規模 平面は斜面上方側の北東部、およそ3分の1程度を確認しただけで、全体形状、全体規模は不明である。確認部の規模は、最大径510cm、壁の高さ12cmである。

確認部からの推定では、長径約600cm、短径約500cmほどの楕円形と推定される。

埋 土 埋土はS I - 0 5住居跡の埋土と差がなく、またS I - 0 3住居跡の埋土1層ともほとんど差が見られない。また、S I - 0 5住居跡の堅穴掘りこみ面が本住居跡の埋土上面からであることは推定できるが埋土の区分では不明である。

埋土1層: 黒褐色を呈する粘土質シルト層(10Y R2/3)で、0.5～5cmの垂円礫が散在し、また黒色土のブロック(10Y R1.7/1)が点在する。その他、植物の細根が入っていることからS I - 0 3住居跡の1層よりは締りが無い。

壁の状態 全体的にゆるやかに外傾しているが、礫の露出等が見られることから、なだらかな立ち上がりではない。

床の状態 ゆるやかな起伏が見られ、平坦とは言えない。また、貼床、柱穴、周溝も見られない。

炉について 炉と考えられるものは、住居跡の平面形推定規模からS I - 0 5住居跡の北東壁とその床面が弱変焼土化した範囲(長さ約100cm×幅70cm)が伊跡の位置と考えられる。

柱 穴 柱穴については、後述するS I - 0 6住居跡、S I - 0 8住居跡とした壁柱穴列との重複があるのか、あるいは本住居跡には明確な柱穴がなかったのか、何れにしても本住居跡の柱穴と断定できるものは確認できなかった。

増改築 本住居跡でも増改築の形跡は認められない。

遺物の出土状況 S I - 0 2住居跡からS I - 0 3住居跡の埋土1層と同様に、出土遺物は極少数の土器が見られただけである。本住居跡の時期を推定できるような、遺物の遺棄・投棄は一切見

られない。

(6) S I - 0 5 住居跡 (第 8 図版、写真図版 7)

北壁から南壁にかけて壁の立ちあがりとその平面形状を確認したが、他の範囲では平面形を平面形・規模
推定できるような明確な床の広がり、あるいは周溝・壁柱穴などは確認できなかった。確認部
の規模は最大径450cmである。

確認部の形状から平面形・規模を推定すると、最大径480cmほどの円形～楕円形となる。

埋土は前述の S I - 0 3 住居跡、S I - 0 4 住居跡の埋土 1 層とほぼ同じであるが、先の住居跡の埋土よりも全体的に締りがいい。

埋土 2 層：黒褐色の粘土質シルト (10YR2/2)、でやや締りがある。

埋土 3 層：粘土質褐色土 (10YR4/4) のブロック層で、粘性・締り、ともに良好である。

確認部の壁の状態は、床から緩やかに外傾して立ちあがっているが、壁面は裸の露出で凹凸の状態
が見られる。本来の壁の高さは不明であるが S I - 0 4 住居跡の床面との差は、およそ10cm
である。

全体的に斜面下側面に傾斜し、小起伏が認められる。床面は全体的に固く締っているが踏み床の状態
締めであるか否かは不明である。また、貼床等の形跡は認められない。

その他、推定平面形の中央付近に炉跡と考えられる焼土が存在するが、これは新期の大型柱
穴によって切られており、本来の形状は不明である (65×50cm、層厚7cm)。また、北東壁の一
部とその下位の床面の地山が焼土化を生じているが、この焼土は S I - 0 4 住居跡の炉跡の下
位であった可能性が高い。

前述の大型柱穴に切られた焼土 (65×50cm、層厚7cm) が位置的に本住居跡の炉跡と考えられ、炉について
る。焼土周辺には数点の垂円礫が見られたが、特に熱変等の変化は認められない。

壁際に2つ、北東よりの床に2つの計4つがあるが、他については不明である。これらの規模
柱穴
は1:30×20cm・深さ28cm、2:20×15cm・深さ20cm、3:30×20cm・深さ22cm、4:12×8
cmである。他には、S I - 0 6・0 7 住居跡柱穴列と重複している可能性も考えられるが不明
である。

本住居跡でも増改築の形跡は認められない。

増改築

本住居跡の埋土、あるいは床面出土の遺物はない。

遺物

(7) S I - 0 6 住居跡 (柱穴列) (第 8 図版、写真図版 7・8)

概ね円形にめぐる柱穴列で、平面形を把握したものである。柱穴の間隔には、規則性が見ら
れる範囲と、疎・密不規則な範囲とが見られる。柱穴列のうち南南西の一角の柱穴群は、内側
に入りこんでいる。確認部の規模は、南東～北西方向に長径 (520cm) があり、その直交する北
東～南西方向が短径 (最大480cm) となっている。

S I - 0 4 住居跡、S I - 0 5 住居跡の構築によって、その床面が失われていることから本埋土
住居跡の固有の埋土は認められない。

埋土と同様に何ら固有の壁は確認できなかった。

壁の状態

S I - 0 4 住居跡、S I - 0 5 住居跡の構築により、本住居跡の床面は失われている。

床の状態

- 伊について 床・壁と同様に不明である。
- 柱 穴 本住居跡を構成すると考えられる柱穴は、壁際に並ぶもの32がある。これら32の柱穴は所謂“壁柱穴”と呼ばれるものであり、住居内側の所謂“主柱穴”は不明である。壁柱穴の中には、大小・浅深等の差異が見られることから、それらのうちの大きな柱穴が上屋を支えるものである可能性が考えられる。
- 増 改 築 柱穴列の状態・間隔の不規則からは、増築は考えられないが補修等の改築が推定される。
- 遺 物 直接に係る遺物は、何ら出土していない。

(8) S I - 0 7 住居跡 (柱穴列) (第8図版、写真図版7)

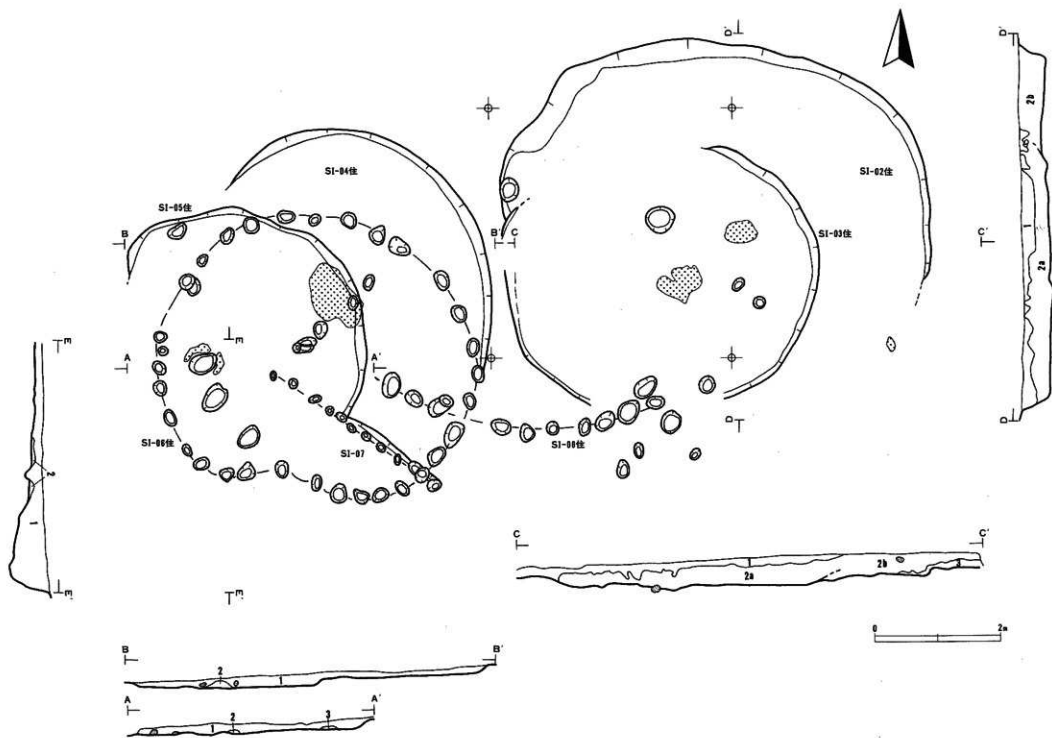
- 平面形・規模 11の直線的な並びであり、また全体的に浅い柱穴のため斜面下方での検出・確認ができなかったものである。この柱穴列が竪穴住居跡の壁柱穴列であったとすれば、長方形または隅円の長方形の竪穴住居跡が想定されるが、この資料だけでは平面形・規模とも不明と言わざるを得ない。
- 壁・床等 壁・床・炉跡、増改築等の有無については、全く不明である。また本住居跡?の時代時期を決定するような遺物もない。
- 新旧の関係からは、S I - 0 6 住居跡やS I - 0 5 住居跡より古いと考えられる。

(9) S I - 0 8 住居跡 (柱穴列) (第8図版、写真図版7・8)

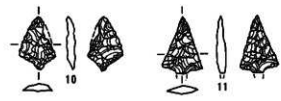
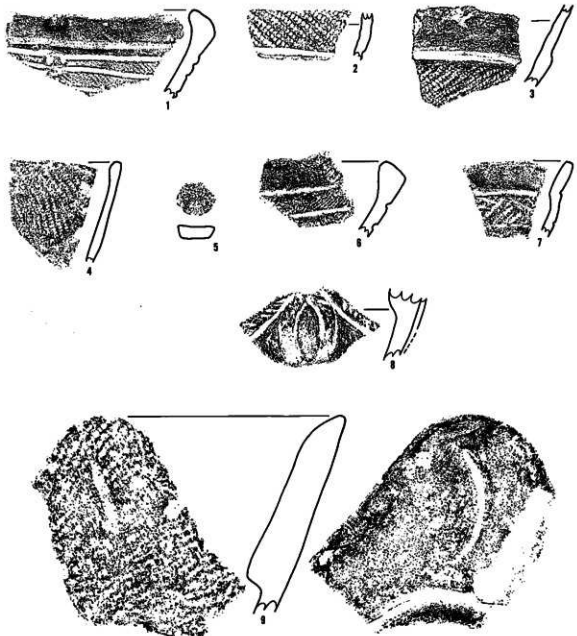
- 平面形・規模 円弧状の柱穴列である。しかも斜面下方側だけで検出し、斜面上方ではこれらに関連すると考えられる柱穴列は検出していない。円弧状に並ぶ柱穴列の最大径は、440cmである。よって平面形は、円形か楕円形かも不明である。
- その他 壁・床・炉跡、増改築等についても不明である。また、所屬時期については、不明であるが、S I - 0 3 住居跡より古いと考えられる。

(10) S I - 0 9 住居跡 (第10図版、写真図版9・19)

- 検出位置 高位面のA II区0-23・24、P-23・24にわたって位置している。
- 検出状況と重複関係 高位面のIII層の火山灰質褐色粘土層の上面(III a層上面)で、不整形円形を呈するシルト質黒褐色土(埋土1層)の広がりを検出した。検出時点では、東側の壁を切るように不整形なやわらかい黒褐色土(10Y R 2/2)部が重複していたが、これについては、極新期の攪乱と判断した。また、南東壁際の床面からはSK-23土坑を検出した。SK-23土坑の埋土は、本住居跡の埋土1層と類似する色調(シルト質黒褐色土)を呈するが粘性があり、締りも良好で、かつ上部はやや凹んではいるものの固く締っている。
- 平面形・規模 平面形は、やや不整形な楕円形を呈している。本住居跡の構築は、III a層上面の傾斜に対して斜行する方向に長軸方向があり、規模は、北東～南西方向の長軸が464cm、北西～南東方向の短軸が356cmである。
- 埋 土 埋土は、2層に細分しているが、下位の埋土2層は床面の中央付近に散在するような堆積状態であり、埋土の主体は埋土1層である。
- 埋土1層：小粒炭化物、土器片、石器を少量含むシルト質黒褐色(10Y R 2/3)で、粘性がや



第 8 図版：SI-02～08住居跡



●土器 S=1/2
 ●石器 S=1/2

第 9 圖版：SI-02住居跡出土遺物

やあり、締りは普通～ややある程度である。下部には、埋土の2層と同様の粘土質暗褐色土(10Y R 3/4)の中小ブロックが不規則に混在する。

埋土2層：シルト質黒褐色土の小ブロックが少量混在する暗褐色土(10Y R 3/4)で、全体的に大ブロックによる構成である。粘性ややあり、締り良好。

なお、本層は壁際などの床面には堆積しておらず、床中央付近の埋土1層の中に中小ブロックとして少量混在するだけである。

壁の状態 壁は、全体的に低く、ゆるやかに外傾して立ちあがっている。壁の高さは8～14cmで、斜面上方である北東～北西の間は、斜面下方傾である東～南東に比べて低い傾向がある。これは後述する住居床面の傾斜に起因するものである。

床の状態 全体的に北～北西側が高くなっており、南東～南側が低くなっている。その傾斜度は100分の7前後である。また、床面には礫の突出等は非常に少なく、ゆるやかな起伏が見られる。南東側の壁際には、幅90cm・奥行き40cmほどの一段高いステップ状の部分があり、その南東側に焼土の広がりが存在する。なお、貼床の痕跡も確認できなかった。

炉について 炉跡と考えられる焼土層の広がりが、南東壁よりに1基存在する。周辺には、囲石としたと考えられる垂円礫(15～22cm)が散在していたが、火熱等による変化は認められず、また囲石を埋設した形跡も認められない。焼土の平面形状は不整形で、その最大長が56cm、最大幅が48cm、焼土層の厚さ11～12cmで、楕円形の浅い土坑状のくぼみの中に形成されている。その他、床中央からやや北東側に径10×14cmの焼土ブロック1ヶ所がある。

柱 穴 竪穴部の床面では、径20～37cm、深さ5～13cmほどの小土坑4基を確認したが、何れも配列や規模から柱穴とは考えにくいものである。また、壁や竪穴周辺からも柱穴と考えられる小土坑は確認できなかった。

増 改 築 本遺構でも増改築の形跡は認められないが、西側の壁際にわずかな段差が認められる。これは、南東側のステップ状の段差と同様のものか、あるいは竪穴部形成時の溜り残しか、については不明である。

遺 物 第10図版1～7の土器片や石鏃等が埋土1層中から出土している。

土 器 口唇部は無文で、口唇に平行する1条の沈線や、1条あるいは2条が並行する弧状沈線文によって縄文部と磨消縄文部とが区画されるもの(1・4)、2条の沈線間に綾杉状の平行沈線文を施すもの(2)、そして口縁部に1条の沈線が施され口唇よりは無文帯、付部よりは斜行縄文となるもの(3)などがある。

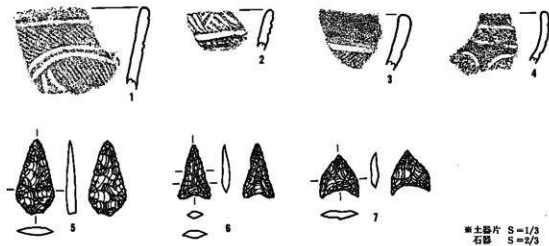
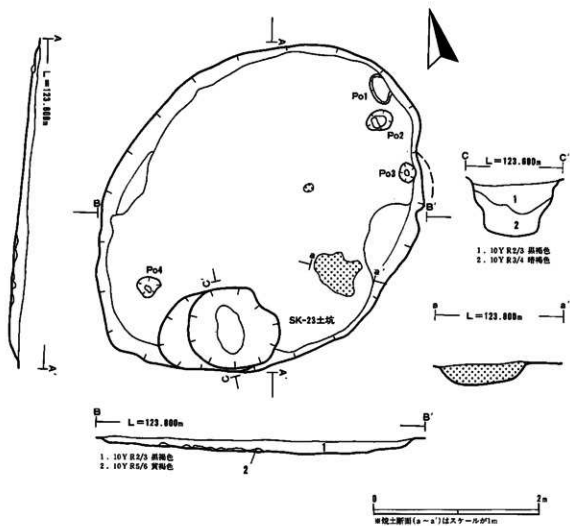
石 器 尖基有基石鏃(5)1点、弱凹基・凹基の無基石鏃各1点の、計3点が出土している。

(11) S1-1 住居跡(第11図版、写真図版10・20)

検出位置 高位面のAⅠ区1-25とAⅡ区1-01、m-01にわたって位置している。

検出状況 旧耕作土の除去後、基本土層のⅡ層を除去する過程でⅡ層中に不規則に散在する偏平垂角礫を確認したが、竪穴の存在は不明であった。結果的に、Ⅱ層を完全に除したⅢ層上面の段階で平面形の概略を確認した。

重複関係 検出の時点から本遺構の南東側に重複するSK-26土坑他の存在は、埋土の相違から予測できていた。本遺構とSK-26土坑との新旧関係は、本遺構が古く、SK-26土坑が新しい。

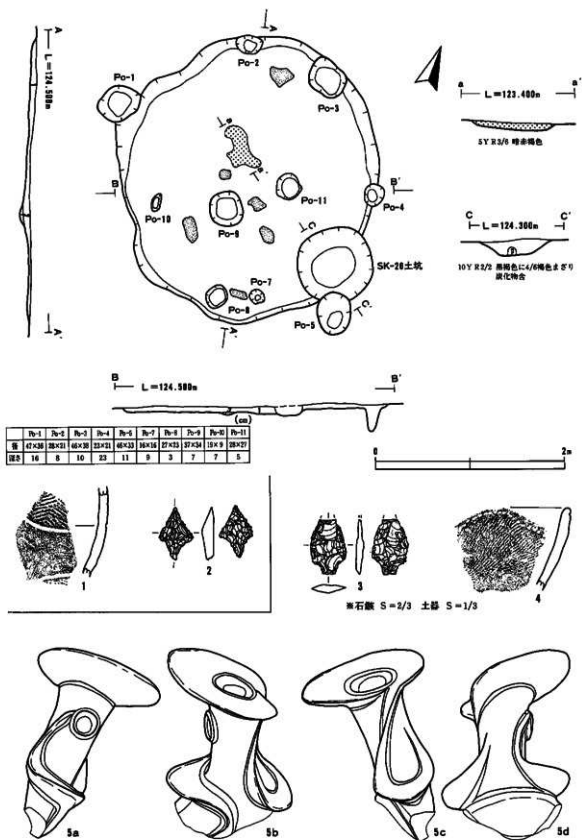


第10図版：SI-09住居跡・SK-23土坑

- 平面形・規模** 平面形は南東方向にわずかに長いものの、概ね円形を呈する。しかし、南側から西側の壁は出入りがあり屈曲している。規模は、南東方向465cm、直交する東西方向418cmである。
- 埋 土** 埋土は基本的に1層であるが、本遺構より古いと考えられる小型土坑（53×56cm、深さ7cm）の埋土を含めると2層となる。
- 埋土1層：わずかに粘性のあるシルト質黒褐色土（10 YR 2/3）で、少量の炭化物粒、土器片、石鏃・剥片などを含んでいる。粘性は極わずかにあり、締りは普通～ややある。本住居跡の埋土は本層だけであり、埋土の2層は別遺構の埋土である。
- 埋土2層：シルト質黒褐色土（10 YR 2/3）と粘土質褐色土（10 YR 4/6）小ブロックの混合土層である。全体的に締りは良好である。
- 壁の状態** 壁の平面的な状況については、平面形・規模のところで述べたように南側から西側にかけては出入りがあり屈曲している。北側から東側にかけては、出入りがほとんどなく一定の弧をえがいている。この地点のⅢ層上部には礫の混在が非常に少なく、礫による凹凸はほとんど見られない。壁の立ち上がりは、40度前後の傾斜で外傾して立ち上がっている。斜面下方側である南側の壁は4～6cmの高さであり、他の部分でも6～8cmと全体的に低い。
- 床の状態** 全体的に南側に傾斜しており、ゆるやかな起伏が認められ、東側の床と炉（焼土）周辺との床面レベルには2～3cmの段差が認められる。床は、特に踏み締められた部分や貼床を施したような形跡も認められない。また、床面および床面からやや浮いた状態で6個の扁平な亜角礫が点在している。これらの礫は、当住居内で使用したものか、住居の廃棄以降に投棄されたものかは不明である。
- 床面で確認した施設・構造としては、床面中央からやや北東側で炉跡と考えられる焼土1ヶ所と新旧の柱穴および小土坑5つである。周溝や壁柱穴は全く確認されなかった。
- 炉について** 炉跡と考えられる焼土層の広がり、焼土層は基本土層を掘り下げた浅い土坑状のくぼみの中に形成されているが、北西～南東方向80cm、北東～南西方向最大幅48cm、層厚5cmの不整形な広がりである。木根等の攪乱によりくぼみの形状は不明瞭である。また、焼土周辺には石囲いの礫を埋設した痕跡は認められない。
- 柱 穴** 床面および壁で確認した柱穴および柱穴状の小土坑は8つであるが関連は不明である。
- 増 改 築** 本住居跡でも増改築の形跡は認められない。
- 遺物の出土** 遺物の出土量は土器片・石器とも非常に少ない。また出土状況は、何れの遺物も埋土1層から出土であり、床面からの出土遺物はない。遺物の出土点数は、土器片4点、石鏃1点の計3点である。
- 土 器** 土器片は、斜行縄文（RLr）のもの1点、沈線区画による磨消縄文部と羽状縄文充填文部とで構成されるもの1点。
- 石 器** 石鏃は尖基有茎石鏃である。

(12) S1-11住居跡（第11図版、写真図版11）

- 検出位置** 本住居跡は、高面層のAⅡ区j-01とk-01にわたって位置しているが、大部分はAⅡ区のj-01に位置している。
- 検出状況** 基本土層のⅠ層、Ⅱ層を除去した段階のⅢ層上面で、埋土のⅠ層であるシルト質黒褐色土～黒



第11図版：SI-10住居跡・SK-26土坑と出土遺物

色土（10 YR 2 / 2 ~ 2 / 3）の楕円形の広がりを確認した。この黒褐色土は、斜面上方と下方とで差が見られたことから複数遺構の重複が考えられた。

重複関係 極新期の小土坑の重複を除けば、特に重複している遺構は存在しない。当初、複数遺構の重複が考えられたが色調の差の原因は、異方向からの質の異なる土砂の流入（同時異層）であった。

平面形・規模 平面形は、長軸である北西～南東方向314cm、直交する短軸方向は北東～南西228cmの楕円形を呈している。長軸方向は、概ね等高線と平行している。

埋 土 埋土は、検出状況の重複関係の中で述べたように、異方向からの同時期堆積であり、基本的には単層と考えられる。しかし、北東側の壁直下には褐色土ブロックを主体とする薄い層が堆積している（埋土2層）。

埋土1層：シルト質の黒褐色土（10 YR 2 / 2 ~ 2 / 3）で、流入方向によって若干の差異が認められたが、区分できるほどの差異は見られなかった。粘性はほとんどなく、締りは弱いか、普通である。

埋土2層：北東側の壁直下に堆積していた極薄い層である。これは、シルト質暗褐色土（10 YR 3 / 3）を主体とし、これに粘土質褐色土（10 YR 4 / 6）の小ブロックが混在している。粘性ややあり、締りもややある。

壁の状態 壁の平面的な状況は、ほぼなだらかな円弧をなしているが、南東側の壁の一部はわずかに突出し、その下の床面は他の床面より5～6cmほど高くなっている。壁の立ち上がりは、40度前後の傾斜で外傾して立ち上がっている。壁面は、後述する床面と同様に礫の露出もなく滑らかである。壁の高さは、部分による差異が大きく4～10cmを計る。

床の状態 床は全体的にゆるやかな起伏をもつとともに、南～南西側に傾斜している。また南東壁側と北側の一部では一段高くなる部分が見られる。床面は、壁際を除いて全体的に固いものの明瞭な踏み締めや貼床等の形跡は認められない。

床面で確認した施設・構造等としては、3ヶ所の焼土と3つの浅い小土坑である。焼土のうち南西側の小さいものは床面にのる焼土ブロック（異地性）で、他の2ヶ所は浅い窪みに形成された焼土である。貯蔵穴・周溝・壁柱穴等の施設・構造は何ら認められなかった。

炉について 炉跡と考えられる焼土は、2つに分かれて形成されているが何れも不整形な浅い小土坑に形成されているものである。aの焼土は、北西～南東方向20cm・直交方向15cmで、層厚は4cm前後である。cの焼土は、南～北方向25cm、直交方向の最大18cm、層厚5cmである。焼土周辺には石垣の礫はもとより礫を埋設した痕跡も認められなかった。

柱 穴 床面および堅穴部周辺で明らかに柱穴であると断定できる小穴は確認できなかった。平面配置では3つの小土坑を確認しているが、何れも極浅いものであり、柱穴とは考えにくいものである。各々の規模は、Po-1が28cm×24cm・深さ4.6cm、Po-2が32cm×24cm・深さ2.8cmで概ね方形を呈し、Po-3は18×15cm・深さ7.6cmである。

増築等 本住居跡でも増築の形跡は認められない。

遺 物 床はもとより、埋土中からも何らの遺物も出土していない。

(13) S1-12住居跡 (第13図版、写真図版12)

高位面のAII区j-03、k-03、k-04にわたって位置しているが斜面下方側である南東側は全 検出位置
く不明である。精査で確認した範囲は、ほぼ3分の1程度と考えられる。

基本土層のI層・II層を除去した段階のIII層上面で、埋土のI層であるシルト質黒褐色土が 検出状況
半円状に広がっているのを確認している。しかし、その分布形状からは住居跡とは考えられな
かった。また、南壁付近は、土層堆積の状態を確認するための試掘で破壊している。

本住居跡より新期遺構の重複は、孤立柱式建物跡の柱穴様に配列する小土坑のひとつが存在 重複関係
する。旧期の遺構としては、SK-27土坑が存在する。

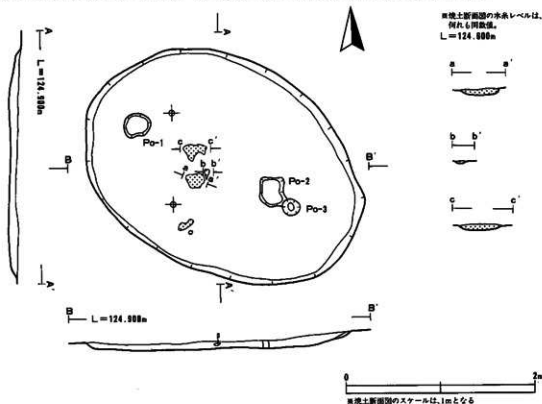
平面形については、斜面下方である南東側が不明のため判断はできかねる。また、規模につ 平面形・規模
いても確認した規模となる。確認規模は、北西～南東方向460cm、直交する北東～南西方向で270
cmほどである。なお、北東～南西方向の計測は床面で確認した焼土の位置と、その南西側のみ
られた床土の範囲である。

埋土は、基本的には2層であるが2層を構成する褐色土と同質土の大ブロックを独立させ、埋 土
全体で3層とした。

埋土1層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)で、下部には埋土の2層を構成する褐色土と同
様の小ブロックが点在する。粘性はほとんど見られず、締りは一定しないが普通～やや
締まっている。

埋土2層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)と粘土質褐色土(10YR4/6)の中小プロ
ックの混合土で、粘性はあるものの締りは一定しない。

埋土3層：粘土質褐色土(10YR4/6)の大ブロック土である。粘性・締り、ともに良好で



第12図版：S1-11住居跡

あるがクラックが見られ、そのクラックには黒褐色土が入りこんでいる。

壁の状態 住居跡全体を把握できなかったことから、全体的なことは不明である。南東壁から北東壁にかけては、70度前後の傾斜で外傾して立ち上がっているが北側の壁は40度弱の傾斜で立ち上がっている。また北西よりの断面図作成位置周辺では30度前後のゆるやかな傾斜で立ち上がっている。壁の高さは非常に不均一であり、南東壁から北東壁は10～18cm、北側の壁は10cm前後を計る。

床の状態 床は全体的に北東から南西方向に傾斜し、またゆるやかな起伏をもっている。床面は、壁際40cmの幅の範囲はやわらかいが床中央よりは非常に固く締まっている。なお、床面で確認した施設・構造としては、2ヶ所の焼土と3つの小土坑である。また、床面の範囲からはずれると考えられるところから小土坑1つと、壁にかかったもの1つを確認しているが、この壁にかかった1つは、本住居跡に伴うものか否かは不明である。

床面で確認した施設・構造は、以上のとおりであるが、床下からはSK-27土坑を検出しており、本住居跡より新期の小型土坑1基も存在した。その他、周溝・壁柱穴・貯蔵穴、あるいは出入口などの施設・構造は何ら確認できなかった。

炉について 炉跡と考えられる焼土は2ヶ所に存在するが、何れも小規模で石囲や石囲の痕跡をもたない。aの焼土は東西方向25cm、南北方向18cm、焼土層厚4～5cm、焼土層厚3cmほどの小規模なものである。bの焼土は東西方向13cm、南北方向18cm、焼土層厚4～5cmほどの小規模なものである。何れの焼土も、その締り具合や炭化物の混合状態からは、浅い小土坑内に形成されたものようである。(小土坑の形成は、焼土形成の過程で焼土がかきまわされて、結果的に小土坑が形成されたものか?)

柱 穴 柱穴は、床面で確認したもの3つ、壁にかかっているもの1つ、壁の範囲外かと思われるもの1つ、の計5つが存在する。柱穴様小土坑の規模は、Po-1: 24×23cm・深さ18cm、Po-2: 34×24cm・深さ14cm、Po-3: 26×24cm・深さ14cm、Po-4: 32×28cm・深さ11cm、Po-5: 34×27cm・深さ13cmである。

なお、Po-4は内部に木根痕の小穴があったことから、柱穴ではなく木根の痕跡である可能性が考えられる。

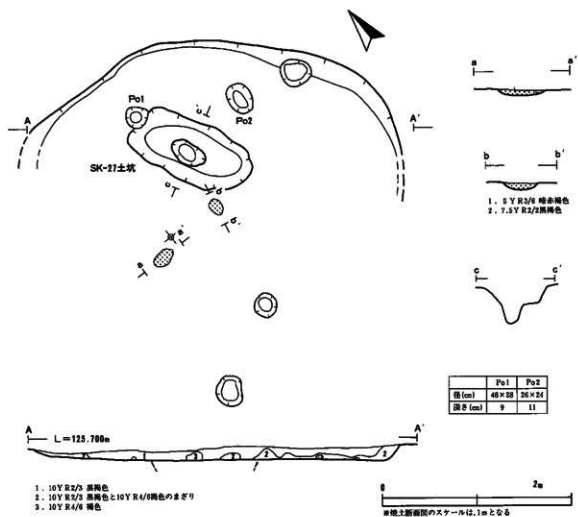
増 改 築 本住居跡でも、増改築を示す周溝・壁柱穴の重層、あるいは柱穴配列の変化などは確認されていない。

遺物出土状況 本住居跡の出土遺物も非常に少なく、床面からの出土、焼土中からの出土など、本住居跡の所属時期を推定できるような出土状態の遺物は何ら出土していない。

(14) S1-13住居跡 (第14図版、写真図版13)

検出位置 高位面のAII区a-03・04・05、およびAII区o-04にわたって位置しているが、AII区o-04については壁の範囲が不明であり、また床の範囲については床面の焼土の位置と、これを基準とした推定床面の範囲も含まれる。

検出状況 本住居跡を検出した区域は、基本土層のIV層～V層の段丘礫層が浮上しているためにIII層が薄い地点である。I層、II層を除去した後、多量の亜角礫～亜円礫が混在したIIIb層?～IV層の上面で不整な円形に広がる黒褐色土ブロックと褐色土ブロックとの混合土の広がりを確認した。



第13図版：SI-12住居跡・SK-27土坑

この検出土の中には大小の礫が混在している。

重複関係 本住居跡と重複する遺構としては、南西側の壁の不明な範囲に位置している土坑（SK-28土坑）が存する。この土坑の確認状況は、本住居跡の埋土1層を除去した床面の範囲で確認したものであるが、埋土の特徴・性状が埋土の1層と同様であったことから、本住居跡に伴うものか、あるいは本住居跡より新しいものの何れかである。しかし、調査の過程では何れとも判断できなかった。また、その北に存在する細長い小土坑SK-29土坑についてはSK-28土坑と同様である。

平面形・規模 平面形については斜面下側である南～南南西側の壁が不明のため断定できかねるが、概ね隅円方形と考えられる。また、規模についても壁・床を確認した範囲での規模となるが、東西方向376cm、南北方向340cmである。南北方向については南側の壁が不明であることからほぼ床と考えられる範囲での計測である。

埋土 埋土は、概ね単層であるがこれを構成する各ブロックの在り方や、上位からの木根等の影響により、大ブロック状の区分線と引いている。ここでは、単層として埋土の特徴を説明する。
埋土：シルト質黒褐色土（7.5YR2/2、10YR2/2～2/3）の大～小ブロック土と粘土質褐色土（10YR4/6）ブロックとの不規則な混合土層である。全体的に上部は黒褐色土が卓越し、下部では粘土質褐色土が卓越するが層界区分は不可能であった。

粘性や締り具合についても、上部は締りが普通かやや良好であるが粘性は見られず、下部は締りが普通～やや良好で、粘性も不均一ながら認められる。その他、大小の亜角礫～亜円礫が不規則に混在する。

壁の状態 壁は、南南西～南の不明な範囲を除くと、30～40度のゆるやかな傾斜で外傾して立ちあがっているが、壁面は礫のため凹凸が見られる。壁の高さは、部分による差異が認められ、4～8cmの高さを計る。

床の状態 床は全体的に凹面状をなしており、かつ北から南側に起伏をもちながら傾斜している。また、床面全体は、大小の礫のため凹凸が認められる。なお、床面は大小の礫で凹凸が認められるにもかかわらず点床の形跡は判別できなかった。

床面で確認した施設・構造としては、住居跡中心から南側に偏って存在する焼土1ヶ所と焼土の西側に位置する2基の土坑、そして床と壁にまたがって形成されている柱穴様の小土坑2つである。この柱穴様の小土坑は、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

床面で確認した施設・構造は、以上のとおりであり、周溝・壁柱穴・貯蔵穴、あるいは出入口などと考えられるものは、何ら確認していない。

炉について 炉跡と考えられる焼土は、住居の南側に偏在しており、その規模・形状は南北方向55×50cm・層厚10cm、の不整形円形に分布している。焼土の周辺には炉を囲った礫や礫を埋設した形跡は認められない。

柱穴 明らかに本住居跡に伴うと考えられるものは確認していないが、南東壁側で2つ検出している。各々の小穴の規模は、Po-1が30×21cm・深さ16cm、Po-2が18×15cm・深さ8cmである。

増改築 本住居跡でも増改築を示す周溝や柱穴の重層、あるいは柱穴配列の変化などは確認できなかった。

遺物 本住居跡からは、何ら出土していない。

(15) SK1-01住居跡 (第15図版、写真図版14・20)

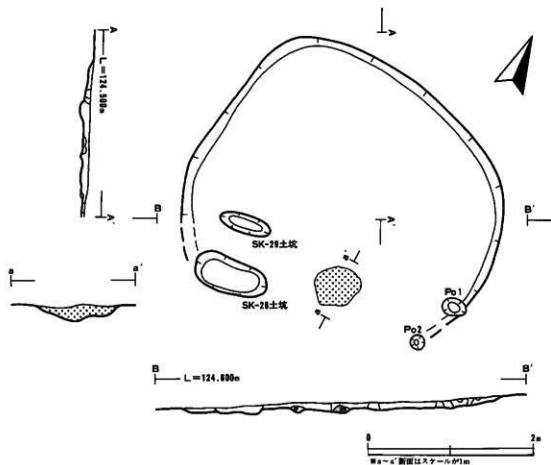
検出位置は、高位面のAⅠ区o-25とAⅡ区のo-01にわたっており、SI-09住居跡の東北東 検出位置 約2mに位置している。

本遺構の検出状況は、SI-09住居跡と同様に高位面Ⅲa層である火山灰質褐色土層の上面 検出状況 で、不整楕円形を呈するシルト質黒色土 (10YR 1.7/1) の広がりと、黒色土から突出する数個の 亜角礫を確認した。本住居跡周辺のⅢ層には大～小の亜角礫が混在することから、黒色土の 広がりは極く浅いくぼみに残ったものと思われた。

埋土の差異からは重複関係は不明であるが、平面形および床面の起伏状態、南西側の落ちこ 重複関係 み部の土器片や礫の分布状況からは2つ以上の遺構の重複が考えられる。

平面形は不整な楕円形を呈している。規模は、北東～南西方向の長軸長が、370cmで、北西～南 平面形・規模 東方向にある短軸長が228cmで、南西側の床にはおよそ10cmほど掘りこまれている土坑が存在す る。なお、本竪穴遺構の長軸方向は地形斜面に斜行する方向にある。

埋土は3層に細分したが、埋土の2層は炉跡と考えられる焼土周辺に分布する層であり、遺 埋 土



第14図版：SI-13住居跡・SK-28・29土坑

遺構の埋土が堆積する過程で埋土の1層と炉跡と考えられる焼土の一部が移動・混在した層と考えられる。

埋土1層：中～小礫を含むシルト質黒色土(10YR1.7/1)に同黒色土(10YR2/1)の小ブロックが混在する。また南西側の本層下部には、中小礫とともに縄文土器片が混在する。粘性はなく、締りも良くない。

埋土2層：シルト質暗褐色土(10YR3/4)に暗赤褐色の小焼土ブロック(5YR3/4)が混在する層である。粘性はわずかにあり、締りは普通かややある程度である。なお、本層中には大～中礫が点在するが、それら礫の表面には火熱等による変色の痕跡は確認されない。

埋土3層：砂質の褐色土(10YR4/6)に砂質～シルト質の暗褐色土(10YR3/3～3/4)の小ブロックが混在する層である。粘性・締りともにある。

壁の状態 壁は全体的にゆるやかに、かつ内湾状に立ちあがっているところが多く、床面との境界も不明瞭なところが多い。南西端の壁は、外傾して直線的に立ち上がっている。壁面は、木根痕や礫の点在により起伏が見られる。壁の高さは、場所による差が大であるが6～28cmの範囲にある。

床面の状態 床面全体は、ゆるやかで大きな起伏をもちながら北東から南西に傾斜しており、中央から南西側では土坑に向かって急傾斜となっている。また、床面は壁面と同様に木根痕による小起伏も見られる。

床面で確認した施設・構造としては、前述の土坑の他に炉跡と考えられる焼土1基が存在する。また、床面ではないが北西壁の上端付近で柱穴様の小穴1つを確認した。

床面の焼土周辺から北東側は、固く締まっているが、南西側は特に固く締まっている様子は見られない。また、貼床の形跡も認められない。

土坑について 南西端の土坑の規模は、北西～南東方向が75cm、直交する北東～南西方向50cm、深さ10cmで、埋土上部からは図示した土器片7点が出土している。

炉について 炉跡と考えられる焼土の広がり、南北方向30cm、東西方向48cm、の不整形円形で、焼土層の厚さは5cmほどである。焼土周辺には、石囲や礫を埋設した形跡は認められない。

柱穴 柱穴と考えられる小土坑は、北西の壁上端に重複するもの1つを検出しているが本遺構に伴うものかどうかは不明である。柱穴様小土坑の規模は、24×27cm、深さ18cmである。

増改築 本遺構でも増改築の形跡はみとめられない。

遺物出土状況 図示した遺物(土器片7点)は、本遺構の埋土1層中からの出土であり、床状面に接したもののや焼土中からの出土遺物はない。

土器 第15図版の1・2は、口縁突起部である。3は深鉢形土器の破片でLRIを地文としその上に平行沈線文と垂下する連続S字状沈線文、あるいは弧状沈線文が重複施文されている。4・5は、同一個体の破片と思われるが接合はしない。4・5の文様は曲沈線文によって斜行縄文部(LRI)と無文部とが区画されているが全体的な文様構成は不明である。6・7は深鉢形土器の口縁部破片で、斜行縄文LRIが施されている。

2. 土坑

検出した土坑は35基であるが、他遺構との重複から全体形状が明確でないものも存在する。平面形態としては円形～楕円形でやや深く貯蔵穴や陥し穴遺構と考えられるもの、平面形態が楕円形～小判形を呈するもので内部の配石状態や埋土から土坑蓋と考えられるものなどが含まれている。

(1) SK-01土坑 (第16～19図版、写真図版21～23)

低位面のA I区P-06・07グリッドおよびA I区Q-06・077にわたって位置している。 検出位置
表土であるI層を除去した段階で本遺構?群の上位に分布する攪乱土、黒褐色土を除去した 検出状況
段階で不整形に広がる有機質のシルト質黒色土を確認した。

極新期の土取跡の下部から検出したものであるが、精査の結果少なくとも竪穴遺構3棟、2 重複関係
つの柱穴、3基の土坑の重複であったと考えられる。重複遺構全体の新旧関係は不明であるが、
Po-1とした柱穴様土坑(70×50cm・深さ90cm)が最も新しく、次いでPo-2の土坑が新しいよ
うである。1・4・5の竪穴遺構については、1が最も古く、次いで4、そして5の順に重複してい
る。なお、1・4・5の竪穴遺構より2・3の土坑は新期と考えられる。

平面形については、2・3は円形および楕円形、1および4・5は楕円形～不整の楕円形と考えら 平面形・規模
れるが、何れの遺構も不明瞭である。規模については、判明している部分だけからは以下のよ
うになる。

1: 380×320cm・深さ30cm、2: 195×160cm・深さ132cm、3: 130×(85+X)cm・深さ105cm、
4: 248×(220+X)cm・深さ65cm、5: 280×(170+X)cm・深さ87cmである。

埋土は、Po-1の大型柱穴を除くと、最終に近い大型土坑(Na2)の埋土として2次移動・堆 埋 土
積を一つの状態となっており、重複遺構と考えられる各遺構の埋土としては区分できない。
埋土1a層: シルト質黒色土(10YR1.7/1)で少量の褐色土小ブロック、炭化物片・大～小礫と
多量の土器片を含む。粘性はなく、締りは普通かややあり。

埋土1b層: シルト質～細砂質の黒褐色土(10YR2/3)で、粘性はわずかに見られるが締りは
あまりない。土器片、炭化物片、礫が不規則に混在する。

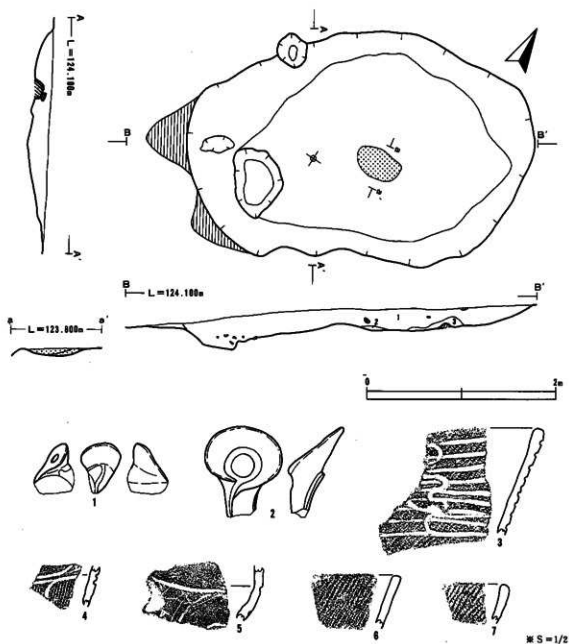
埋土2層: シルト質黒褐色土(10YR2/3)に粘土質褐色土(10YR4/6)が不規則に混在した
層で黒褐色土中には礫・炭化物片が混在する。粘性はややあるが一定しない。締り
は良好である。

埋土3層: シルト質黒褐色土・粘土質黒褐色土(7.5YR2/2・10YR3/2)、粘土質暗褐色土
(10YR4/4)の不規則な混合土層である。粘性ややあり、締り普通～やや良好。

埋土3b層: 粘性のあるシルト質黒褐色土(7.5YR3/2)と黒褐色土(7.5YR2/2)の不規則な
混合土層で多くの土器片とやや多めの炭化物片を含む。

埋土4層: aとbに細分したが、本層は壁等の地山である粘土質褐色土(10YR4/6)の崩落、2
次堆積層であり、各細分層は粘土質を主体とした層(a)と砂質が強い質(b)とに
区分した。

全体的に平面・断面とも屈曲や段差が多く、表現しにくい面がある。Na1の壁は外傾して急速 壁の狀態
に立ち上がっており、Na2の土坑の壁は東～南西側では多少の屈折がみられるものの垂直に近い

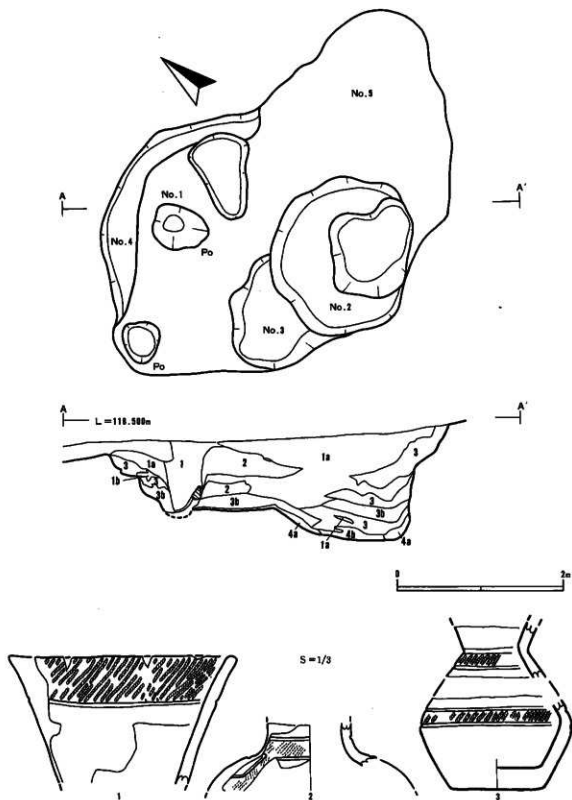


第15図版：SKI-01壑穴遺構と出土遺物

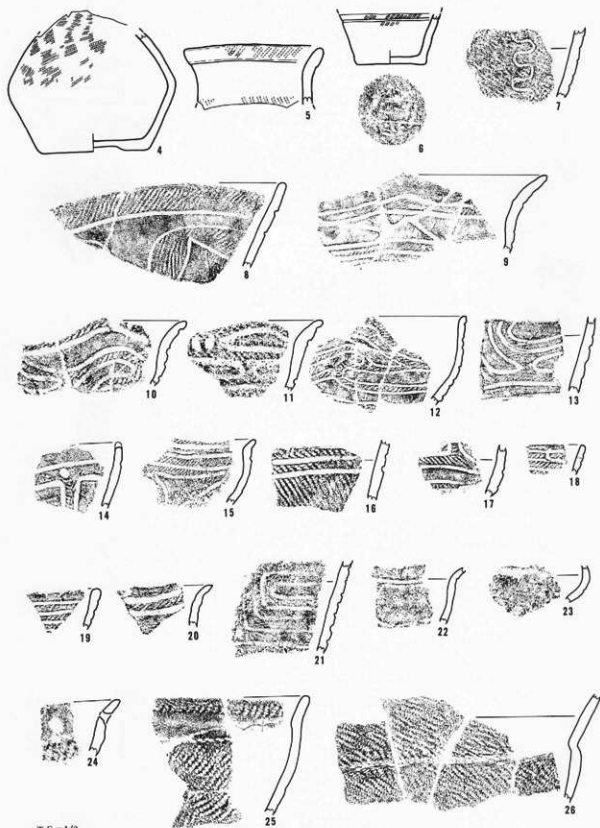
- 状態で立ち上がっている。No3の土坑の壁は外傾しながら急速に立ち上がっている。No5の壁は、床から外傾して立ち上がった後、ほぼ垂直に立ち上がっている。No4の壁は全体的に外傾してややゆるやかに立ち上がっているが、南壁・北壁は急速に立ち上がっている。
- 床の状況** 何れの遺構もゆるやかな起伏をもっている。竪穴遺構と考えられるNo1とNo5の床面は概ね平坦である。No4の床は、全体的にゆるやかな凹面をなしている。
- 柱状について** 竪穴遺構に伴うと考えられる柱穴は存在しない。また、壁柱穴・周溝は存在せず、焼土等も重複による破壊・攪乱により不明である。
- 出土状況** 遺物は、埋土全体から出土しているが埋土の1a層と3層から最も多く出土している。何れの遺構でも床面からの出土は見られない。第16図版～第19図版(写真図版20～23)に示した土器片・土偶片・剥片石器・石弁・石皿が本遺構群からの出土遺物である。
- 土 器** 器種・器形は、壺形土器の破片や部分品(第16図版1～3、17図版4～6、写真図版21～1～7)、平縁の鉢形土器片(第17図版8、写真図版21～9)、波状口縁の深鉢形土器破片(第17図版9～26、写真図版21～10～12)、注口部破片(第18図版28、写真図版22～14)、そして深鉢形土器の体部破片や底部破片が出土している。
- 土 製 品** 頭部、体部下半等を欠損した土偶片や土偶の足部、上胸部(第18図版35～37、写真図版23～4～6)の3点が出土している。
- 石 器** 様々な形態の石鏃6点(第19図版38～43、写真図版23～7～11)、尖頭器楯石器2点(第19図版44、45、写真図版23～12・13)、剥片の一端を調整した石錐(第18図版47～49、写真図版23～14～16)、剥片の一端に調整を加えて搔器・削器としたもの(第18図版50、写真図版23～17)、基部側を欠損した磨製石弁(第18図版51、写真図版23～18)、不整形な石皿(第18図版52、写真図版23～19)が出土している。

(2) SK-02土坑(第20図版、写真図版17)

- 検出位置** 低位面のAI区r-06・07にわたって位置しており、また敷石住居跡であるSI-01住居跡の西側に位置している。
- 検出状況** SI-01住居跡やSK-05土坑と同様にIV層の粘土質褐色土層の上面で、楕円形に分布する埋土の1層(低位面の基本土層III層と同じ性状)を検出した。本土坑は他遺構との重複は認められない。
- 平面形・規模** 精査の結果、平面形は一端が長方形に、他の一端は楕円形をなす不整形な形態を示している。土坑の長軸は概ね西北西～東南東方向にあり、その法量は上端168cm、同下端143cmである。また、長軸に直交する北北東～南南西方向では、上端58cm、同下端38cmを最大値としている。深さは部分による差異が若干見られるものの32～34cmである。
- 埋 土** 埋土は2層に細分した。埋土の上部は低位面の基本土層III層と同様であり、下部は黒色を呈する。
- 埋土1層：粘土質黒褐色土(10YR3/2)で、粘性・締りともに基本土層よりは弱い。土層中には炭化物・土器片細粒・小礫を含むが、時期の判明するような土器片あるいは石器等の遺物は含まれていない。なお、左右に細分しているが、これは炭化物等の量により区分したもので、図の右側に多く含まれる。

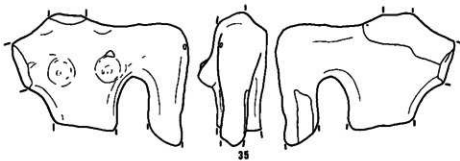
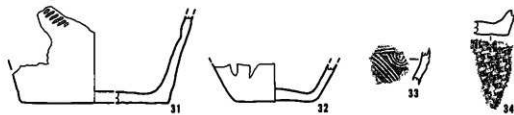
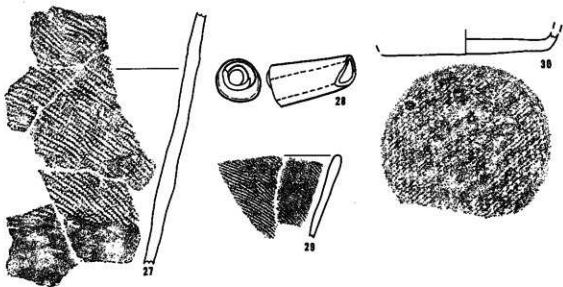


第16図版：SK-01土坑他と出土遺物(1)



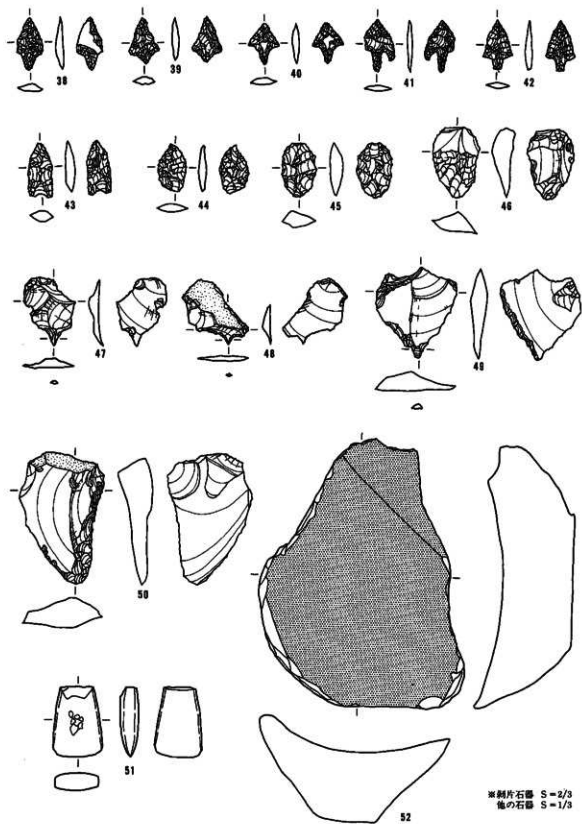
※ S = 1/3

第17図版：SK-01土坑出土遺物(2)



■土器 S=1/3
 □土製品 S=1/2

第18圖版：SK-01土坑出土遺物(3)



第19図版：SK-01土坑他出土遺物(4)

埋土 2 層：シルト質黒色～黒褐色土(10YR1.7/1～2/1)に粘土質暗褐色土(10YR3/3～3/4)や褐色土(10YR4/4)の中小ブロックが混在する。また土層中には石鏝1点・炭化物片・小礫を少量含む。粘性ややあり、締りはやわらかい。

底面・壁の状況 底面は全体的に地形傾斜と同方向にわずかに傾斜し、多少の起伏が認められる。壁は、何れの部分でもやや内湾ぎみに外傾し、急速に立ち上がっている。

その他 床面や壁、周辺には何ら付随する施設・構造は認められない。遺物も出土していない。

遺物 埋土 2 層から出土した石鏝 1 点は、両翼端が欠損した凹基有茎の石鏝である。加工調整は両面に施されているが、やや粗い調整剥離である。現存量量は長さ1.9cm、最大幅1.4cm、最大厚0.3cmである。

(3) SK-03土坑 (第21図版、写真図版15・24)

検出位置 低位面のAI区q-09・10にわたって位置しており、またSI-01住居跡の北東側およそ3.5mに位置している。

検出状況 検出状況は、SI-01住居跡やSK-04・05土坑などと同様に低位面のIV層上面で、明確な平面形を確認した。平面形を確認する前段階に不整形円形に分布する黒褐色土を確認していたが、III層中では平面形の確認には至らなかった。

平面形・規模 精査の結果、上端形状と中～下端形状とが大きく異なる土坑であり上端形状は不整形楕円形を呈し、中端・下端は略円形を呈する。上端形状の長軸方向はほぼ南～北にあり、その径は155×122cmである。中端径は82×90cm、下端径は70×75cmで、深さは部分による差異がみられ36～40cmである。

埋土 埋土は2層に細分した。埋土上部の1層は、遺構の平面形を確認する前段階に、III層下部で確認した黒褐色土である。

埋土 1 層：シルト質～砂質の黒褐色土(10YR2/2)で10～40mmの礫と、土器片数点を含む。粘性はほとんどなく、締りは普通～やや締りのない土層である。下部には大礫数点が不規則に存在。

埋土 2 層：やや粘性のある暗褐色土(10YR3/4)で、土坑上端から床面までと柱穴小穴の埋土として不定な層厚で堆積している。締りは普通かややなし。炭化物片を少量含む。

底面・壁 底面は全体的に弱凹面をなしてゆるやかな凹凸がみられ、東壁よりでは底面と壁との境が不明瞭である。壁は多少の凹凸はみられるものの東側では内湾ぎみに立ち上がり、南～東にかけては直線的にかつ急傾斜で立ち上がっている。

その他 底面や壁には何ら付随する施設・構造は認められないが、新旧関係が不明な小穴3基が、上端縁等に重複している。これらの小穴は、径20～25cmで深さは8～12cmほどである。

遺物 出土遺物としては、黒曜石破片 1 点、縄文土器片 5 点が出土しているが、縄文土器は図示した3点を除くと、文様・部位が不明である。

(4) SK-04土坑 (第21図版、写真図版24)

検出位置 検出位置は、低位面のAI区q-09、r-09・10にわたって位置しており、またSI-01住居跡の東側約2mほどに位置している。

検出状況は、SI-01住居跡等と同様に低位面のIV層上面で明確な平面形を確認した。平面形を確認する前段階にIII層の下部で不整な楕円形に分布する黒色土・黒褐色土とそこに点在する礫を確認した。また、平面形状を確認した段階で掘立柱式建物跡(SB-01)の柱穴が北北西端付近に重複していることも判明した。

精査の結果、上端形状と下端形状とが異なる大型土坑となった。土坑の北北西側約2分の1は長方形様の上端形状で、南南東側は円～楕円形様の形状を呈する。下端は、上端に比べて狭くなり溝状を呈する。なお、上端と下端の間にも不規則な段差や狭い平坦部が見られる。長軸方向は北北西～南南東にある。

上端の長軸方向は326cm、同短軸方向は最大200cm、同最小108cmである。下端の長軸方向は200+Xcm、同短軸方向は14～35cmの間にある。深さは、柱穴様のくぼみを除くと、最深84cm、その他は55～70cmである。

埋土は5層に細分したが、各層の堆積状況は不整合堆積で土坑底部から埋土の1層まで不規則に巨礫～大礫が混在する。また同一層とした層でも堆積方向によってやや性状が異なる。

埋土1層：北北西側ではシルト質黒色～黒褐色土(10YR2/1～2/3)に赤褐色土(5YR4/8)の小粒子が点在し、また下部では粘土質褐色土(10YR4/6)の小ブロックが不規則に混在する。南南東側ではシルト質黒色土(10YR1.7/1)中に褐色土の小粒子(10YR4/6：径2.5mm)が点在し、下部には同様の土の小ブロックがわずかに混在する。本層には巨礫～小礫が不規則に混在し、礫と共に数点の土器細片が含まれている。粘性はなく、締りはややあり。

埋土2層：黒褐色土(10YR2/2)に粘土質褐色土(10YR4/6)のブロックが斑点状に点在し、大～中礫が散在する。なお、下部には褐色土がやや多くなる。粘性はなく、締りは普通。

埋土3層：暗褐色土(10YR3/3)に粘土質褐色土(10YR4/6)が斑点状に混在。粘性ややあり、締り普通。

埋土3層：埋土の3層に黒色土ブロック(10YR2/1)が混在する。

埋土4層：黒色土・黒褐色土・褐色土の不規則な混合土層である。

埋土5層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)に10～30mmの褐色土ブロックが点在。

底面は全体的に起伏が強く、長軸方向・短軸方向とも凹面状をなしている。また、底面の北北西端は掘立柱式建物跡を構成する柱穴によって破壊されており、不明である。

壁は、南東側を除けば内湾状に立ち上がっているものの、各部によってその傾斜、立ち上がり方には差異が見られる。また、壁面には小起伏が見られる。

底面や壁には、柱穴底部か木根痕かと思われる浅いくぼみが見られるが、本土坑に付随するものか否かは不明である。さらに、土坑周辺にも浅いくぼみや溝状のくぼみが見られるが、これらについても本土坑との関わりは不明である。

出土遺物は図示した3点を除くと何れも極小さな土器細片であり、縄文等の文様の判明するものは出土していない。

- 1：口縁部破片で小波状の口唇直下に並行する2条の沈線(沈線重複部か?)さらにその下位には、沈線で区画された帯状の縄文帯(斜行縄文LR1)と無文帯とが1条の沈線で区画され

ている。

- 2：頸部付近の破片で、文様は沈線で区画された縄文帯(斜行縄文LR1)と磨消無文帯が交互に並ぶものと思われるが口唇部よりが欠けているため不明である。体部側の縄文は、条状が縦走するように施文したのち下位は斜行するように施文している。
- 3：粗製深鉢の口縁部破片で、文様は地文？としての斜行縄文(LR1)だけである。

(5) SK-05土坑(第20図版)

検出位置 検出区域は、低位面のAI区s-09とAI区t-09にわたって位置している。周辺の北側などにはSI-01住居跡やSK-03・04の土坑が存在する。

検出状況 検出状況はSK-04土坑やSK-03土坑と同様にIII層を掘り下げている途中で不規則に散在する大礫～巨礫等(5～40cmの偏平な亜角礫・角礫)によって遺構の存在は予測できたが、平面形を確認したのはIV層上面付近である。

平面形・規模 平面形は不整な楕円形で、その長軸方向は概ね北東～南西の方向にある。規模は、長軸方向上端278cm・同下端243cm、直交方向上端108cm・同下端82cm、深さは40～45cmである。

埋土 埋土は、細分できなかつたが上部は粘性のあるシルト質黒褐色～暗褐色土(10YR3/2～3/3あるいは10YR3/4)が不規則に混在分布するが、埋土の下部は10～20cmの亜角礫が散在するシルト質暗褐色土(10YR3/4)である。全体的には、大小ブロックによる構成であり、粘性はわずかに見られ、締りは普通である。

なお、北東側に存在する土坑部の埋土は、本土坑の埋土と識別できなかつたが、わずかに締まりがないことから、本土坑と直接関係するものではない可能性が高い。

底面・壁 底面は全体的にゆるやかな小起伏が見られ、斜面上方である北東側が高くなっている。壁は、何れも弱い内湾状か、やや外傾して立ち上がっており、壁面には小凹凸が見られる。北東側に存在する2つの土坑は、直接に本土坑と関わるかどうかは不明であるが、それらの規模は大きいほうが径64×56cm・深さ36cm、小さいほうが径50×40cm・深さ29cmである。

その他 前述した底部の土坑2基のほかには、本土坑に関わる施設・構造は底面はもとより土坑周辺にも何ら存在しない。なお、土坑上部に散在した礫の岩質は石灰岩・粘板岩・砂岩であるが石灰岩は少ない。

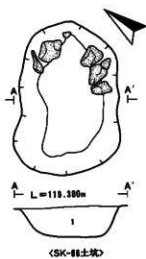
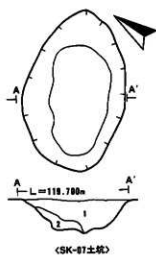
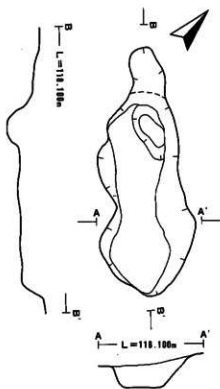
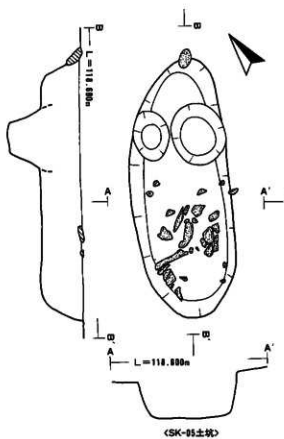
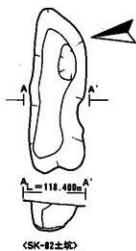
遺物 出土遺物はない。

(6) SK-08土坑(第20図版、写真図版16)

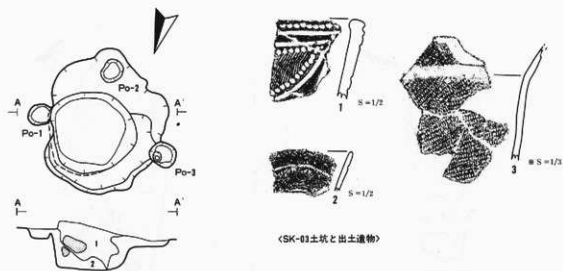
検出位置 検出位置は、低位面のAI区w-09・10にわたって位置している。周辺の最も近い遺構としては南東方向2m程のところにSK-09土坑が存在する。

検出状況 検出状況は、低位面に位置する他の遺構と同様に、基本土層のIV層上面で埋土の上部であるシルト質黒褐色土の広がりとして確認した。

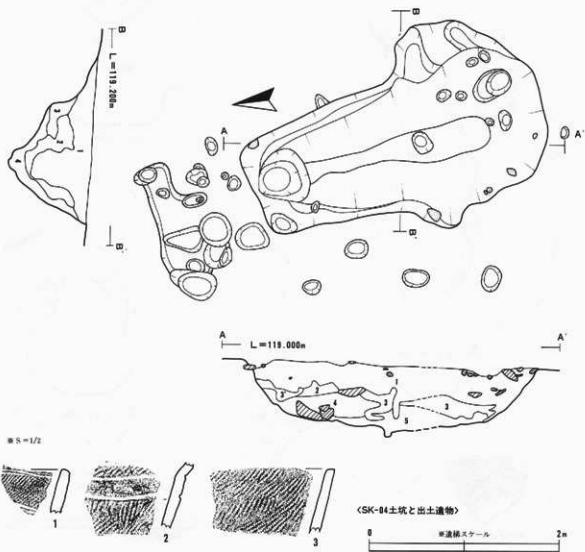
平面形・規模 平面形は、不整な楕円形で、その長軸方向は北西～南東方向にある。規模は、長軸方向上端216cm・同下端が197cm、直交方向の上端最大値が98cm・同下端最大値が64cmである(長軸上端は北西端側を掘り過ぎていることから破線部までを計測)。深さは、底面に起伏が見られることから概ね23～27cmの範囲にある。北西側の底面には、底面より約12cmほど掘り下げられた小土



第20図版：SK-02-05-06-07-08土坑



<SK-03土坑と出土遺物>



<SK-04土坑と出土遺物>

第21図版：SK-03・04土坑と出土遺物

坑 (60×30cm) が存在する。

埋土は細分できなかったが、上部は粘性のある暗褐色土 (10YR3/4) に黒色土や褐色土の大塊が混在している。混在するブロック土の量は、上部は少なく下部ほど多いが、底面近くでは非常に少ない。北西側に存在する小土坑の埋土は、土坑底面近くの土と同じである。

底面は、全体的に起伏が認められ、底面長軸方向の北西側には前述したように楕円形の小土坑様のくぼみ部が設けられている。

壁は、南西端の掘りすぎ部を除けば、何れの壁も傾斜して立ち上がっているが外傾度は部分によって大きな差異が認められる。また、壁面には、小起伏がみられる。

土坑内および土坑に近接した範囲には、本土坑に付随する施設・構造は認められない。その他土器片数点が出土しているが、文様の判明するものは図示した1点である。器厚はおよそ6mmで、文様は無文の地文の上に5本1組のクシ歯様施文具によって曲線文様が描かれている。

(7) SK-07土坑 (第20図版、写真図版15)

検出位置は、低位面中央付近のAI区a-12に位置しており、周辺に近接する遺構は存在せず、検出位置最も近い遺構としては北西側の6~7m付近にSK-04土坑、SB-01掘立柱式建物跡がある。また、南側の6~7m付近にはSK-08土坑が存在する。

検出状況は、低位面に位置する他の遺構と同様に基本土層のIV層上面でシルト質黒褐色土に褐色土が散在する埋土上部の広がりを確認した。

平面形はやや不整な楕円形で、その長軸方向は概ね北東~南西方向にある。規模は、長軸方向上端172cm・同下端118cm、直交方向の上端110cm・同下端の最大幅62cmで、深さは概ね31cmであるが、底面が起伏しているため最深部は35cmを計る。

埋土は2層に細分した。
埋土1層：シルト質黒褐色土 (10YR2/3) に10%前後の粘土質褐色土 (10YR4/6) が混在する。褐色土部では粘性・締まりがあるものの全体的には粘性も締まりも弱い。全体的に小~中礫が散在する。

埋土2層：粘土質褐色土 (10YR4/6) と暗褐色土 (10YR3/3) との不規則な混合土層で、石英粒・黒色の斑晶鉱物などが多く含まれている。全体的に粘性が高く、締まりもある。

底面は全体的に起伏が見られるが、極度の傾斜や凹面状などの状態は見られないが、平面形状は不整形である。

壁は、南西側を除けば外傾かつ屈曲して立ち上がるが、壁面の外傾度は部分によって差が見られる。

壁面や床面、そして土坑周辺には本土坑に付随する施設・構造は何ら認められない。形状や時期の判明する遺物は出していない。

(8) SK-08土坑 (第20図版、写真図版15)

検出位置は、低位面のAI区u-12に位置している。周辺に近接する遺構は存在せず、最も近い遺構としては南南西約6mの位置にSK-10土坑が、ほぼ南側の約6.5mほどの所にSK-07土坑

が位置している。

検出状況 検出状況は、低位面に位置する他の遺構と同様に基本土層のIV層上面で、シルト質黒褐色土の広がりとして確認した。

平面形・規模 平面形は不整な楕円形、あるいは隅丸長方形とでも表現するべきか、判断できかねる形状である。その長軸方向は概ね北東～南西の方向にある。規模は、長軸方向上端164cm・同下端128cm、直交方向上端113cm・同下端70cm、深さは27～31cmの範囲にある。深さの変化は検出面の傾斜との関係からであり、底面はつぎのべるよう概ね水平である。

埋土 埋土は細分できなかったが、上部には樹木等の細根が入り込んでいる。埋土の性状等は、シルト質黒褐色土(10YR2/3)で、粘土質褐色土(10YR4/6)の小ブロックが点在(1%強)し、中～小礫を少量含む。

底面・壁 底面は概ね水平、かつ平坦であり、木根痕等の小穴は見られるもの目立った起伏は認められないが、底面形状は不整形である。

壁は、何れの部分でも外傾し、かつ急速に立ち上がるが壁面の外傾度は部分によって差が見られる。

なお、北東側の底面には大小7個の垂角礫が壁に沿って配置されており、その岩質は粘板岩と石灰岩である。

その他 底面や壁面には、前述した大小7個の垂角礫の配置を除けば、何らの施設・構造は認められない。また、土坑周辺にも何ら認められない。

遺物 出土遺物はない。

(9) SK-09土坑(第22図版、写真図版16)

検出位置 検出位置は低位面の南端であるAI区w-09とAI区x-09にわたって位置している。周辺の近接する遺構としては、北西側約2mのところにSK-06土坑が位置しており、東側4mのところにはSK-10土坑が位置している。

検出状況 検出状況は、SK-06土坑やSK-10土坑と同様に、低位面の基本土層IV層の上面でリング状に分布する埋土の2層とその中に分布する埋土の1層を確認した。

平面形・規模 平面形は概ね円形を呈しているが、断面形・立体形状は砲弾形を呈している。上端は108×105cm、深さ91cmである。なお、中位よりやや下にわずかな段がみられる。

埋土 埋土は2層に細分した。堆積状況は、明らかに自然埋没の層相を示している。

埋土1層：やや粘性のある極暗褐色土(7.5YR2/3)で、層の中には大～中礫が混在している。
締まりは、普通～ややある。

埋土2層：やや粘性のある暗褐色土(10YR3/4)で締まりは良好である。

底面・壁 底面は砲弾の光端状をなしていることから面としては把握できない。この底面のほぼ中央には径が14×11cm・深さ21cmの小穴を確認している。

壁面には、若干の起伏が認められるものの、底部から内湾して立ち上がり、上端付近で垂直となる。

その他 土坑内、および土坑周辺には、本土坑に関連する施設・構造としては、前述した底部の小穴以外は何ら認められない。

出土していない。

出土遺物

(10) SK-10土坑 (第22図版、写真図版16・24)

検出位置は、低位面のAI区w-11とw-12にまたがって位置している。周辺の遺構としては、検出位置SK-09土坑やSK-06土坑・SK-08土坑が存在する。

検出状況は、SK-06土坑やSK-09土坑と同様に低位面の基本土層III層を除去した段階のIV 検出状況層上面で埋土1層にあたる黒褐色土を確認した。

平面形は、木根等による破壊もみられるが不整な隅丸長方形である。その長軸方向は東南東 平面形・規模～西北西の方向にある。規模は、長軸方向の上端262cm・同下端238cm、直交方向は部分による変化が大であるが、上端幅68～90cm・同下端幅が40～61cmである。深さは、底面に段差があったり起伏しているため30～38cmである。なお、底面の東南東端は上端よりわずかに外に張り出している。

埋土は2層に細分した。

埋土

埋土1層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)で、10mm前後の亜角礫・亜円礫が少量混在する。粘性はわずかにあり、締まりは普通かやや締まっている程度である。

埋土2層：ブロック状を呈する粘土質褐色土(10YR4/6)で本層と底面との間には極薄い暗褐色土(10YR3/3～3/4)が存在するが、層としての区分は不可能であった。粘性は強く、締まりも良好である。

底面の長軸方向には起伏や段差が見られ、直交方向ではやや凹面状をなしている。底面には 底面・壁付随する施設・構造等は、何ら認められないものの、段差が認められる。

壁は、平面的には曲折しており、また底面からの立ち上がり方も部分による差異が見られる。全体的に南南西側の壁は外傾しながら急速に立ち上がっており、その反対の北北東側の壁はゆるやかな外傾度で立ち上がっている。壁面には礫の突出や起伏が認められる。

土坑内、および土坑周辺には、本土坑に関連する施設・構造は何ら認められない。

その他

図示した土器片11点の他に、風化・磨耗が著しく文様・部位が不明の細片が数点出土している。図示した土器片は、小型土器の底部でその径は5.5cmである。底面はアジロの圧痕が見られるが、磨耗のためその組み方は不明瞭である。

出土遺物

(11) SK-11土坑 (第22図版、写真図版16)

検出位置は、高位面の西端部で段丘崖にかかる斜面部にあたるAI区t-15に位置している。周辺の遺構としては、東～東北東にS1-02～08住居跡群が位置している。

本土坑周辺は、部分的に基本土層II層が欠如しているため旧耕作土であるI層の直下にIII層 検出状況が現れた。このIII層面ではほぼ円形に広がる砂礫質の黒褐色土を検出した。

平面形は上端・下端ともに不整な円形および楕円形で、上端径は168×157cm、下端径は88× 平面形・規模96cm、深さは底面が起伏していることから80～75cmを計る。

埋土は4層に細分した。これらの埋土のうち次に述べる2層と4層は同質土であり、この層は基本土層のIIIa層の土を供給源としている。

埋土

埋土1層：砂礫を多く含んだ黒褐色シルト質土(10YR2/3)である。含まれる砂礫は数cm～数

mmの歪角礫である。粘性は認められず、締まりは良好である。

埋土2層：砂礫質の褐色土（10YR4/4）である。層としては褐色土のブロック構成である。粘性はややあり。締まりは良好である。

埋土3層：暗褐色（10YR3/4）を呈する砂礫質の粘土で、含まれる礫は10cm前後の歪角礫を中心に数mmまでのものが含まれる。粘性がややあり、やや締まりがある。

埋土4層：基本的には2層と同様の砂礫質褐色土（10YR4/4）で含まれる砂礫の粒径も同様である。2層と相対的に異なるのはブロックが小さいことである。

底面・壁 底面は、起伏が見られるが木根痕を除いて極度の起伏は見られない。平面形は先に述べたように不整な円形を呈しており、底面では何らの施設・構造も認められなかった。

壁は、何れの部分も外傾して急速に立ち上がっているが、北側の壁は他に比較して緩やかである。壁面は、礫の突出・木根痕による起伏が見られ滑らかな面とは言えない。

その他 壁面や底面として本土坑周辺には本土坑に付随する施設・構造は何ら認められない。

遺物 風化・磨耗した土器細片が埋土1層から出土しているが、文様・部位は不明である。

(12) SK-12 (A・B) 土坑 (第23図版、写真図版17・24)

検出位置 検出位置は、高位面のAI区n-19、AI区o-19・20にわたって位置しており、周辺のもっとも近い遺構としてはAI区n-21他に位置するSK-13土坑である。

検出状況 検出状況は、高位面の基本土層III層上面で埋土の1層であるシルト質黒褐色土の不整な広がりを確認した。調査当初、木根等の痕跡が多いことから本土坑は不整な自然くぼ地かと思われたが精査の結果、比較的浅い土坑2基の重複であることが判明した。

平面形・規模 2基の土坑とも平面形は不整な楕円形であったと考えられるが、木根や重複等による破壊のため何れの土坑も全体形状は不明である。以下に現存部についての説明を行なう。

SI-12A土坑：長軸方向は西南西～東北東の方向にあり、長軸上端239cm・同下端218cm、直交方向上端166cm・同下端153cm、深さは26～28cmであるが部分的に35cmを計るところも見られる。

SI-12B土坑：長軸方向は南南西～北北東の方向にあり、長軸上端246cm・同下端210cm、直交方向上端118cm・同下端78cm、深さは7cm前後で部分的な凹地では14cmを計る。

埋土 埋土は2基の土坑に共通する層区分である。埋土1層の状態からは土坑ABの新旧関係は不明瞭であるがB土坑の底面はA土坑の埋土中に延びていないことからA土坑が新しくB土坑が古いものと考えられる。

埋土1層：シルト質黒褐色土（10YR2/3）で、炭化物片・歪角礫（30～5mm）が混在する。また、わずかながら粘土質褐色土（10YR4/6）が点在する。粘性なし、締まりは普通～やや締まり無し。

埋土2層：やや粘性のある暗褐色土（10YR3/4）に褐色粘土（10YR4/6）が混在する層である。全体的な色調は一定しないが、粘性・締まり共に見られる。

底面・壁 何れの土坑でも底面は全体的に起伏が認められ、更に木根痕による小穴も全体的に分布しているため、滑らかさは少ない。

壁は、部分による差異が大きく、外傾度・立ち上がり方も異なっている。壁面は、木根痕に

よる起伏が多く見られる。

A土坑の西南西の壁には、巨礫1点が存在し、B土坑の底面には上端径34×32cm、深さ7cmの浅いくぼみが見られ、また東壁には新期の柱穴(28×21cm、深さ14cm)が重複している。

前述した底面や壁の状況以外に、本土坑に関連する施設・構造は認められない。

第23図版に図示した土器片4点、土偶の脚部1点、石鏃1点の計5点が出土している。

1の土器片は、無文部・縄文部が曲沈線によって区画され、縄文充填の区画部では沈線の内側に連続刺突文が施されている。縄文の種類はLR1である。2の土器片は、口唇直下に縄文帯があり更に沈線で区画されて無文帯が見られる口縁部破片である。縄文はLR1である。3は、ゆるやかな波状口縁部破片で、縄文帯と無文帯とが沈線で区画されている。4の土器片は、RLR1斜行縄文か、あるいはRLrを用いた燃糸文と考えられるが条状が不詳である。

5は、土偶の左脚部である。

6は凹基無茎石鏃で加工調整は他に比べてやや丁寧である。

(13) SK-13(A・B)土坑(第24図版、写真図版25)

検出位置は、高位面のAI区m-21とAI区n-21にまたがって位置している。周辺の遺構としては、SK-14土坑が東側に近接し、更に東側にはSK-16土坑などが位置している。

検出状況は、高位面の基本土層II層下部を除去している段階で黒褐色土の不整な広がりを確認したが、平面形を把握するには至らずII層全体を除去した。その結果、III層上面で平面形を確認することとなった。検出時には1基の不整形な土坑かと考えられたが、精査の結果は浅い小判形土坑が2基重複していることが判明した。

平面形は、不整な小判形が2基重複した状態を示している。これらの土坑は、何れも浅く、壁の立ち上がり方もゆるやかなことから底面と壁との境が不明瞭である。また、底面が基本土層III層の傾斜に沿っていることや土坑の埋土が同質であることからAとBの上端の重複関係は不明である。

SK-13A土坑：長軸方向は西北西～東南東方向にあり、長軸方向の上端153cm・同下端105cmで、深さは7～8cmである。直交方向については確認できた部分で上端103cm・同下端65cmである。

SK-13B土坑：長軸方向は概ね北北東～南南西にあり、長軸方向の上端195cmで同下端は計測困難である。深さは落ち込んだ部分(26cm)を除くと9cm前後である。

埋土は、両土坑とも同質の埋土で単層である。埋土はシルト質黒褐色土(10YR2/3)に褐色粘土(10YR4/6)の中小ブロックが不規則に混在している。粘性は褐色土ブロックを除くとほとんど見られず、締りも良くない。

何れの土坑でも底面全体に起伏が認められ、更に木根痕の小穴が散在していることから滑らかさに欠ける。Bの土坑では、北西壁よりに径54×43cm・深さ17cmのくぼみが見られる。

壁は前述したように底面と壁との境が不明な部分もあり、また非常にゆるやかに立ち上がっている。壁面にも木根痕が認められ、底面と同様に滑らかさに欠けている。

その他、Aの土坑では北東側の壁面に接して扁平な亜角礫の巨礫が1点存在し、Bの土坑では底面や壁からやや浮いた状態で3点の亜角礫が存在した。

その他

出土遺物

土器片

土偶片

石器

検出位置

検出状況

平面形・規模

埋土

底面・壁

前述した底面や壁の状況以外に、本土坑に関連する施設・構造は認められない。その他
 第24図版に示した土器片4点と石鏃1点の計5点が出土している。出土遺物
 1の土器片は、中空の作りの把手状口縁突起である。2は、縄文RLRを地文とし曲線状の沈線土器片
 文が施された鉢形土器の体部破片である。3は、口縁と並行する無文帯・縄文帯が沈線によって
 区画され、単位毎に連続S字状の垂下する沈線文が加えられている。5は、円盤状を呈する口縁
 部突起である。
 凹基無茎の石鏃である。加工調整は、剥片の縁辺に細部調整を施しているが、全体的に荒々石器
 しく不均整な形状である。

(14) SK-14土坑 (第22図版、写真図版)

検出位置は、高位面のAI区m-22に位置しており、本土坑の西側にはSK-13土坑が近接して
 いる。また、北東側2~4mのところにはSK-15土坑やSK-16土坑が位置している。
 検出状況はSK-13(A・B)土坑とほぼ同様で、高位面の基本土層II層上部を除去している 検出位置
 段階に黒褐色土に褐色土あるいは暗褐色土が不規則に混在する土層の分布を確認したが、平面
 形を把握するには至らず、II層全体を除去した。その結果、III層の上面が平面形の確認面とな 検出状況
 った。
 平面形は、北西壁と南西壁が屈曲し、北東壁と南東壁はほぼ直線の不整な隅丸方形である。
 規模については各辺の状態が異なることから断面図作成方向の最大値169cm、直交方向の最大
 値168cmを本土坑の平面規模とする。深さは、底面が多少起伏していることから8~12cmの範囲 平面形・規模
 にある。

埋土は、2層に細分した。埋土
 埋土1層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)に、やや粘性のある暗褐色シルト(10YR3/4)と
 粘土質褐色土(10YR4/6)が不規則に混在する。層全体としては、粘性はなく、締
 りは普通かやや締まりなし。
 埋土2層：褐色のシルト質粘性土(10YR4/6)で、小ブロックの集合層である。粘性あり、締
 まりあり。

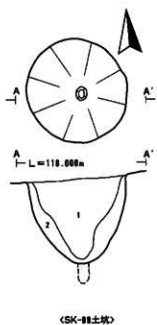
底面全体は、北から南方向へ傾斜し、またゆるやかな起伏が見られる。底面は起伏と木根痕 底面・壁
 の凹凸により滑らかさに欠けている。床面には柱穴その他の施設・構造、あるいは重複する柱
 穴も見られない。

壁は、斜面上方側である北東壁~北西壁側では床から内湾状に且つゆるやかに立ちあがって
 おり、南東~南側の壁は床から内湾状に且つ急速に立ちあがっている。

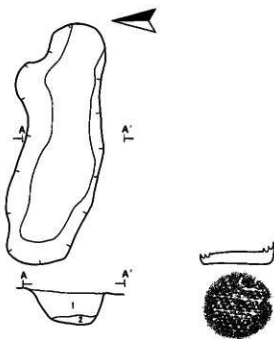
本土坑に関連する施設・構造は、土坑内はもとより土坑周辺でも認められない。その他
 埋土の1層中から土器片数点が出土しているが、器面の風化・剥落が著しく文様等が不明瞭 出土遺物
 である。かろうじて縄文の判るものはLR1が施されたもの1点が含まれる。

(15) SK-15土坑 (第25図版、写真図版25)

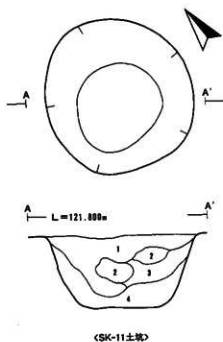
検出位置は、高位面のA I区1-23に位置している。本土坑周辺に位置する他の遺構として 検出位置
 は、南側にSK-16土坑が、南西側にSK-13・14土坑が北東側にSK-17土坑が存在する。



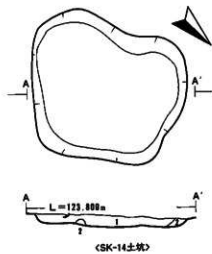
<SK-08土坑>



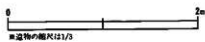
<SK-10土坑と出土遺物>



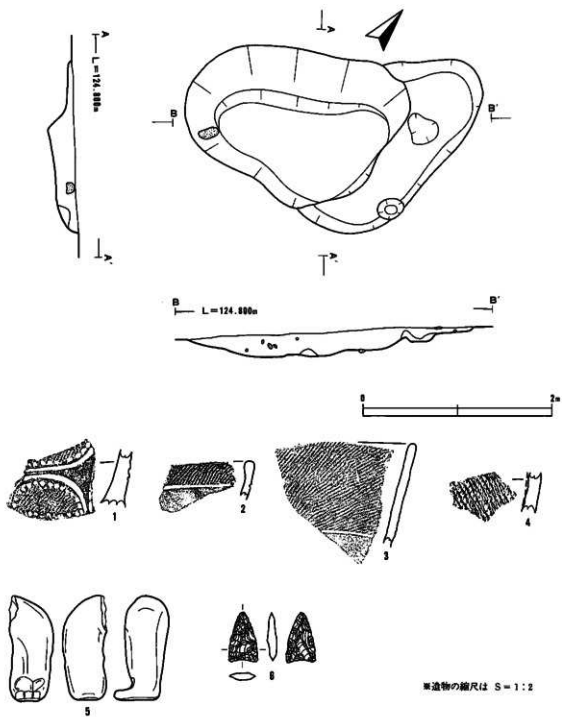
<SK-11土坑>



<SK-14土坑>

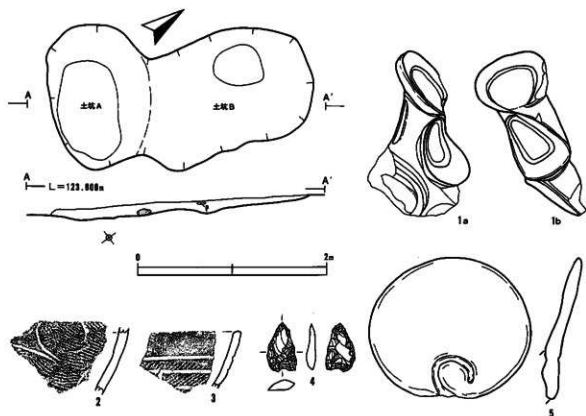


第22図版：SK-08・10・11・14土坑



※遺物の縮尺は S = 1 : 2

第23図版：SK-12土坑と出土遺物



第24図版：SK-13土坑と出土遺物

※遺物図の縮尺 5=1/2

検出状況は、SK-13土坑やSK-14土坑など周辺に位置する他の土坑と同様である。しかし、検出状況本土坑の上部に大木の木根痕の広がりと考えられる有機質黒色土(10YR2/1)が分布していたことや、土坑の西側には攪乱が見られたこと等から攪乱部の除去、そして黒色土部を確認・除去した後本土坑の確認となった。遺構の確認層位は、木根痕の確認・除去と高位面の基本土層II層を除去した後、III層の上面で黒褐色土の広がりとして把握した。

平面形は、隅丸の長方形と思われるが西側が採土等による攪乱を受けていたことから全体形平面形・規模状・規模は不明である。確認した部分は、上端形状・中端形状・底面形状、何れも隅丸長方形を呈し、更に底面には不整形の落ちこみが見られる。

確認部の長軸方向は西北西～東南東方向にあり、その上端は176cm・同下端135cm、直交方向の上端160cm・同下端90cm、深さは底面が起伏しているため53～55cmの範囲にある。また、底面に見られる落ちこみは57×67cm・深さ4cmである。

埋土は、混在物の多少による差は見られるが、主体となる土質からは細分することができず埋土埋土全体を1つの層とした。

埋土の性状：黒褐色土(10YR2/3)で、部分的にシルトの分級が認められる。粘性ややあり、締りは良好である。その他、全体的に褐色土の小ブロックが極く少量混在すること、大木の根の跡が散見される。

底面・壁 底面全体はゆるやかな起伏をもっているが、木根痕による小穴や凹凸は非常に少ない。木根の影が見られるのは、中段から上部、そして土坑の周辺である。

壁は、北～北西側では、底面から急速に立ちあがり段をもつが、北東～南側では底面からゆるやかに外傾して立ちあがっている。壁面は、中段より上は木根痕による凹凸が見られるが、中段から下は木根痕は見られない。

その他 本土坑に関する施設・構造は、底面の項で述べたもの他には何ら存在しない。

出土遺物 縄文土器片10数点が出土している。これらのうち文様等が判明するもの9点は、接合により図示した4点になっている。何れの土器片も器面の風化が著しく、不鮮明な部分も存在する。

138・139は、同一個体の口縁部破片と考えられるが接合はしなかったものである。口唇上面は平坦で、口唇内縁が内側に張り出し三角縁状を呈する。文様は、無文地に3条の広狭な沈線によって曲線を描いているものの文様構成全体は不明である。

105は、深鉢形土器の口縁部破片で、無文地のうえに口縁に平行する2条の沈線が施されている。口唇面には襷が見られ、口唇内縁はわずかに張り出している。

139は、深鉢形土器の口縁部破片で、斜行縄文LR1が施されている。器形は破損部付近に段差をもち、この段差から上の口縁は外開度が強く、下方はゆるやかである。なお、口唇外縁は内湾状に整形されている。

全体的な胎土状況は、中砂を多く含んだシルト質土で、焼成も良好である。

(16) SK-16 (A・B) 土坑 (第25図版)

検出位置 検出位置は、高位面のAI区1-23とAI区m-23にわたっている。本土坑周辺には、SK-13土坑・SK-14土坑などが存在する。

検出状況 検出状況は、前述したSK-14土坑や後述するSK-17土坑などと同様に、基本土層のII層下部での検出作業中に不整形な黒褐色土の分布を確認したが、平面形状が判然としないことから、III層上面まで下げて平面形を確認した。検出当初は、1つの土坑と考えていたが、精査の結果、底部が2つに分かれていることから2基の土坑が重複した可能性が考えられる。

平面形・規模 2基の土坑が重複したものと考えた場合、土坑Aは平面形が楕円形を呈するものでその長軸方向は東南東～西北西にあり、その上端は90cm+x、同下端は65cm直交方向の上端は82cm・同下端53cm、深さは18～20cmである。また土坑Bは、不整な台形を呈することから各辺の長さが異なる東側の上端辺150cm、同下端辺105cmで、この辺のほぼ中央から西壁側への法量(土坑の径)は、上端130cm・同下端78cm、深さは最大部で22cmとなる。

埋土 埋土は、2基の土坑とも共通の土質性状であり、2層に細分される。

埋土1層:シルト質黒褐色土(10YR2/3)で、粘性がわずかに存在し、締りは良好である。木の根が入りこんでいる。

埋土2層:粘土質褐色土(10YR4/6)で、中小ブロックの構成で黒褐色土(10YR2/3)が少量混在する。粘性・締りともに良好である。

底面・壁

土坑Aの底面は、やや起伏が見られるとともに木根による凹みが存在する。壁は、不明な南東側を除けば底面から内湾状に立ちあがっている。壁面にも起伏・凹凸が見られる。

土坑Bの底面は、全体的に、凹面をなしており起伏も見られる。土坑Aよりには木根痕が散在

する。壁は、底面からゆるやかに立ち上がっている。

新期の柱穴状小土坑が重複しているものの、本土坑に伴う施設・構造は認められない。その他
出土遺物はない。出土遺物

(17) SK-17土坑 (第25図版)

検出位置は、高位面のAI区k-24に位置している。本土坑周辺には、前述したSK-15土坑や 検出位置
SK-18土坑などが存在する。また、周辺には極新期の浅い土坑群が散在している。

検出状況は、基本土層のII層下部で検出作業を行っていた段階に埋土であるシルト質暗褐色 検出状況
土(10YR3/2~3/3)を確認したが、II層土との区別が判然としないことから平面形を把握す
るには至らなかった。結果としてIII層上面での検出となった。

平面形は、上端形・下端形ともに不整な楕円形を呈する。その長軸方向は概ね傾斜に直交す 平面形・規模
る北東北～西南西の方向にある。

規模は、長軸方向の上端106cm・同下端92cm、直交方向の上端最大部93cm・同下端80cmで、深
さは、14cmである。

埋土は、単層である。埋土の性状・特色は、シルト質暗褐色土(10YR3/2~3/3)で、全体 埋土
に極少量の炭化物片が混在し、下部では粘土質褐色土(10YR4/4~4/6)の小ブロックが点在
している。全体的に粘性はなく、締りはややある。

底面全体は、凹面状をなしており、底面の一部には亜角礫が露出し、わずかに起伏している。底面・壁
底面全体が凹面をなしていることから底面と壁との境界は不明瞭である。

壁は、床面からゆるやかに立ち上がっている。壁面にはほとんど礫が認められず、極度の凹
凸や起伏は認められない。北側の一部は、新期柱穴によって破壊されている。

床面や壁面には新期の柱穴状小土坑が重複し、壁の一部を破壊しているものの、本土坑に伴
う施設・構造は何ら認められない。

出土遺物は、風化・磨耗した小破片の土器が数点認められただけである。文様は、不明であ 出土遺物
るが縄文土器片と考えられている。

(18) SK-18土坑 (第25図版)

検出位置は、高位面のAI区k-25とAI区1-25にまたがって位置している。周辺にはSK-17土 検出位置
坑やSK-19土坑、あるいはSI-11住居跡等が存在する。

検出状況は、前述したSK-17土坑などと同様に基本土層のII層下部で遺構検出を行っていた 検出状況
ところほぼ小判形に広がる黒褐色土(埋土1層)と黒褐色土・褐色土の混在した土層(埋土2層)
を把握した検出層位は基本土層のII層中となっている。

平面形はやや菱形に近い隅丸長方形で北東側の底面は1段と低くなっている。長軸方向は、ほ 平面形・規模
ぼ南東～北西方向にあり、その上端は240cm・同下端は218cm、直交方向の上端は143cm・同下
端は118cmである。深さは北西側のくぼみで26cm、その他は底面の起伏により16~20cmである。

埋土は、4層に細分したが、埋土の2層は混合比によって更に細分した。埋土
埋土1層: やや粘性のあるシルト質黒褐色土(10YR 2/2)で、下部には粘性のある黒褐色土
(10YR2/3)や褐色粘土(10YR4/6)の小ブロックが混在する。締まりは普通～やや

やなしである。

埋土2a層：やや粘性のある黒褐色土（10YR2/3）に褐色粘土（10YR4/6）の中～小ブロックが不規則に混在し斑文状をなす層である。締まりは普通～やや良好である。

埋土2b層：2a層に比べて黒褐色土と褐色粘土との割合関係が反対となり、褐色粘土が多い層である。粘性・締まりともに良好である。

埋土3層：シルト質の褐色粘性土（10YR4/6）の大ブロックである。クラックが見られ、そのクラック中には黒褐色土が入り込んでいる。粘性あり、締まりは良好である。

底面・壁 底面は全体的にゆるやかな起伏が見られるとともに、小さな凹凸が存在する。南東側は凹面状をなし、北西側はくぼんでいる。底面中央付近には、径10～12cm・深さ19cmほどの小穴が存在する。

壁は、北西側から北東側にかけては、比較的ゆるやかに且つ内湾状に立ち上がっているが、南西側および南東側は垂直に近い状態で立ち上がっている。

その他 極新期の杭跡や木根痕は見られたものの、前述の小穴を除けば本土坑に付随する施設・構造は何ら認められない。

出土遺物 出土していない。

(19) SK-19土坑（第26図版、写真図版17・25）

検出位置 検出位置は、高位面のAⅠ区1-25に位置している。周辺には、SK-18土坑やSI-10住居跡などが存在する。

検出状況 検出状況は、SK-17土坑やSK-18土坑とほぼ同様であるが、Ⅱ層中では平面形状が不明のためⅢ層上面まで掘り下げた段階で平面形を確認した。

平面形・規模 平面形は、上端形状・下端形状ともほぼ円形で、その規模は、上端径117×115cm・同下端径106×100cm、深さ34cmである。

埋土 埋土は単層である。埋土の性状等は、わずかに粘性のある黒褐色土（10YR2/3）で、締まりは良くない。埋土中には、土器片・礫器片・礫・炭化物片が含まれている。

底面・壁 底面はゆるやかな起伏と木根痕による凹凸をもつものの、全体的に凹面をなし、概ね平滑である。壁は、底面から垂直に近い状態で立ち上がっている。

その他 本土坑に付随する施設・構造は、何ら認められない。

出土遺物 埋土中から土器片と磨石の破片が出土している。出土した土器片は、5点が接合している。他に同一個体片と考えられる無文部破片や縄文部破片数点が出土している。

土器 150の土器片は、口唇部の見られない頸部周辺の破片で頸部が強く屈曲している。頸部から上の口縁は、工具による粗いナデ調整が施され、その調整痕跡も荒々しく残っている。頸部から下の斜行縄文は、やや斜位方向に回転施文をしたもので縄文の種類は単節のLRIである。

石器 151の磨石破片は、1平坦面を中心に使用されており、現存する側縁などには使用痕跡は認められない。

(20) SK-20土坑（第26図版、写真図版25）

検出位置 検出位置は、高位面のAⅠ区n-24である。周辺には、SI-09住居跡やSK-21土坑などが存在

している。

検出状況は、SI-09住居跡やSK-21土坑などとほぼ同様であるが、II層中では平面形状が不明のためIII層上面まで掘り下げて平面形を確認した。 検出状況

平面形は、不整な楕円形で長軸方向は北西～南東の方向にある。規模は、長軸上端172cm・同平面形・規模
下端142cm、直交方向の上端124cm・同下端103cmである。深さは、底面が起伏していることや北西側の底面に小土坑があることなどから一定しないが、全体的には30～33cm、小土坑部50cmである。

埋土は基本的には1層であるが、破線部を境にしてa層とb層とに細分した。 埋土
埋土a層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)を主体とするが、粘性のある暗褐色土(10YR3/3～3/4)および粘土質褐色土(10YR4/4～4/6)の小ブロックが点在する。粘性あまりなし、締まりは普通かやや良好である。炭化物片を不規則に含む。

埋土b層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)を主体とすることはa層と同様である。上部から下部へと渐变するように暗褐色土・粘土質褐色土の混在率が増加すると共に、炭化物片・焼土粒が多く存在する。粘性ややあり、締まりは下部ほど締まる。

底面・壁の下部は、礫が露出するためこれによる凹凸が見られる。また底面の北西側には、楕円形の小土坑(平面規模42×30cm)が形成されており、小土坑の底面は16cmほど低くなっている。 底面・壁

本土坑に付随すると考えられる施設・構造は、底面の項で述べた小土坑の存在だけであり、その他には何ら認められない。 その他

b層上部から豆粒大の土器片数点と共に、図示した土器片が出土している。土器片は深鉢形土器の口縁部である。文様は、口唇よりの15mm前後がよく研磨された無文帯で、無文帯の下部は並行沈線で区画された狭い縄文帯である。用いられている縄文は斜行縄文LRIである。 出土遺物

(21) SK-21土坑 (第26図版、写真図版25)

検出位置は、高位面のA I 区n-25とA II 区n-01にまたがって位置している。周辺に存在する遺構としては南側にSKI-01竪穴状遺構が接し、また西南西側にSK-20土坑が位置している。 検出位置

検出状況は、SKI-01竪穴状遺構と同様に高位面IIIa層の上面で不整な円形を呈する黒色土～黒褐色土を確認した。なお、本土坑を確認する前に土坑の縁辺に接する小土坑2基を確認している。 検出状況

平面形は、上端形状・下端形状とも不整な円形であり、その規模は上端径が100×97cm・同下端径が83×81cm、深さは30～36cmである。 平面形・規模

埋土は、基本的には1層であるが、破線部を境にして他の土の小ブロック等の混在率などが異なることからa層とb層とに細分した。 埋土

埋土a層：シルト質黒色土～黒褐色土(10YR2/1～2/2)に焼土粒・炭化物小片、褐色土小ブロックが少量混在し、また土器片や極細粒の土器片(粒状)が混在する。粘性はほとんど見られないが、固く締まっている。

埋土b層：シルト質黒色土～黒褐色土に粘土質・シルト質の褐色土(10YR4/4～4/6)の中小ブロックが不規則に混在する。また、a層との境界付近には炭化小片が線状に並ぶ部分が見られるが、b層中では、極散見する程度である。粘性は不規則ながらもわずかにあり、締りは良好である。

底面・壁 底面は、礫の露出が見られるものの概ね平坦である。壁は底面と同様に礫が見られるものの極度の凹凸は見られない。壁の立ち上がりは、外傾して急速に立ち上がっているが、壁面全体はゆるやかな起伏が見られる。

その他 本土坑に直接に関わる施設・構造は、底面・壁面、そして周辺にも認められない。重複する遺構としては本土坑より新期の柱穴様小土坑2基が存在する。

出土遺物 文様等が判明する土器片は3点出土し、そのうち2点は接合している。

156は、小型鉢形土器の山形を呈する口縁破片で、頂部はくぼんでいる。文様は、沈線で区画された無文帯と縄文帯とが組み合わさっている。縄文の種類は斜行縄文RLrの充填縄文である。

90は、大型深鉢の体部破片で、文様は沈線区画による曲線状および直線状の無文帯と充填縄文帯で構成されている。充填縄文は不鮮明であるが斜行縄文LRIである。

(22) SK-22土坑 (第22図版、写真図版17)

検出位置 検出位置は、高位面のAⅢ区j-06である。本土坑の周辺にはSK-01とした探土跡と考えられる凹地が連続して分布している。

検出状況 検出状況は、SK-01に連続する黒色土等を除去した段階に、高位面の基本土層Ⅲb層と考えられる火山灰質褐色土(10YR4/4)の上面で検出した。本土坑周辺では、探土のためかⅢa・Ⅲb層が削土されている所が多い。

平面形・規模 平面形は、上端径・下端径ともほぼ南北に長軸方向をもつ楕円形の土坑である。長軸方向の上端径137cm・同下端径114cm、直交方向の上端径115cm・同下端径91cmである。深さは、底面が起伏しているため37cm～39cmを計るが、部分的に42cmの所も見られる。

埋土 埋土は、粘土質～シルト質の褐色土(10YR4/6)の小ブロックが斑点状に分布する黒褐色土(10YR2/2)である。また、埋土中には最大径30cmほどの偏平な歪円礫を含む礫が多く含まれている。礫の平均径は10cm前後である。粘性はほとんど見られず、締りは普通かやや良好である。

底面・壁 底面は、礫の露出や礫の抜取り痕と考えられる凹地のため起伏が見られるが、概ね平坦である。壁は、底面から急速に外傾して立ち上がっているが、極度の起伏・凹凸は見られない。

その他 本土坑に直接に関わる施設・構造は、底面・壁面、そして土坑周辺にも認められない。また、重複する遺構は存在しない。

出土遺物 土器細片数点が出土しているが、文様の判明するものはない。

(23) SK-23土坑 (第10図版、写真図版9)

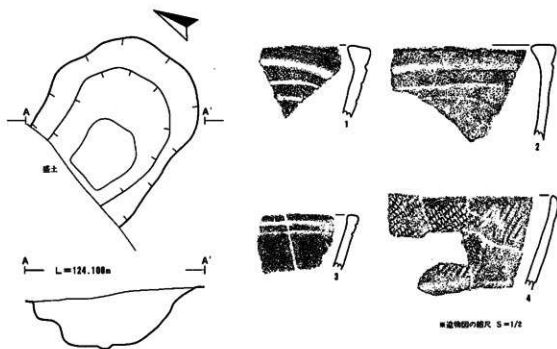
検出位置 検出位置は、高位面のAⅠ区p-23でSI-09住居跡に重複している。

検出状況 検出状況は、SI-09住居跡の精査中に南側の壁・床面で検出したものである。本土坑上部の埋土と住居跡の埋土1層とは全く区別がつかなかったものである。

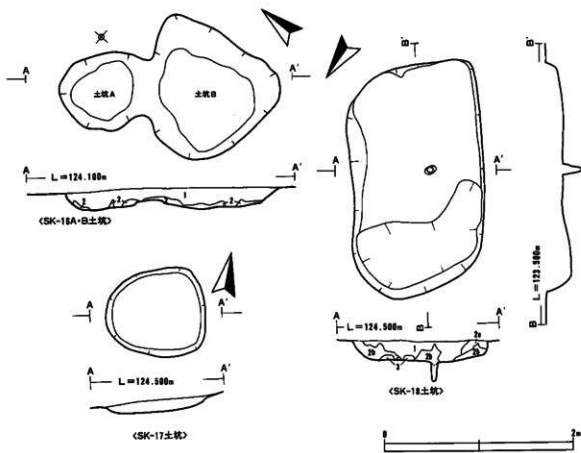
平面形・規模 平面形は、上端・中端・下端の形状何れも異なっている。上端は北西方向に長軸をもつ楕円形で、中端は不整な円形、下端は南北に長軸をもつ不整な楕円形である。

規模は、上端100×68cm、中端73×65cm、下端39×22cm、深さはほぼ46cmである。

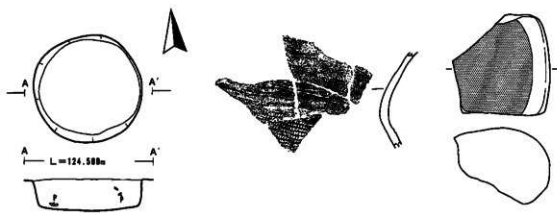
埋土 埋土は2層に細分した。埋土の上部は、SI-09住居跡の埋土1層と同様のシルト質黒褐色土



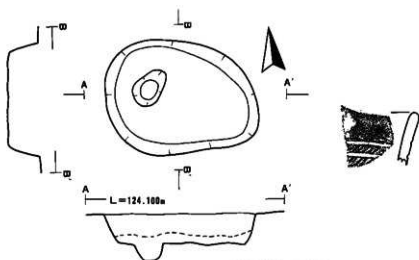
〈SK-15土坑と出土遺物〉



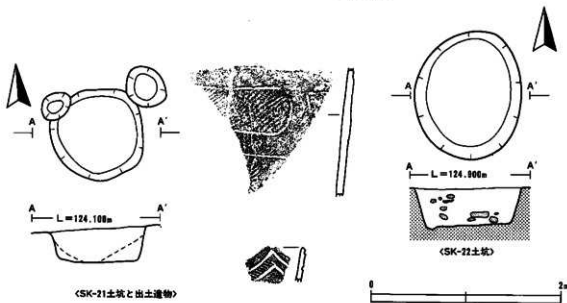
第25図版：SK-15・16・17・18土坑と出土遺物



<SK-19土坑と出土遺物>



<SK-20土坑と出土遺物>



<SK-21土坑と出土遺物>

<SK-22土坑>

第26図版：SK-19・20・21・22土坑と出土遺物

である。

埋土1層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)で、埋土中に径10mm前後の礫が混在する。粘性はなく、締りは悪い。

埋土2層：粘土質黄褐色土(10YR5/6)で粘性があり、締りはやや良好である。礫は含まれない。

底面は、凹面状をなし、礫が露出しているため起伏も見られる。壁は、底面から屈曲して立ち上がっており、壁面の下部には底面と同様に礫が散在する。

本土坑に関わる施設・構造等は、床面・壁面、そして土坑周辺にも存在しない。その他
土坑からの遺物は、何ら出土していない。出土遺物

(24) SK-24(A・B)土坑 (第27図版)

検出位置は、高位面のAⅡ区j-08で、土取跡の下位に位置しており、付近にはSK-22土坑や次に述べるSK-25土坑が位置している。検出位置

検出状況は、SX-01の土取跡と考えられる広範な攪乱部の精査後にその縁部の底面で確認したものである。掘りこみ面は不明瞭であるが、Ⅲa層下部からⅢb層にかけて形成されている。検出状況

調査当初は、長軸約300cm、短軸約260cmの竪穴住居跡あるいは、住居跡様の竪穴遺構と思われるが、精査の結果円形の土坑Aと不整楕円形の土坑Bとが重複したものであることが判明した。

2基の土坑とも本来の上端形状・法量については不明であるが、残存部の形状および残存部からの推定形状・規模を説明する。平面形・規模

全体規模は、南～北方向の上端最大値306cm、直交方向の最大値286cmであり、深さは最大58cmである。

土坑A：上端の推定形状は概ね円形と考えられ、その推定径は230cmである。中端形状は154×150cmの不整円形、下端は121×118cmの不整円形である。深さは、底面が起伏していることや北西方向に傾斜しているため46～58cmと変化が見られる。

土坑B：上端の推定形状は、東北東～西南西方向に長軸をもつ楕円形の土坑と考えられ、その推定規模は長軸方向130cm前後で、直交方向については不明である。中端は不明で、下端の形状は推定の上端と同様の方向に長軸をもつ不整楕円形である。下端規模は100×59cm、深さは最大で36cmである。

埋土は2基の土坑に共通する層序区分である。埋土1層の状態からは、土坑A・Bの新旧関係は不明であるが土坑Bの底面・壁が土坑Aの埋土中に認められなかったことから、土坑Aが新しいものと考えられる。埋土

埋土1層：シルト質黒褐色土(10YR2/3)と、暗褐色土～褐色土(10YR3/4、10YR4/6)の不規則な混合土層で5～20cmの扁平な歪角礫が不規則に混在する。その他、炭化物片が不規則に混在する。なお、土坑B部の埋土中には礫の混在はほとんど認められなかった。粘性はわずかに認められ、締りは普通である。

埋土2層：わずかに粘性のある黒褐色土(10YR2/3)に粘土質褐色土(10YR4/6)の小ブロック・炭化物が散在する。粘性はわずかにあり、締りは普通である。

埋土3層：シルト質黒色土～黒褐色土(10YR2/1～2/2)に粘土質褐色土(10YR4/6)の小ブロッ

クを多量に含む(20~15%)。また、炭化物小片や鉄結核小粒[?]を少量含む。粘性はややあり、締りは普通である。

底面・壁 何れの土坑でも底面全体に起伏が認められ、部分的に礫の突出のため滑らかさに欠けている。土坑Bの底面は不整形で凹面をなしていることから底面と壁の境界が不明瞭な部分も見られる。

土坑Aの壁は、東~南~西側では、底面から外傾して急速に立ち上がった後、中端からはややゆるやかに外傾して立ち上がっている。

土坑Bの壁は、東を除くといずれもゆるやかに外傾して立ち上がっているが、東側は比較的、急傾斜で立ち上がっている。

その他 前述した底面や壁の状況以外には、本土坑群に関連する施設・構造等は認められない。

出土遺物 炭化物・礫以外には、何ら出土していない。

(25) SK-25土坑(第27図版、写真図版17)

検出位置 本土坑の検出位置は、高位面のAII区k-10・11にわたって位置している。最も近いところに位置する土坑としては前述したSK-24土坑であり、他にSK-05やSB-04の孤立柱様に配列する小土坑群が分布している。

検出状況 検出状況は、基本土層のII層を除去中に不整形に広がる本土坑の埋土1層である黒褐色土を確認したが、II層中では土坑の平面形を把握できず、結果として基本土層のIII層上面まで掘り下げて平面形を確認した。

平面形・規模 平面形は不整な楕円形[?]を呈し、その長軸方向は概ね北西~南東の方向にある。規模は、長軸上端416cm・同下端329cm、直交方向は壁の屈曲により変化が大であり、上端は178~100cm、下端は78~148cmを測る。深さは底面の起伏のため26~34cmである。

埋土 埋土は、基本的には2層であるが、同一層でも部分によって差が認められる。

埋土1層: 基本的な性状等は粘土質分の強いシルト質黒褐色土(10YR2/2)であるが、部分によっては粘土質が少なく黒色に近い色調を呈したり、粘土質暗褐色土(10YR3/3~4)の小ブロックが混在したりする。混在物としては、豆粒大~10mmの土器細片と考えられるものや炭化物片、小~中礫が点在する。粘性あり、締りは緻密で良好である。

埋土2層: 粘土質分の強い暗褐色シルト(10YR3/3)を基本とするが、埋土の1層と同様に地点によって混在する他の土の多少によって、わずかながら差が見られる。また、シルト分の多少により粘性・締りにも差が見られる。混在物としては、埋土1層と同様に土器細片かと思われるものや炭化物小片を含み、壁際では褐色土の小~中ブロックが混在する。

底面・壁 底面には礫が露出し、また礫が抜き取られたと考えられるくぼみや木根痕のため小起伏が著しいが、長軸方向は概ね水平である。なお、底面には木質の残っている柱状の木根痕もみられた。

壁は、平面的には屈曲が著しく、土坑の平面形を不整なものとしており、壁面には礫が露出し小起伏が認められる。壁の立ち上がりは、部分による差異が認められ、底面から屈曲しながら外傾して立ちあがっている。

本土坑の底面には、前述した木根痕や礫の露出が見られるものの付随する施設・構造は認められない。また、壁および周辺にも本土坑に伴う施設・構造は認められない。

出土遺物としては、豆粒大～10mmほどの土器細片や炭化物片が存在するが、文様の判明する出土遺物土器片はもとより土坑の所属時期を示すような遺物は、何ら出土していない。

(26) SK-26土坑 (第11図版、写真図版10)

本土坑は、高位面のAII区m-01に位置するとともにSI-10住居跡の南東壁に重複している。検出位置
検出状況は、SI-10住居跡を検出した後、同住居跡の埋土上面で乾燥速度の異なる土の分布
を確認していたが明瞭な平面形状は把握できなかった。結果として、SI-10住居跡の精査の課程で本土坑の平面形を把握した。

平面形は、上端形状が略円形で、下端形状は北東～南西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模 平面形・規模
は、上端径80×78cm、下端径は48×37cmで、深さはSI-10住居跡の床面から15cm、壁上端レベルから18cmである。なお、南側には、新期の極浅い小土坑が重複し、本土坑の一部を破壊している。

埋土は、基本的に単層であるが、下部には炭化物小片や褐色土小粒等が混在する。埋土の性状は、上部が粘性のないシルト質～砂質の黒褐色土(10YR2/3)で極少量の炭化物粒を含み、下部は粘性がわずかにみられるシルト質黒褐色土(10YR2/2～2/3)で褐色土小粒(10YR4/6)や炭化物小片とともに第11図版3・4・5に示した凸基有茎石礫、土器口縁部、把手状口縁突起などが含まれている。

底面はわずかに起伏しており、礫の露出も見られる。壁は、底面からゆるやかに外傾して立ち上がっているが、部分によってはわずかな屈曲が見られる。

本土坑に付随する施設・構造は何ら認められない。

図示した石礫1点・土器片2点の他に、豆粒大に細片化した土器片が数点出土しているが、文様等は不明である。

第11図版4は、波状口縁をもつ深鉢形土器の口縁部破片である。文様は、口唇に並行する状態で線状の連続刺突文が施され、他の文様としては縄文LR1が地文として施されている。5は、把手状の口縁突起で、中空の作り方である。

3の石礫1点が出土している。先端・基部端を欠損した凸基有茎石礫である。加工調整はやや荒く、調整剝離も部分的に並行するものの浅い剝離である。

(27) SK-27土坑 (第13図版、写真図版12)

高位面のAII区k-3に位置するとともに、SI-12住居跡が重複している。付近には、平面形・断面形状が類似する土坑は存在しない。

検出状況は、SI-12住居跡の床面精査中にPo-1と共に確認したものである。当初は、検出状況
面が非常に固く締まっていたことから床面の部分的な貼付土かとも思われたが、確認精査の結果土坑としたものである。

精査の結果、上端形状・下端形状とも不整な楕円形を呈する土坑であることが判明した。また、土坑中央付近の底面には長径38cm・短径23cm、深さ19cmの小土坑を伴っていることも判明

した。

土坑の長軸方向は概ね北北西～南南西の方向にある。土坑の規模は、上端の長軸長134cm・同短軸長66cm、下端の長軸長106cm・同短軸長40cm、深さ21cmである。なお、底面に形成された小土坑までの深さは40cmである。

埋土は単層であるが、SI-12住居跡の床面レベルに近い部分では、非常に固く締まり光沢がわずかに異なるものの、ほぼ単層と判断した。

- 埋 土** 埋土の性状は、細砂質～シルト質の黒褐色土 (10YR2/3) に炭化物片が少量混在しており、粘性はほとんどなく、全体的な締りは普通～やや良好である。なお、上部の締りは前述したように非常に固く締まっている。
- 底 面・壁** 底面は、小土坑部をのぞけば概ね平坦であり、極度の凹凸は認められない。壁は、部分による若干の差異は認められるものの底面との区別は明瞭であり、底面からやや外傾して直線的に立ち上がっている。壁面全体は、わずかな起伏があるものの滑らかである。
- そ の 他** 底面や壁面には、前述した小土坑が存在するだけで、他に何らの施設・構造は認められないが、本土坑より新しい時期の柱穴様小土坑1つが北北西端に重複している。
- 遺 物** 埋土中に混在する炭化物片以外には、何ら出土していない。

(28) SK-28土坑 (第14図版、写真図版13)

- 検 出 位 置** 本土坑の検出位置は、高位面の AII区o-04であり、SI-13住居跡の南西壁付近と思われる位置に形成されている。SI-13住居跡の南側は、斜面下方のため壁が不明であり、本土坑との新旧関係は不明瞭である。
- 検 出 状 況** SI-13住居跡の床面追跡中に同住居跡の炉跡と考えられる焼土層とともに確認したものである。確認時の埋土は、SI-13住居跡の埋土に近似する特徴をもつが、住居跡の埋土よりは褐色土ブロックが少なく締りが弱い。
- 平 面 形 ・ 規 模** 平面形は、上端形状・下端形状ともやや不整な小判形を呈する。土坑の長軸方向は、概ね東西方向にある。
規模は、長軸方向上端97cm・同下端70cm、短軸方向上端43cm・同下端29cm、深さは底面の凹凸のため 5～10cmである。
- 埋 土** 埋土は、シルト質～細砂質の黒褐色土 (10YR2/2～2/3) の中小ブロック土を主体としたものに少量の褐色土小ブロック (10YR4/6) が混在している。締りは普通～やや締りなく、粘性は極わずかに見られる。その他、小さい歪円礫が点在している。
- 底 面 ・ 壁** 底面は、礫の抜取り穴かと考えられる凹凸が見られ、全体的に 5cmほどの差をもって起伏している。壁は、部分による差異が見られるものの、底面から直線的に、かつ急傾斜で立ち上がっている。壁面は礫のため凹凸が見られる。
- そ の 他** 底面や壁面には、何らの施設・構造も見られない。
- 遺 物** 遺物は、何ら出土していない。

(29) SK-29土坑 (第14図版、写真図版13)

- 検 出 位 置** 高位面のAII区n-04に位置しており、SK-28土坑と同様にSI-13住居跡に重複している。ま

た、SK-28土坑とは長軸方向がほぼ同様で近接した位置にある。

SI-13住居跡検出時に、同住居跡埋土の上面で楕円形に広がる砂質黒褐色土(10YR2/2)を検出状況確認し調査している。しかし、SI-13住居跡の埋土との差異が少ないため土坑の形状を把握したのは5cmほど掘り下げた同住居跡の床面である。

平面形は、上端形状・下端形状とも楕円形を呈する土坑である。土坑の長軸方向は、SK-28 平面形・竪坑土坑とほぼ同様の方向にある。

規模は、長軸方向上端64cm・同下端42cm、短軸方向上端23cm、同下端11cm、深さは、底面が起伏しているため6~10cmである。

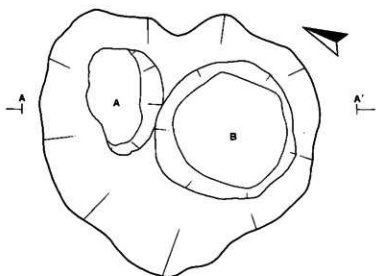
埋土は単層である。埋土の性状は粘土質褐色土(10YR4/6)の小ブロックが不規則に混在した砂質黒褐色土(10YR2/2)で、粘性はわずかに見られ、締りは普通である。混在物としては、亜円礫数点が点在している。

底面は、礫の抜き取り等によると思われる凹凸・起伏が見られ、全体的に4~5cmの差をもって底面・壁起伏している。壁は部分による差異が見られるものの底面から直線的に、かつ外傾して立ち上がっている。壁面は、概ね平滑であるが礫の抜き取り痕のため多少の凹凸は見られる。

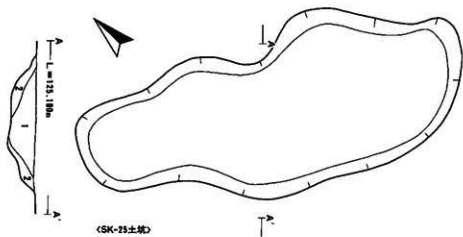
底面や壁面には、何らの施設・構造も見られない。また、SI-13住居跡との新旧関係は、住居跡よりも本土坑の形成が新しい。

何ら出土していない。

遺物



〈SK-24土坑〉



〈SK-25土坑〉



第27图版：SK-24·25土坑

3. 掘立柱式建物跡と同建物跡様に配列する土坑群

本項では、掘立柱式建物跡4棟と掘立柱式建物跡様に配列する土坑群（大別3群）について説明を行なう。掘立柱式建物跡4棟のうち1棟（SB-01）については縄文時代の遺構である可能性が高いが、他のSB-05・06・07の時代については近世～現代初頭の建物跡と考えられる。

(1) SB-01掘立柱式建物跡（第28図版）

低位面のAI区q-08・09・10、AI区r-09・10、AI区s-09の範囲に位置している。周辺には掘立柱式建物跡SK-02・03やSK-05土坑が位置し、そして本遺構より旧期のSI-01住居跡とSK-04土坑に重複している。

SI-01住居跡やSK-04土坑と同様に低位面の基本土層IV層IV層上面でシルト質黒褐色土を埋土とする柱穴4穴を検出した。更にSI-01住居跡の埋土上面とSK-04土坑埋土の上面で各々1穴ずつを検出した。何れの柱穴内でも柱痕跡を確認できなかった。

6穴による1間×2間の建物跡であるが北東側の柱穴はその間隔がつかっており、不整な六角形状の配置となっている。各柱穴間の間隔は、Po-01とPo-02が284cm、Po-02とPo-03が210cm、Po-03とPo-06が268cm、Po-01とPo-04が344cm、Po-04とPo-05が250cm、Po-05とPo-06が204cm、Po-02とPo-05が360cmである。

柱穴の規模は、上端径が48×43cmから72×68cmの間にあり、下端径は24×20cmから63×53cmの間にあり、深さは114～65cmの間にある。

Po-01：上端径48×43cm、下端径32×23cm、深さ114cm

Po-02：上端径60×50cm、下端径26×22cm、深さ91cm

Po-03：上端径60×44cm、下端径40×28cm、深さ102cm

Po-04：上端径72×68cm、下端径54×54cm、深さ96cm

Po-05A：上端径72×58cm、下端径45×38cm、深さ66cm

Po-06：上端径55×38cm、下端径38×20cm、深さ98cm

SI-01住居跡とSK-04土坑と重複していることは、すでに記している。しかしPo-05はその拡大図を掲載したように、本遺構の柱穴であるPo-05A後に裸群を伴うPo-05Bの土坑が重複して形成されている。Po-05Bの底面全体については裸群の沈下により不明であるが東側の一部が残っている。

時代・時期を明確にできるような遺物は出土していない。

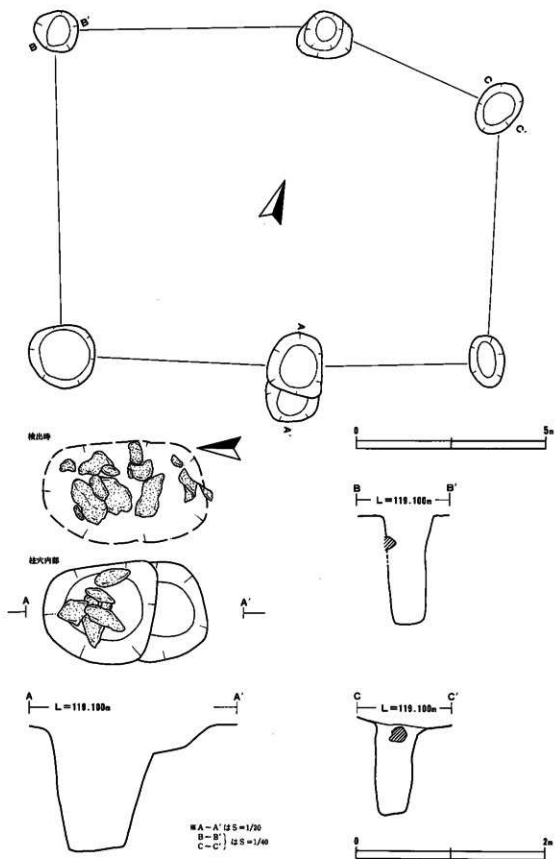
出土遺物

(2) SB-02掘立柱式建物跡様土坑群（第29・30図版）

高位面のAI区22列からAII区03列の間に分布する小型土坑群の中から57基を抜きだしたものである。これらの土坑間で欠落している部分は、新期の攪乱や木根痕との重複などにより不明な部分や明らかに存在しない部分も存在する。

ほとんどの土坑は旧耕作土層である基本土層のI層を15～20cm除去した段階のII層上面で検出しているが、旧耕作土層の整地がなされII層を欠落する地点では、III層の上面で検出している。

ほとんどの土坑は、Ib層と同様のシルト質黒褐色土に暗褐色土や明褐色土の小ブロックが埋混在するあまり締りのない埋土である。数例については、暗褐色土を主体としたものにシルト



第28图版：SB-01掘立柱式建筑物

質黒色～黒褐色土が混在する埋土も存在した。

真北方向と土坑1から土坑8を結んだ方向との角度は西偏68度である。土坑間隔は土坑1から土坑4までが160～170cm、土坑4から土坑8までは80～85cmで、土坑19から土坑22の方向では145～175cmであるが欠落する部分もあり、平均間隔は不明瞭である。土坑1の周辺レベルと土坑8の周辺レベルとの差は12～13cmである。

直交する方向である土坑32～土坑1の方向では最小間隔155cm、最大間隔175cmであり、土坑1の周辺レベルと土坑32の周辺レベルとの差は56cmである。

配列ラインにのる土坑の規模は、上端径40×40cm・下端径25×20cm・深さ15cmから上端径54×50cm・下端径40×38cm・深さ28cmの間にあり、底部形状・断面形状は一定ではない。また底部周辺には木根痕かと思われる小穴が見られる。

数カ所の土坑から文様等が不明な土器細片(5mm～10mm)が出土しているが、土坑の性格・用途・時代を示すような遺物は出土していない。

(3) SB-03 独立柱式建物跡様土坑群 (第29・30図版)

本土坑群はSB-02土坑群の南東側に分布している。土坑39と土坑41を結ぶラインの延長方向は、SB-02土坑群の土坑24と土坑29を結ぶラインを延長したものと一致するが、土坑29と土坑39の間に土坑を検出することができなかったので分離したものである。

検出状況はSB-02土坑群と同じである。

埋土の性状は、SB-02土坑群と同様であるが礫の混在する土坑も見られた。

配列方向は、検出位置の中で述べたようにSB-02土坑群と同様であり、土坑間隔は135～160cmの間にある。

土坑の規模は、最小土坑の上端径32×26cm・同下端径17×15cm、最大土坑の上端径40×38cm・同下端径24×21cmである。深さは16cmから26cmの範囲にある。底部形状・断面形状は一定でなく、底面に木根痕様の小穴が見られるものも存在する。

何ら出土していない。

(4) SB-04 独立柱式建物跡様土坑群 (第31・32図版)

SB-03土坑群から更に南東側の区域に分布する土坑群である。土坑の規模・形状はSB-02土坑群とわずかな差が見られるが、配列ラインの方向は同様である。

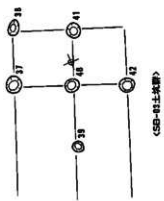
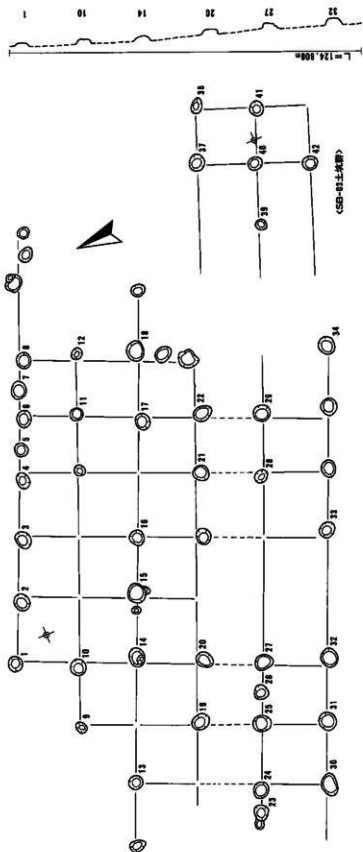
土坑の中心間隔距離は、最小145cm、最大165cmであり、SB-02やSB-03の土坑群と大差のない数値をもっている。

埋土も前述のSB-02土坑群・SB-03土坑群と同様である。

何ら出土していない。

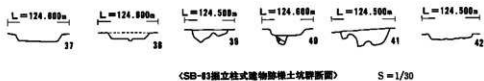
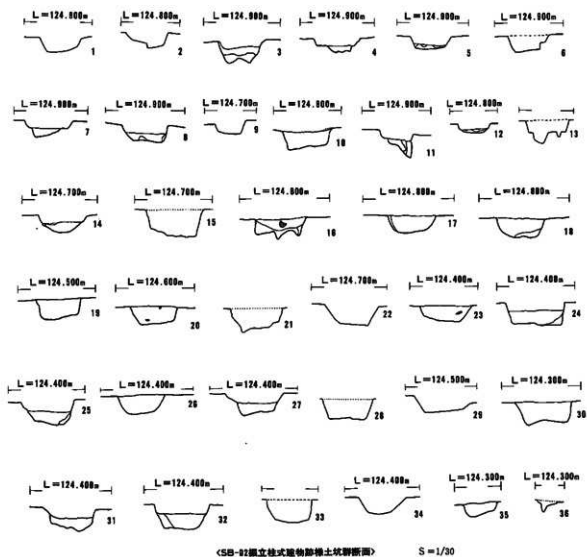
(5) SB-05 独立柱式建物跡 (第33図版)

SB-05とした柱穴群の検出位置は、高位面の東よりAII区i-12～13とAII区j-12～13の区域にわたって分布している。柱穴群の南側には、やや不規則に配列する6穴の柱穴状小土坑が分布する他には、何らの遺構も存在しない。



第29圖版：SB-02-03獨立柱式連物部橋樑土坑群

(S = 1 : 100)



第30図版：SB-02・03獨立柱式建物跡様土坑群断面図

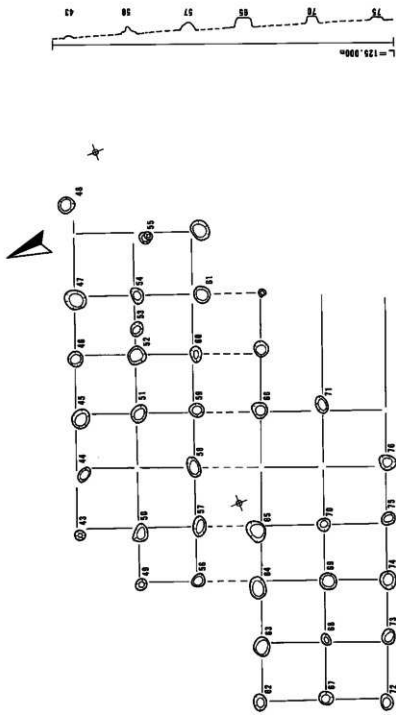
- 検出状況** 本遺構を検出した周辺の層序は基本土層のII層が薄い区域であり、柱穴群の検出層はII層下部からIII層の上面にかけてである。
- 埋土** 木根が重複した柱穴を除けば、I b層と同様のシルト質黒褐色土に暗褐色土や明褐色土の小中ブロックが混在し、締りは柱穴によって差異が認められた。
- 配列** 梁方向と考えられる東西方向は、東側で大きく変形しているが柱穴4穴の3間である。桁方向は柱穴2本の1間である。柱穴の中心間隔は、北側の梁方向で224～216cmであり、南側では最大252cm、最小180cmである。桁方向は、最大部280cm、最小部252cmである。
- 柱穴の規模** 柱穴の規模は、木根が重複したものを除くと上端径21×21cm・下端径12×11cmが最大で、最小の柱穴は上端径13×12cm・下端径11×10cmである。深さは25～36cmとバラツキが見られる。また、柱穴の平面形状も方形・不整形・多角形・不整形と変化に富んでいる。
- 遺物** 本遺構とした柱穴の埋土や周辺からは、本遺構の時代を示すような遺物は出土していない。

(6) SB-06 独立柱式建物跡 (第34図版)

- 検出位置** SB-06とした柱穴群の検出位置は、高位面のAII区h-16、AII区i-15～17の区域にわたって分布している。本柱穴群の北東側から東にかけては、桐の木の植栽痕や柱穴様小土坑が不規則に分布するが、他の遺構は存在しない。
- 検出状況** 本遺構を検出した区域の層序は、基本土層のI a～I b層が30～35cmと厚く、II層は約15cmほどの厚さをもっている。柱穴群の検出はII層上面である。
- 埋土** 木根が重複した一ヶ所を除けば、I b層と同様のシルト質黒褐色土に黒色シルトや暗褐色土のブロックが混在した埋土で、粘性がわずかに見られ、締まりはあまりない。
- 配列** 梁方向と考えられる北西～南東方向の柱穴列は、北東側ではほぼ直線をなすが、南西側では出入りがあり直線とはならない。梁方向は、柱穴4穴による3間、桁方向は1間である。柱穴の中心間隔は、梁方向の北東側で148cm、148～144cm、南西側では124cm、148cm、160cmである。桁方向は、324～316cmの間にある。
- 柱穴の規模** 柱穴の規模は、上端径38×28cm・下端径34×22cmのものが最大で、上端径24×23cm・下端径13×11cmのものが最小である。深さは、斜面上方である北側が20cm前後、斜面下方側が15～13cmである。全体的にバラツキのある柱穴群である。柱穴の平面形状は、概ね楕円形を呈するが不整形なものも見られる。
- 遺物** 何ら出土していない。

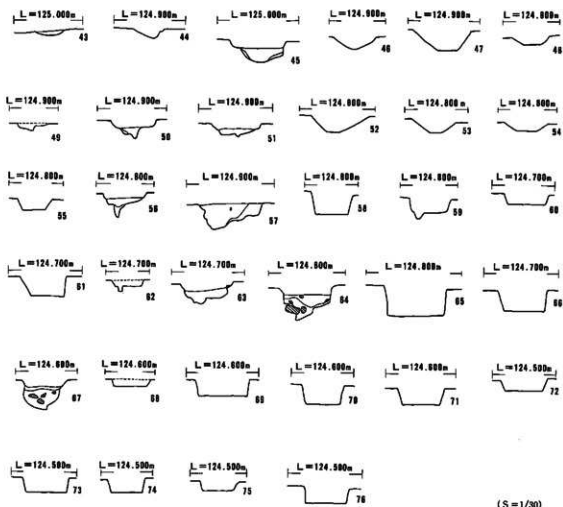
(7) SB-07 独立柱式建物跡 (第35図版)

- 検出位置** SB-07とした柱穴群の検出位置は、高位面のAII区f-19・20、g-19を中心とした区域に分布している。本柱穴群の南西側であり、SB-06との間には桐の木の植栽痕や柱穴様小土坑が不規則に分布しているが、他の遺構は存在しない。
- 検出状況** 本遺構を検出した区域の層序はSB-06と同様であるが、基本土層のI層が厚く、またII層の傾斜が南側に向かって急であるため(I層が60～70cm)、柱穴の存在が想定される位置で確認できなかったものもある。
- 埋土** 埋土の状況は、SB-05・06と同様であるが、暗褐色土・明褐色土の混在は非常に少ない。ま



(S = 1 : 100)

第31圖版：SB-04掘立柱式電物除排土坑群

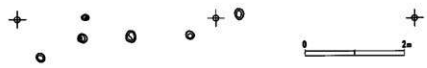
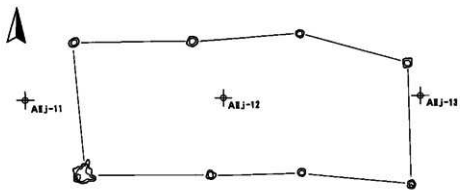


(S=1/30)

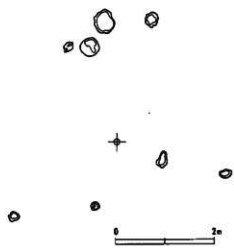
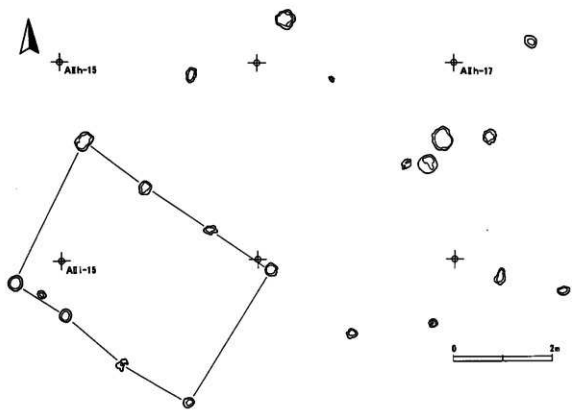
第32図版：SB-04掘立柱式建物跡様土坑群断面図

た締まりはなく、粘性も非常に弱い。

- 配 列 梁方向と考えられる北北東～南南西方向の柱穴列は、北北西側ではほぼ直線であるが、南南東側では出入りがあり直線とはならない。梁方向の柱穴は4穴で3間、桁方向は1間である。柱穴の中心間距離は、梁方向の北北西側で212～213cm、南南東側では204cmと140cmである。また



第33图版：SB-05獨立柱式建物跡



第34图版：SB-06獨立柱式建物跡

桁方向は220cmと223cm、210cmである。

柱穴の規模 柱穴の規模は、確認面が傾斜しているためか、上端径30×26cm・下端径11×10cmを最大とし、上端径10×8cm・下端径8×8cmのものが最小である。深さは斜面上方で15～25cm、下方で5～10cmである。

柱穴の平面形は、円～楕円形を基調とするが不整形な形状である。

遺物 何ら出土していない。

4. 焼土層と粘土貯蔵について

本遺跡で検出した焼土のうち住居跡以外で検出したものは5箇所ある。これらのうち、3箇所は投棄などによる異地性の焼土であり、他の2箇所は現地性の焼土である。これら2箇所の焼土は、何れも高位面の基本土層II層上面で検出している。

(1) SN-01焼土層 (第36図版)

検出位置 検出位置は、高位面のAII区k-04であり、検出層位は高位面の基本土層であるII層上面である。検出状況は、基本土層のI層を除去した段階で、I層土がレンズ状に残る部分をクリーニングしたところ凹部状になったところから本焼土を検出した。

規模等 焼土層の規模等は、東西方向42cm・南北方向25cm・最大層厚3cmで、焼土層の底部は起伏している。また、焼土層の下位にある基本土層のII層も弱い焼土化を生じている(破線部)。

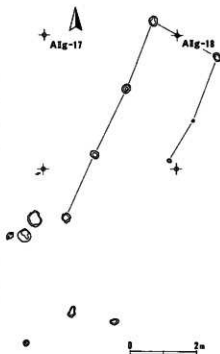
層相 焼土層の性状・層相は粘性と締まりがわずかに見られる砂質土で色調は赤褐色土(2.5YR4/6)である。焼土層の下位の色調は、暗褐色～褐色(7.5YR3/4～4/4)で、基本土層II層よりやや明るくなっている。

遺物 焼土層の包含物は、極少量の炭化物片だけであり周辺を含めて土器・石器は出土していない。

(2) SN-02焼土層 (第36図版)

検出状況 検出位置は、高位面のAII区o-02～03にかけての範囲であり、検出層位は高位面の基本土層であるII層上面である。検出状況は、基本土層のI層を除去した段階で、I層土およびI層土と焼土小粒・炭化物片などが混在したレンズ状の部分をクリーニングしたところ扁平な角礫～亜円礫が点在する中に不整形に広がる焼土層を確認した。また、焼土層の北側には、明黄褐色の粘土塊(10YR7/6)が小土坑状の凹地に貯蔵されていた。

規模等 焼土層の規模等は、北北西～南南東方向54cm・直交する方向の最大幅18cm・最大層厚4cmで、



第35図版：SB-07掘立柱式建物跡

焼土層の底部は全体的に凹面をなし、かつ起伏している。なお、焼層の下位にある基本土層のII層はほとんど変色していない。

周辺には、大小8個の偏平角礫～歪円礫（31～4cm）が散在しており、それらの一部では熱変を生じているものも見られたが、焼土周辺には礫の埋設穴は認められなかった。

焼土の性状・層相は、粘性がほとんどなく、わずかに締まりのある砂質の暗褐色土（2.5YR4/6）である。なお、焼土上面では炭化物片が散在していたが焼土中には2～3mmの小礫が含まれ、炭化物片は含んでいない。

遺物としては、前述の焼土上面に散在する炭化物片が見られただけで、周辺を含めて土器片や石器などは出土していない。

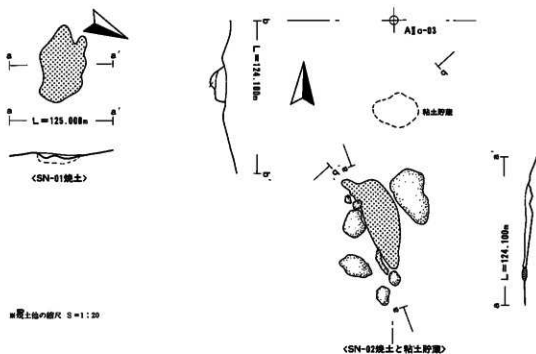
（3）粘土の貯蔵について（第36図版）

検出位置はSN-02焼土層の北側30～40cmの位置で、高位面AII区0-02～03にまたがっている。検出状況はSN-02焼土層と同様にI層土を除去した後、I層土と焼土粒・炭化物片が混在したレンズ状の部分クリーニングしたところ、全体的に凹部となった部分から明黄褐色（10YR7/6）の粘質土を確認した。

粘質土を貯蔵している小土坑は、東西方向24cm、南北方向19cm・深さ最大8cmほどの不整形円形で、底面は凹凸が見られる。

小土坑に貯蔵されていた粘質土は細別2種類で、上部はやや締まりのある明黄褐色粘土（10YR7/6）で、下部は締まりがあり、1～2mmの小礫を含んだに黄褐色粘土（10YR6/4）である。

人工遺物は何ら含んでいない。また周辺からも文様等の判明する土器片は出土していない。



第36図版：焼土層と粘土貯蔵

表 2 板倉造跡 遺構内石積計測表

通算	図版番号	器種	出土区・層位	法 量 (cm, g)			岩 質	生成年代・産地等	備 考
				長さ	幅	厚さ			
1		石鏝	SI01 埋土2	1.6	1.2	0.3	黒曜石	不詳	
2		石鏝	SI01 埋土2	2.3	1.5	0.4	チャート	北上山地・古生界	
3		石鏝	SI01 埋土2 下部	1.9	1.3	0.5	黒曜石	不詳	
4		石鏝	SI01 埋土2	2.5	1.4	0.4	黒曜石	不詳	
5		磨石	SI01 埋土2 上部	8.4	7.9	5.6	輝石珪岩	北上山地・中生界	
6		石鏝	SI02 埋土2	2.3	1.6	0.3	チャート	北上山地・古生界	
7		石鏝	SI02 埋土2	2.2	1.5	0.3	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	
8		石鏝	SI09 埋土1	3.0	1.5	0.4	粘板岩	北上山地・古生界	
9		石鏝	SI09 埋土1	2.1	1.3	0.3	粘板岩	北上山地・古生界	
10		石鏝	SI09 埋土1	1.7	1.6	0.3	珪質泥岩	奥羽山地・中新統	
11		石鏝	SI10 埋土1	2.1	1.4	0.5	チャート	北上山地・古生界	
12		石匙	SI12 埋土1	2.2	2.0	0.4	チャート	北上山地・古生界	
13		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	2.1	1.0	0.3	極細粒凝灰岩	奥羽山地・中新統	
14		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	1.8	1.2	0.3	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	
15		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	1.7	1.3	0.3	チャート質粘板岩	北上山地・古生界	
16		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	2.0	1.2	0.3	チャート	北上山地・古生界	
17		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	2.1	1.2	0.2	チャート	北上山地・古生界	
18		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	2.0	0.1	0.4	極細粒珪質凝灰岩	奥羽山地・中新統	
19		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	1.9	1.2	0.3	極細粒凝灰岩	奥羽山地・中新統	
20		石鏝	SK01 埋土黒褐色土	2.2	1.4	0.7	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	
21		尖頭器	SK01 埋土黒褐色土	2.9	1.9	0.9	チャート	北上山地・古生界	
22		石鏝	SK01 埋土上部黒褐色土	2.0	2.7	0.5	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	
23		石鏝	SK01 埋土上部黒褐色土	2.6	2.7	0.3	赤褐色凝灰岩	北上山地・古生界	
24		不定形	SK01 埋土黒褐色土	3.6	3.3	0.8	粘板岩	北上山地・古生界	
25		不定形	SK01 埋土上部黒褐色土	5.3	3.5	1.4	珪質泥岩	奥羽山地・中新統	
26		石皿	SK01 埋土中部黒褐色土	33.0	25.2	13.2	凝灰岩質凝灰岩	北上山地・古生界	
27		磨製石斧	SK01 埋土上部黒褐色土	4.2	2.8	1.0	凝灰岩	北上山地・古生界	
28		石鏝	SK12 埋土	2.7	1.5	0.5	凝灰質泥岩	奥羽山地・中新統	
29		石鏝	SK13 埋土	2.4	1.5	0.5	チャート	北上山地・古生界	
30		磨石	SK19 埋土	7.9	7.7	5.9	アルコーヌ砂岩	北上山地・中生界	
31		石鏝	SK26 埋土	2.2	1.4	0.4	粘板岩	北上山地・古生界	

IV. 遺構外の遺物

1. 縄文土器

1～6は貝殻文沈線文系の土器群である。胎土にはいずれも少量の金雲母を含んでいる。1、貝殻文
2は同一個体で1は体部下半部から底部に近く、底部は尖底と言うよりは丸底を呈する。2は
胴部の屈曲部に相当する。底部付近まで三角形の沈線文と貝殻文が展開され、2には
細かい円形刺突文が認められる。3はやや小型の口縁部で頸部の平行沈線文の下に腹線文が充
填されている。4、5は同一個体で口縁部がやや肥厚するゆるやかな波状口縁である。文様は
1、2と同様であるが4の三角形の頂点を盛り上げた部分に円形刺突文が見られる。6もゆる
やかな波状口縁で、口縁部突起と平行沈線文の間に腹線文が施文されている。

これらの土器はAⅡ区のSB-02 独立柱建物跡横土坑群が位置する周辺のⅡ～Ⅲ層から散
在して出土している。6はAⅡ区k03～04に位置するSI-01住居跡床下からの出土で
ある。

7は尖底部。太めの縄文が施文されているようであるが、摩滅が著しく不明である。早稲田 尖 底
6類と思われる。

8～23は胎土に繊維を含み、文様は縄文を基本とする一群で7もこれに含まれる。裏面には 繊維土器
縄文は施文されず、整形・調整も不十分で、器面に繊維の痕跡を残すものが多い。胎土には微
量の金雲母を含んでいる。斜行縄文を基本としているが、側面丘文(14、18)や羽状縄文(11、
21他)なども認められる。11は結節第1種羽状縄文、21は0段多条の2種の原体の横位回転で施
文されている。前期初頭に属する繊維土器の一群である。

24～136までは縄文時代後期の土器で、主体は平行沈線文をS字状あるいは刺突文等で区画す 後期の土器
る一群と、磨消縄文で曲線的なモチーフを描く一群と、大きく2つのグループに分けられる。

前者は24～84までである。29は口縁部に縄文原体の末端を押圧している。34は浅鉢あるいは
鉢形土器の底部で、「甔」状の小孔が多く穿たれている。孔は内面から表に向けて丸い工具で刺
突されているが、なかには貫通していない孔も認められる。内面は丁寧に整形されているが、
外面は刺突の際の瘤が残るなど、内面に比して雑である。内外面とも付着物は認められない。
同様の資料は当センターで調査した平泉町新山権現遺跡等でも発見されている。36～42は口縁
部に大形の突起もつ一群で、42は中空の突起となる。

器形は浅鉢と深鉢が多く、壺は少ない(115)。

137～138は晩期の土器。139は土版であるので土製品で説明する。2点とも小型の鉢形土器 晩期の土器
の口縁部で、大洞C2式に属する。

145～150は縄文土器の底部である。148は後期の小形壺で上げ底、他も後期の大型の土器と推 底 部
定される。148を除いて縄代痕である。

2. 弥生土器

140～144は弥生時代後半期の土器。140は浅鉢の胴下半部で、三角文および連弧文が施文され 連弧山形文
ている。141は鉢形土器で連弧山形文と連弧文が多重に施文されている。2点とも磨消縄文であ

る。142、143はやや大形の甕の胴下半部でいわゆる不整捺糸文が縦に施文されている。いずれも弥生時代終末期の土器で、144はこの一群の土器の底部と推定され、やや上げ底となり、その部分に縄文が施文されている。

3. 土器と土製品

基本的には土製品をまとめたが一部には土器も含まれている。153～155は注口土器の注口部でいずれも無文である。156と160は無文のミニチュア土器で、158と159はウィングラス状の土器で2点とも脚部が欠損している。161は逆に脚部のみのウィングラス状の土器と思われるが、土偶の足の可能性も含んでいる。157は沈線文の鉢形土器。

器台 162、163は器形の類似する器台である。ラッパ状に開いた脚部の裏面は殆ど整形されており、受け部の面が磨かれていることから、天地を決定した。受け部はやや窪んでおり、器面はよく磨かれている。受け部のサイズから判断すると、小形の土器あるいは底面の小さな「物」が乗せられたものと推定される。

鉢形 172は把手のついた土鉢状土製品で、中空とはならない。底を除いた全面に縄文が施文されている。本来、底面にも施文されていたらしいが、摩滅して痕跡を留めていないような状況にある。把手には紐などが掛けられた痕跡は認められない。

以上の土器、土製品はすべて後期に属する資料である。

土版 139は晩期の土版である。おそらく長方形の形状で、その中央部分と推定される。表面はX字状あるいは「の」字状の沈線文で、裏面は矢羽根状の平行沈線文である。ほかの晩期の土器からすると大洞C2式に属するが、即断は避けた。丹塗りの痕跡は無い。

土偶 いずれも後期に属する土偶で、体部1点(164)、肩および手3点(165～167)、足4点(168～171)計8点が出土している。体部は左足の一部が残り、胸と腹の部分は剥落しており詳細は不明であるが、腹部の膨らみは造り出している。背中と尻は形状を保っている。肩および手は中型に属するもので、手は凹みで表現され指は刻まれていない。腕の断面は方形に近く、文様は無い。脚部は168のみで、やや大形のものに沈線の不規則な文様が施文されており、整形も他の脚部に比較すると丁寧に磨かれている。4点とも足指は表現されていない。破損面にアスファルト等の異物は一切認められない。

これら土偶の出土地点にまともりは無く、出土状況に特段の注意を惹くような状況は認められなかった。

羽口 173はフィゴの羽口で、SB-02掘立柱建物跡様土坑群の南側で出土したが、関連については不明である。荒いヘラ状の工具で全体を多面状に削り整形している。先端部は加熱により著しく溶変している。

4. 石器

形状の明らかな44点を図示した。出土した地点は縄文時代の遺構が集中している周辺が多く近世の遺構が展開する地点からは、ごく希にしか出土していない。これら石器の詳細については別表3を参考にしていたがきたい。

石鏃 石鏃は有茎の石鏃12点(174～185)、無茎で抉りのある石鏃6点(186～191)、基部が丸く先端

部が細い石鏃2点(193、194)、形状が菱形あるいは三角形に近い石鏃7点(195～201)に分類した。いずれも小形の石器であるが、なかには槍あるいは擧器、削器の機能を有する石器が含まれている可能性は当然ある。

石鏃は3点出土している(202～204)。基部は3点とも異なり、それぞれ円形、菱形、半円形を呈している。 石 鏃

石匙はすべて箆型で(205～209)で横型は遺構外では明らかではない。先端部2点が欠損しており、228のみが刃が平らとなっている。 石 匙

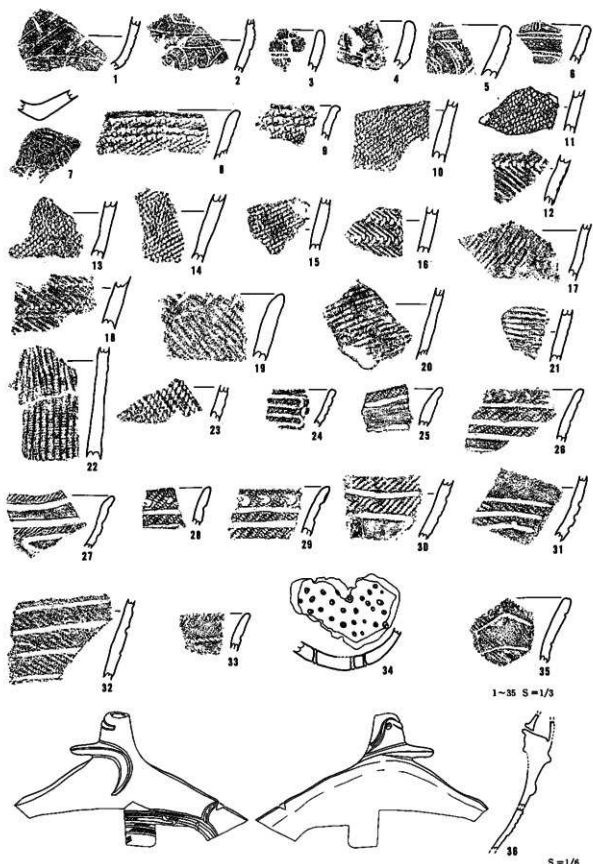
擧・削器は小形が2点と大形が4点(210～215)出土した。いずれも不定形な形状で、刃は左右両面や一部分のみと一定していない。 擧・削 器

石斧は2点とも磨製石斧で(216、217)でバチ形を呈する。217には刃部や側面に使用痕が良好に残っている。 石 斧

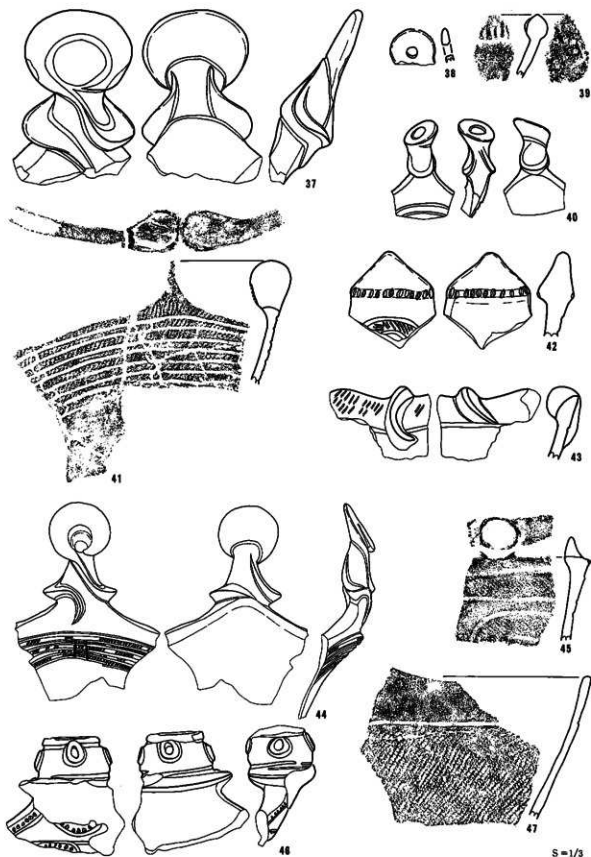
磨石は不整の長方形の川原石の一面を加工して用いている。 磨 石

表 1: 板倉遺跡 遺構外石層計測表

通算	図版番号	断面	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重量	岩質	生成年代・産地等	備考
1		石壁	III	1.8	1.3	0.3	0.37	チャート	北上山塊・古生界	
2		石壁	III	2.3	1.5	0.4	1.11	粘板岩	北上山塊・古生界	
3		石壁	III	2.6	1.4	0.4	1.09	チャート	北上山塊・古生界	
4		尖頭礫	III	3.1	2.2	0.9	4.70	チャート	北上山塊・古生界	
5		尖頭礫	III	2.8	2.1	1.1	4.67	赤褐色凝灰岩	北上山塊・古生界	
6		石壁	III	3.3	1.6	0.3	1.43	チャート	北上山塊・古生界	
7		磨製石片	II	4.6	4.4	2.5	54.93	粘板岩	北上山塊・古生界	
8		不定形	II	5.1	4.3	0.9	12.80	珪質凝灰岩	北上山塊・古生界	
9		石壁	III	3.4	1.9	0.5	1.91	凝灰質粘板岩	奥羽山塊・中新統	
10		石壁	III	2.8	1.5	0.4	1.02	凝灰質粘板岩	奥羽山塊・中新統	
11		石壁	III	3.3	1.6	0.3	1.69	粘板岩	奥羽山塊・中新統	
12		石壁	III	6.3	2.8	0.6	11.00	凝灰質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
13		石壁	III	3.0	1.5	0.3	1.02	粘板岩	奥羽山塊・古生界	
14		石壁	III	2.3	1.1	0.2	0.62	チャート	北上山塊・古生界	
15		不定形	III	1.8	2.1	0.4	1.37	チャート	北上山塊・古生界	
16		尖頭礫	III	2.7	2.2	1.1	4.79	チャート	北上山塊・古生界	
17		石壁	III	3.0	1.4	0.2	0.87	チャート	北上山塊・古生界	
18		尖頭礫	III	2.6	2.0	0.8	3.67	チャート	北上山塊・古生界	
19		石壁	III	2.9	1.4	0.4	1.39	赤褐色凝灰岩	北上山塊・古生界	
20		石壁	III	2.9	1.5	1.0	2.92	珪質凝灰岩	北上山塊・古生界	
21		石壁	II	1.7	1.4	0.2	0.69	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
22		石壁	II	2.3	1.6	0.4	1.25	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
23		石壁	II	2.4	1.0	0.2	0.60	チャート	奥羽山塊・中新統	
24		凹石	II	18.3	5.5	2.5	270.00	凝灰質凝灰岩	北上山塊・古生界	
25		石壁	II	1.7	1.4	0.4	0.77	風化石	不詳	
26		石壁	III	2.2	1.4	0.3	0.58	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
27		石壁	III	1.8	1.3	0.3	0.45	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
28		石壁	III	1.7	2.1	0.5	1.73	チャート	北上山塊・古生界	
29		磨製石片	II	11.5	4.8	2.5	189.06	粘板岩	北上山塊・古生界	
30		石壁	II	5.8	1.8	0.5	17.62	凝灰質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
31		石壁	III	5.3	1.9	0.5	0.89	チャート	奥羽山塊・中新統	
32		石壁	III	2.7	1.5	0.3	0.89	チャート	北上山塊・古生界	
33		石壁	III	2.3	2.9	0.2	0.19	チャート	北上山塊・古生界	
34		石壁	III	6.9	2.3	0.2	11.17	チャート	北上山塊・古生界	
35		石壁	III	2.7	1.5	0.2	0.64	珪質凝灰岩	不詳	
36		石壁	II	2.3	1.9	0.3	0.94	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
37		石壁	III	5.8	4.1	1.5	45.41	粘板岩	北上山塊・古生界	
38		不定形	III	5.6	3.3	1.5	30.62	凝灰質珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
39		石壁	II	3.7	7.6	1.7	51.59	凝灰質珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
40		不定形	III	6.6	6.9	2.0	99.31	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
41		尖頭礫	II	2.2	2.0	0.8	2.35	チャート	北上山塊・古生界	
42		石壁	III	6.6	4.0	1.4	27.72	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	
43		石壁	II	2.5	1.7	0.3	0.65	珪質凝灰岩	北上山塊・古生界	
44		石壁	II	1.3	1.2	0.4	0.64	珪質凝灰岩	奥羽山塊・中新統	



第37图版：遺構外出土遺物(土器1)



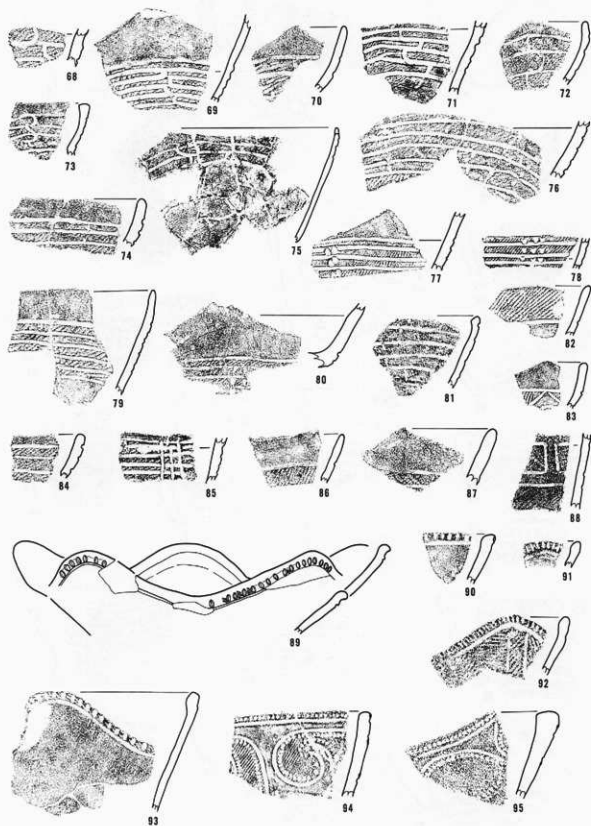
S=1/3

第38图版：遺構外出土遺物(土器 2)



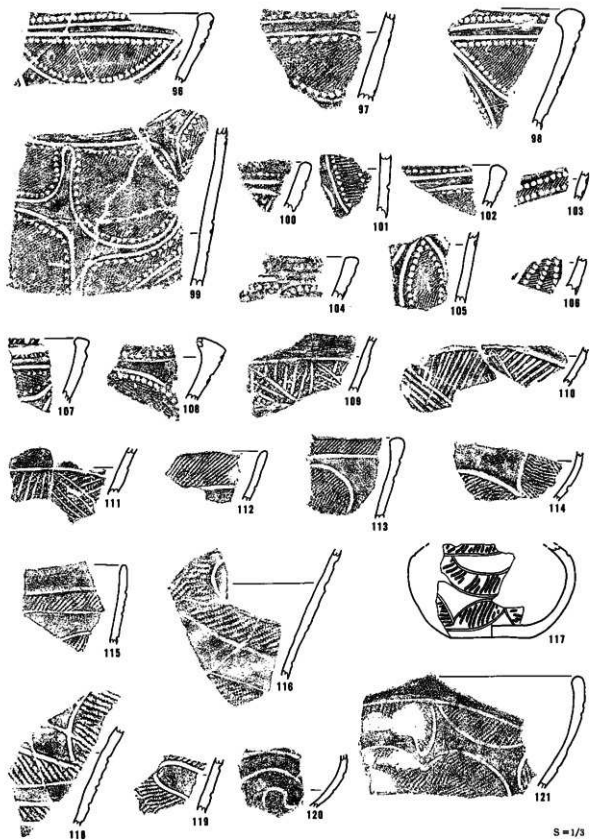
S = 1/3

第39図版：遺構外出土遺物(土器3)



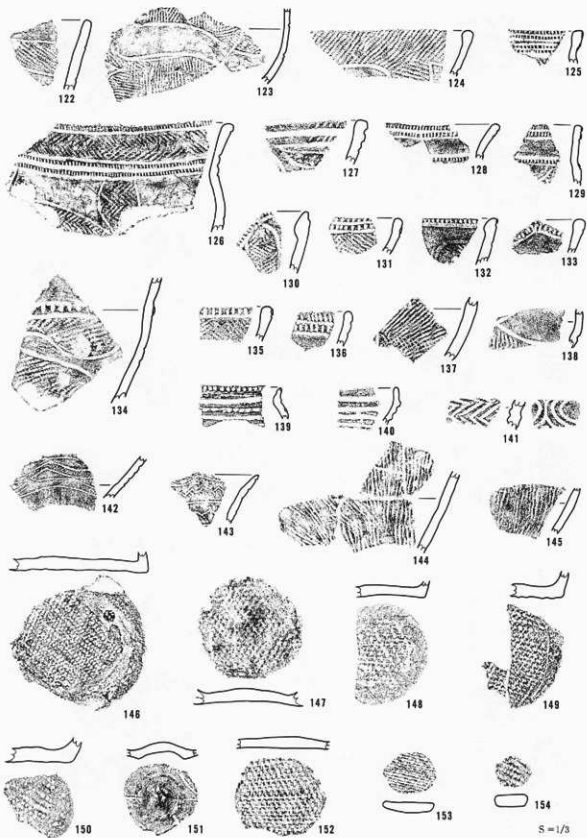
S=1/3

第40図版：遺構外出土遺物(土器4)

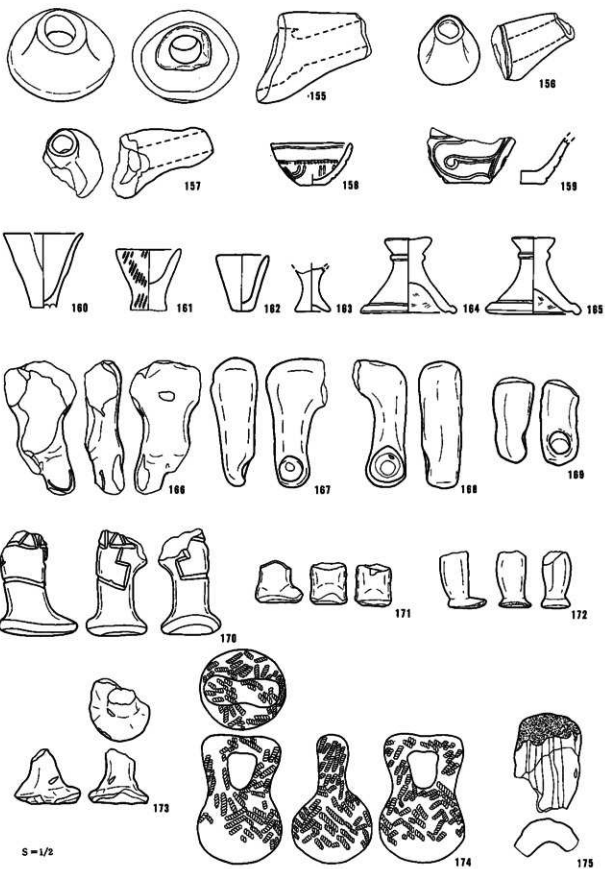


S = 1/3

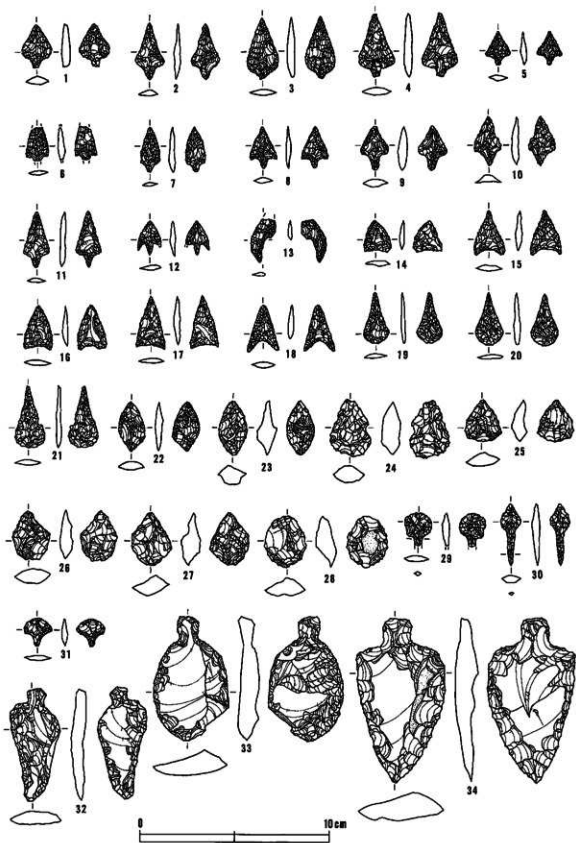
第41圖版：遺構外出土遺物(土器 5)



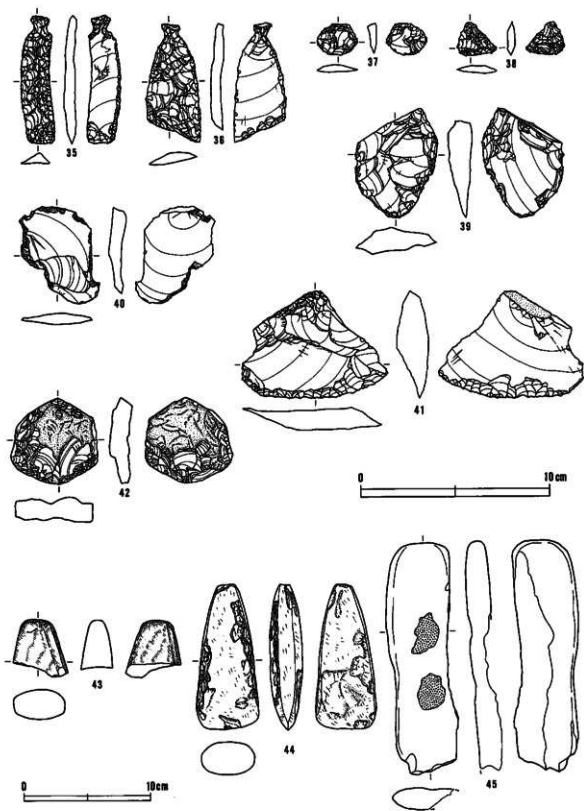
第42図版：遺構外出土遺物(土器6、土製品1)



第43図版：遺構外出土遺物(土器7、土製品2)



第44图版：道棚外出土遺物(石器 1)



第45图版：遼南外出土遺物(石器 2)

VI. 分析・鑑定

1. SI-01住居跡出土の炭化物の年代測定

板倉遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	種 類	前処理・調整	測定法
No1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 長時間測定 ベンゼン合成	β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年代BP)	歴年代 ⁴⁾ 交点 (1 σ)	測定No. (Beta-)
No1	3,330 \pm 150	-27.1	3,300 \pm 150	BC1535 (BC1745 TO 1415)	89420

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、歴年代 (西暦) を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。歴年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と歴年代補正曲線との交点の歴年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ 値が表記される場合もある。

VII. まとめ

板倉遺跡の調査では、縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器・土製品・石器などの遺物、詳細は不明であるが縄文時代後期と考えられる竪穴住居跡や住居跡状竪穴遺構、各種形態の土坑、そして縄文時代および近世～近代の独立柱建物跡などが確認された。また、近代～現代に連続する土取跡も確認されたが、土取跡については報告説明を省略している。

1. 竪穴住居跡

遺構記号では住居跡状竪穴遺構としたSK I-01を含めて14棟の竪穴住居跡について、調査上の問題や疑問点についてまとめる。

(1) SI-01住居跡

本住居跡は、床面と壁面に偏平な粘板岩や石灰岩の亜角礫～角礫を配した所謂「敷石住居」敷石住居と考えられるものであるが、床面と壁面の全面で偏平礫を確認したものではない。床面での礫痕跡は確認できなかったが壁際では礫埋設の痕跡が認められたことから、この偏平礫の欠失は礫の欠失本住居跡廃棄後に持ち去られた可能性が高い。

床面の北西側では、比較的長めの偏平礫に囲まれるように径65×55cmの範囲から赤色顔料が顔料の分析出土している。この赤色顔料の成分元素と鉄物成分の分析を行なった結果、石英を少量含んだ辰砂の粉末か、辰砂を粉碎し石英を除去した水銀朱(HgS)であることが判明した。

縄文時代における赤色顔料の利用は、死者に永遠の生命あるいは再来を与えるための施朱の朱の利用習俗、各種の漆器や土器・土製品などへの塗布や彩色として用いられている。本遺跡では、墓塚と考えられる土坑は認められるものの土坑底から赤色顔料を確認したものはない。また、土器・土製品では赤色顔料の塗布・彩色がなされたものではないかと推定される破片も見られたが風化磨耗が著しいため不明である。その他、分析者の指摘のように赤色顔料製造の作業場、工房跡あるいは赤色顔料を利用した彩色塗布の作業場と考えられるが顔料製造の道具と考えられる石皿や磨石は出土していない。

その他、疑問な点として不明な柱穴配置、炉跡が認められないことなどが挙げられるが他遺跡の類別との比較については省略する。

本住居跡の時代・時期は、基本層序との関係や埋土中からの出土土器片から縄文時代後期の時代の時期中葉に近い時代・時期と考えられる。また埋土下部から出土した炭化物の炭素14法による年代測定では3300±150Y. B. Pの測定値を得ている。

(2) SI-02～08住居跡群

本住居跡群の特徴は、①部分的にでも壁の立ち上がりを確認した住居跡(SI-02・03・04・05住居跡)では、主柱穴と壁柱穴とが不明、あるいは不明瞭である。②壁柱穴がほぼ一周するSI-06住居跡では壁の立ち上がり、主柱穴の配置が不明あるいは不明瞭であること。また、SI-08住居跡のように柱穴列が円弧をなすと考えた場合、通常斜面上方側の柱

穴列が明瞭となる、と考えられるが斜面上方側には一連の柱穴列が認められない。またSI-07住居跡とした柱穴列は平面形が長方形の住居跡とも考えられるが全体配列は不明である。

③何れの住居跡でも、床面は起伏し、礫が露出しているものの貼床や整地層を確認できなかった。

時代・時期 SI-02住居跡の埋土から出土した土器片から縄文時代後期中葉に近いものと考えられる。しかし、重複も著しく個々の住居跡の時代・時期、そして前後関係についても不明瞭である。

(3) SI-09・10・11・12・13住居跡、SKI-01住居跡

楕円形住居 平面形状が楕円形を呈する住居跡(SI-09・11、SKI-01)は、各々長軸方向が異なっているものの共通する点も見られる。共通する点としては①壁の立ち上がりが緩やかであり、部分的に床と壁との境が不明瞭である。②主柱穴と考えられる柱穴配置は、長軸方向に位置するが、確認できなかったものもある。③炉と考えられる焼土の位置は異なるものの何れも地床炉である。④何れの住居跡も壁柱穴列は見られない。⑤貼床の形跡が認められない。

偶丸方形～円形住居 平面形が偶丸方形～略円形の住居跡と考えられるSI-10・12・13住居跡では①壁の立ち上がりは比較的明瞭である。②主柱穴の配置が不明瞭で、壁柱穴列は認められない。③炉と考えられる焼土は何らの囲い施設をもたない地床炉である。④貼床の形跡が認められない。

時代・時期 これらの住居跡の時代・時期は、基本土層との関係や埋土中からの出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉に近いものと考えられるが、個々の詳細な時期については不明である。

(4) 住居跡全体について

①赤色顔料を出土した整穴住居跡の用途については不明であるものの、一般的な住居ではなかったと考えられる。

②何れの住居跡においても床面が起伏し、礫の露出も見られるのに貼床の痕跡を確認できなかったこと。これは、埋土と床土(貼床土)とが同様の性質であったためなのか、あるいは本来的に貼床がなかったのか。この点については、今後砂鉄川・猿沢川・寒沢川流域における同様の地質・立地を示す遺跡調査において注意すべき点である。

③石囲炉が見られず、柱穴配置も不明であること。

④床面に遺棄や投棄されたと考えられる出土状態を示す遺物が存在しないこと。

2. 土坑について

土坑の分類 土坑全体の形態を遠観して見て、本遺跡で“土坑”としたものの用途・機能は大別して(1)貯蔵穴 (2)土坑墓 (3)陥し穴 (4)その他不明の4つに分類される。

(1) 貯蔵穴と考えられる土坑(SK-01・03・11・19・21他)

これらの土坑は、埋土の色調・構成物は他の土坑と大差ないが、何れも自然堆積と考えられる埋土をもつことや、土器・石器の投棄がなされていることなどによる。特にSK-01土坑においては、多量の投棄遺物とラミナを伴う自然堆積土層の状態から土坑廃棄の時点では空で

あったと考えられる。

(2) 土坑墓と考えられる土坑

(A群-SK-02・05・06・07・08・10・18・20・21土坑)

(B群-SK-12・13・25土坑他)

A群とした土坑は、その長軸方向は異なるものの遺構確認面の状況、埋土の堆積状態、あるいは底部周辺への配礫状態から土坑墓であったと考えられる土坑である。

SK-05・08土坑は、不規則ながら土坑確認面、あるいは底部周辺に礫を配しており、埋土は上部と下部との差はあるものの人為堆積の層相を呈している。他のA群土坑は、礫の配置は認められないものの埋土の埋積状態、土坑の形態から永久的な土坑墓と考えられる。

B群とした土坑は、全体的に浅く、長軸方向も異なり、埋土の下部は人為堆積の層相を呈し、B群土坑の上部は自然埋積の層相を呈するものが多い。これらの土坑は、浅いことや下部は人為層であることなどを考えると、改葬のための土坑墓の可能性が考えられる。

A群・B群とも何れの土坑からも副葬品と考えられる遺物の出土や赤色顔料の分布は確認できなかった。

(3) 陥し穴と考えられる土坑

陥し穴と考えられる土坑は、SK-09土坑1基だけである。土坑の立体形状は砲弾を逆さまにしたような形状で、底部に逆茂木痕と考えられる副穴1つをもっている。埋土の状態は自然埋積の層相を呈しているが、出土遺物は何ら認められない。

本土坑の形態を呈する陥し穴遺構は、縄文時代前期に見られる場合が多いようであり、遺構外出土の縄文時代前期の土器と重ね合わせることで、時期幅が限定されるものと考えられる。

(4) その他不明の土坑

形態・規模とも様々であり、土坑の形態・埋土の状態・出土遺物、あるいは住居跡等との付属関係等を見ても、どのような用途・機能をもっていたかが不明の土坑である。これらも詳細な時期を示す遺物は出土していないが、基本土層との関係から縄文時代と考えられる。

3. 掘立柱式建物跡、および同建物跡様に配列する土坑群

掘立柱式建物跡4棟、掘立柱式建物跡様に配列する浅い小型土坑3群について説明を行ってきた。しかし、建物跡様に配列する土坑群は、個別図に示した土坑群以外にも連続する土坑が認められることや、多くの土坑の埋土に基本土層Ib層とした耕作土のブロックが混在していることから建物跡とは考えにくい土坑群である。

(1) SB-01掘立柱式建物跡

本建物跡は、建物跡を構成する土坑群の検出層位から縄文時代に所属する建物跡と考えられる。しかし、SI-01竪穴住居跡やSK-04土坑よりも新しい時期であることは明らかであるが、詳細な時期については不明である。

(2) SB-05・06・07 掘立柱式建物跡

これらの建物跡は、柱穴の配列・全体規模からみると農作業に関連した資材置場か農具置場に類似している。時代については、柱穴の埋土に基本土層のIb層が混在することや埋土に締りがないことから非常に新しい時代のもと考えられる。何れにしても年代を示す遺物はもちろん、類推させるような遺物も出土していないことから時代・時期は不明である。

(3) SB-02・03・04 掘立柱式建物跡様に配列する土坑群について

これらの土坑群は、明確な柱痕跡をもつものが極少数例見られるが、その規模は一定せず、また底面等に柱痕跡が見られる土坑の位置は各群の両端や中間的位置のものである。同一群とした土坑の中心間隔も135~160cm、あるいは145~175cmと非常に不規則な間隔をもっている。

類似遺構

本土坑群に類似する遺構としては配列・規模が異なるものの岩手県北上市所在の“坊館跡”（岩手埋文第145集）の報告や報告書作成中の岩手県軽米町“大日向II遺跡”（1993~1995年調査分）でも認められる。大日向II遺跡の場合は斜面のためか2列に並んだ土坑群であり、土坑の1つからは煙管の部品が出土していることから近世以降と考えられている。

SB-02・03・04とした土坑群は、建物跡様の配列を示すものの、積極的に掘立柱式建物跡と言える状況にはない。また所屬時期等については、それを示唆するような遺物が見られないことから不明と言わざるをえない。

4. 遺物等から見た遺跡の時代

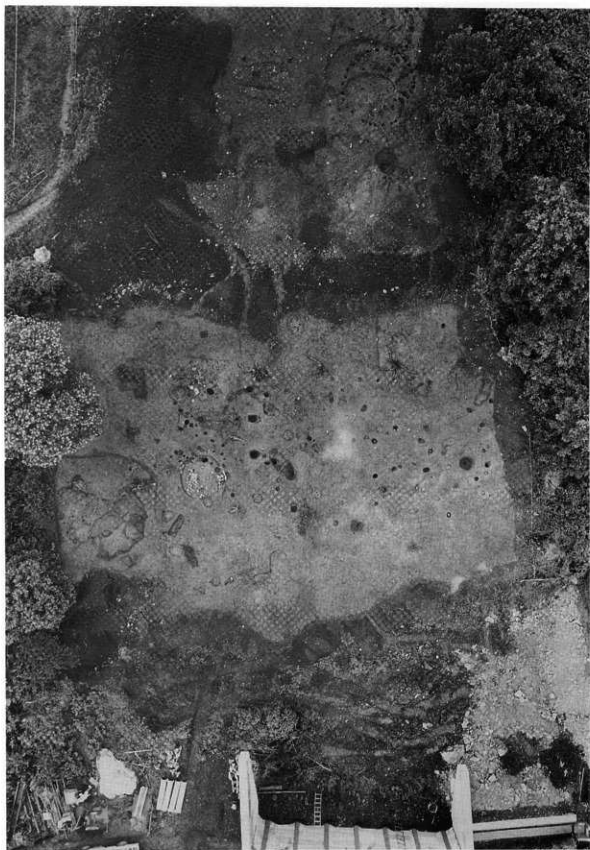
遺構の内外から出土した土器を概観すると、不連続ながら板倉遺跡は縄文時代早期・前期・後期・晩期、そして弥生時代後半期に何らかの生活が営まれていたことが理解できる。しかし、住居跡・土坑等の個々の時代・時期については詳細が不明である。また、吹子の羽口については時代・時期が不明である。

掘立柱式建物跡と同建物跡様に配列する土坑群については、時代や性格を示す遺物が出土していないが、基本土層や埋土の関係から近世・近代に属するものと思われる。同様に多数認められた土取跡は、地元関係者の話から近世以降~昭和期前半まで採土が行なわれているが、採土の初源は不明である。

写真図版



写真図版1：調査区域全景



※写真上方が東

写真図版 2：低位面遺構等分布状況(1)



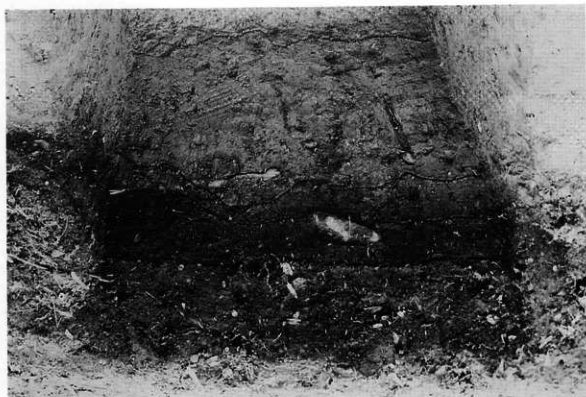
※写真上方が東

写真図版 3 : 低位面～高位面西側遺構等分布状況(2)



※写真上方が東

写真図版 4 : 高位面遺構等分布状況(3)

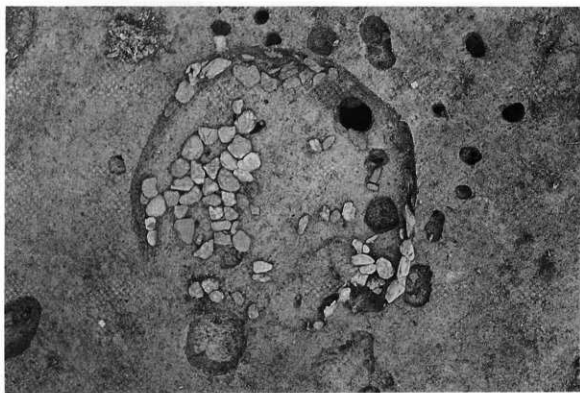


高位面(A1·k-24)



低位面(A1·o-13)

写真図版 5 : 基本層序(2地点)



住居跡全景



埋土土層断面(W-E)

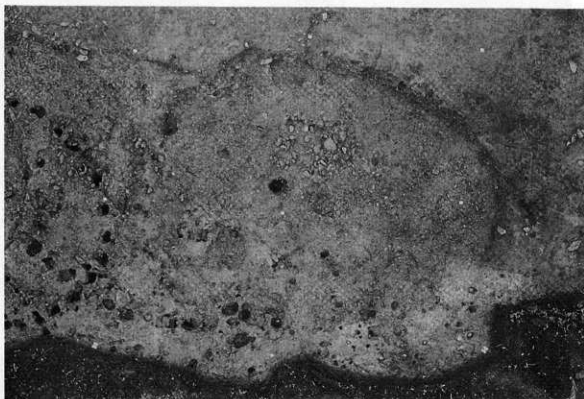


埋土土層断面(N-S)

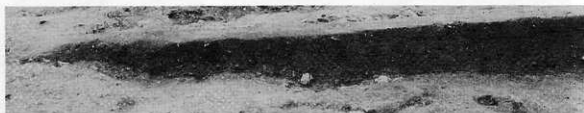
写真図版 6 : SI-01住居跡



写真図版 7 : SI-02~08住居跡重複状況



SI-02・03・08住居跡重複状態



埋土土層断面(東西ベルト西側)

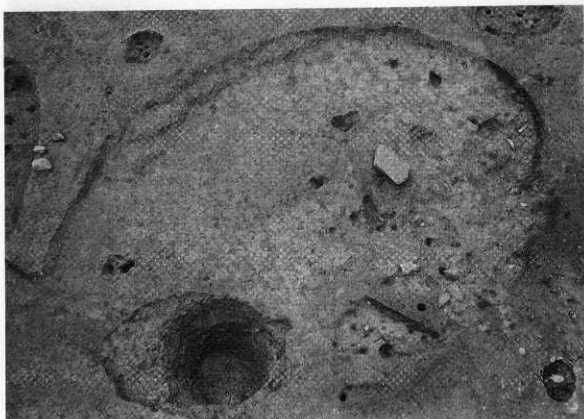


埋土土層断面(東西ベルト東側)

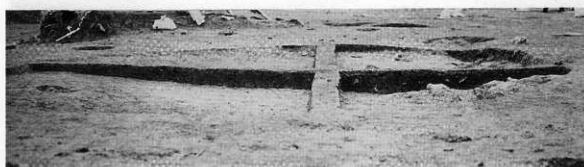


埋土土層断面(南北ベルト)

写真図版 8 : SI-02・03・08住居跡



住居跡全景



埋土土層断面(W-E)

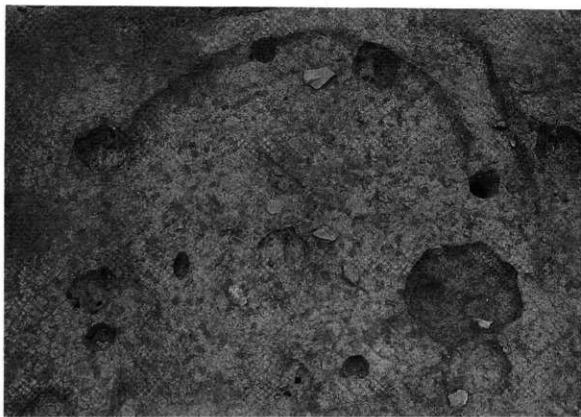


焼土断面



SK-23土坑断面

写真図版 9 : SI-09住居跡・SK23土坑



住居跡全景

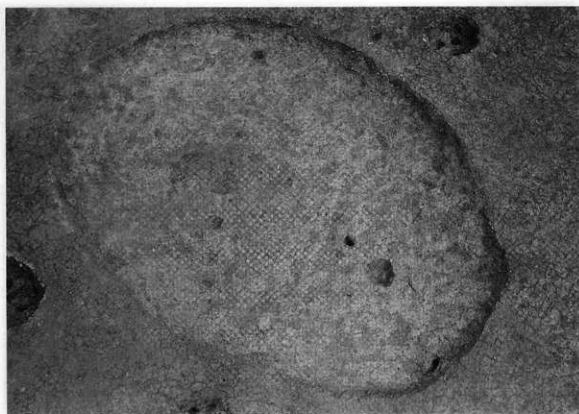


埋土土層断面(N-S)

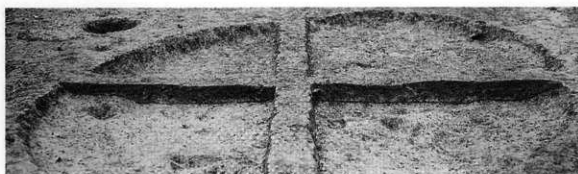


埋土土層断面(W-E)

写真図版10：SI-10住居跡



住居跡全景

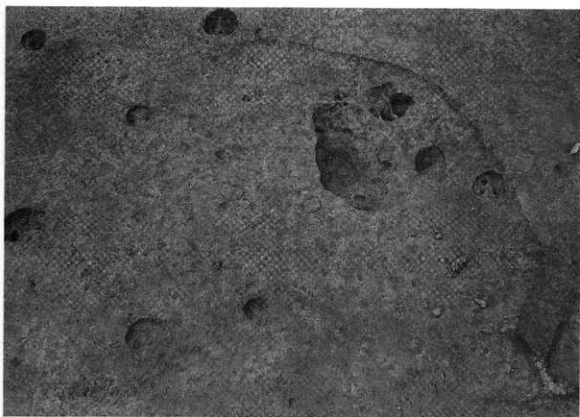


埋土土層断面(N-S)



焼土断面

写真図版11：SI-11住居跡



住居跡全景



埋土土層断面(N-S)



埋土土層



焼土断面

写真図版12：SI-12住居跡



住居跡全景

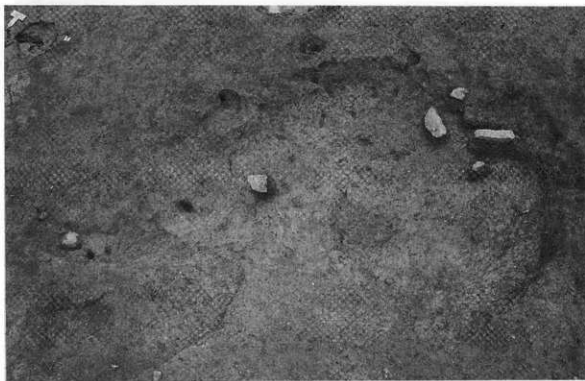


埋土土層断面(E-W)



埋土土層断面(N-S)

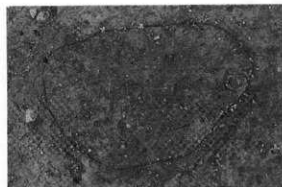
写真図版13：SI-13住居跡



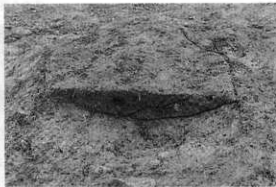
全 景



埋土土層断面(W-E)

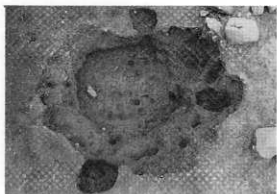


燒土平面



燒土断面

写真図版14：SKI-01竪穴状遺構



SK-03土坑完掘



SK-03土坑埋土断面



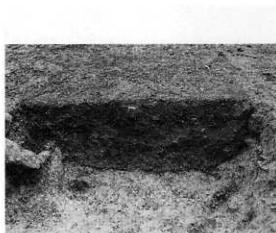
SK-07土坑完掘



SK-07土坑埋土断面

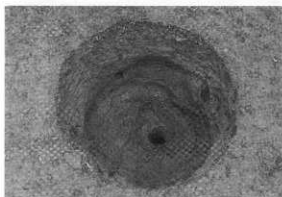


SK-08土坑完掘



SK-08土坑埋土断面

写真図版15：土坑(1)



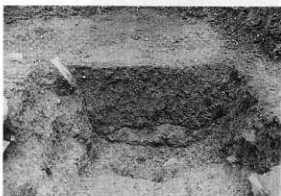
SK-09土坑完掘



SK-09土坑埋土断面



SK-10土坑完掘



SK-10土坑埋土断面

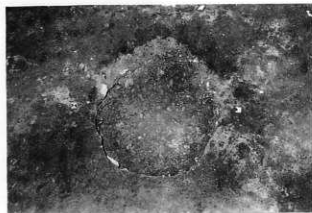


SK-06土坑完掘



SK-11土坑埋土断面

写真図版16：土坑(2)



SK-22土坑完掘



SK-22土坑埋土断面



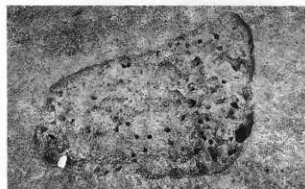
SK-25土坑完掘



SK-25土坑埋土断面



SK-82土坑完掘

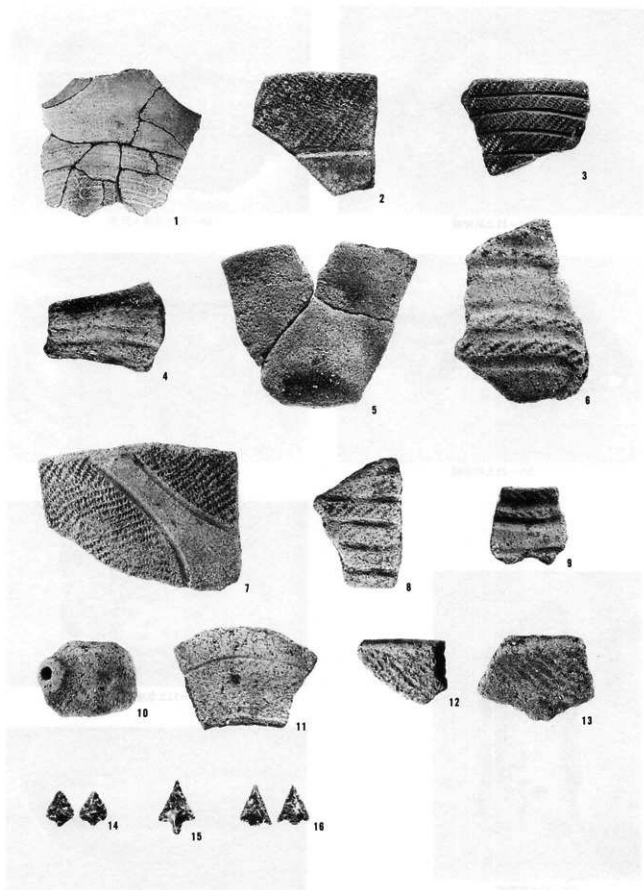


SK-12土坑完掘

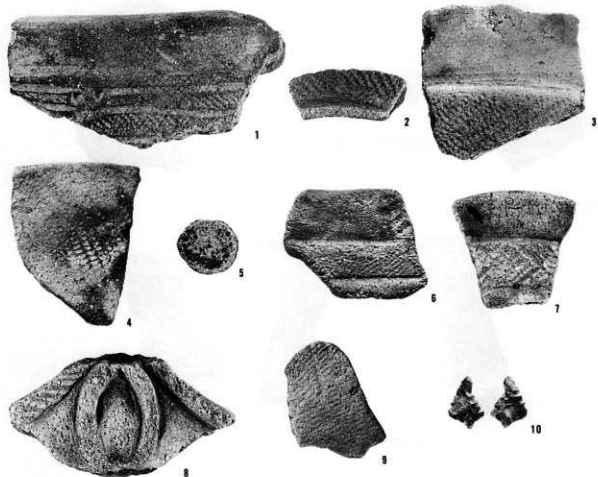


SK-19土坑埋土断面

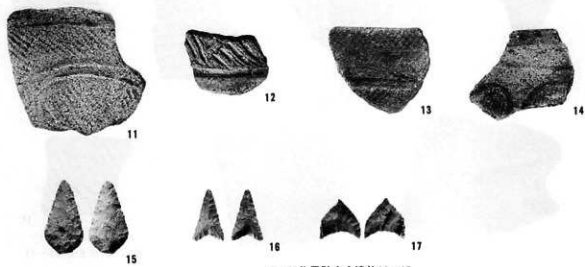
写真図版17：土坑(3)



写真図版18：SI-01住居跡出土遺物

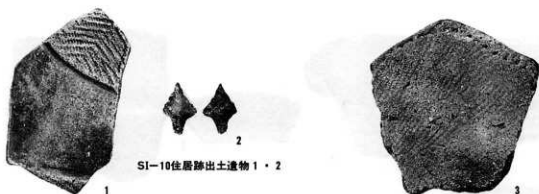


SI-02住居跡出土遺物1~10



SI-09住居跡出土遺物11~17

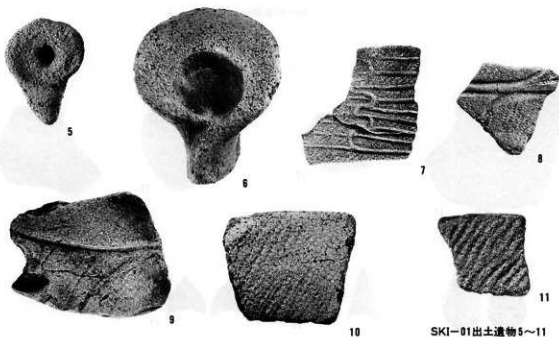
写真図版19：SI-02・09住居跡出土遺物



SI-10住居跡出土遺物 1・2

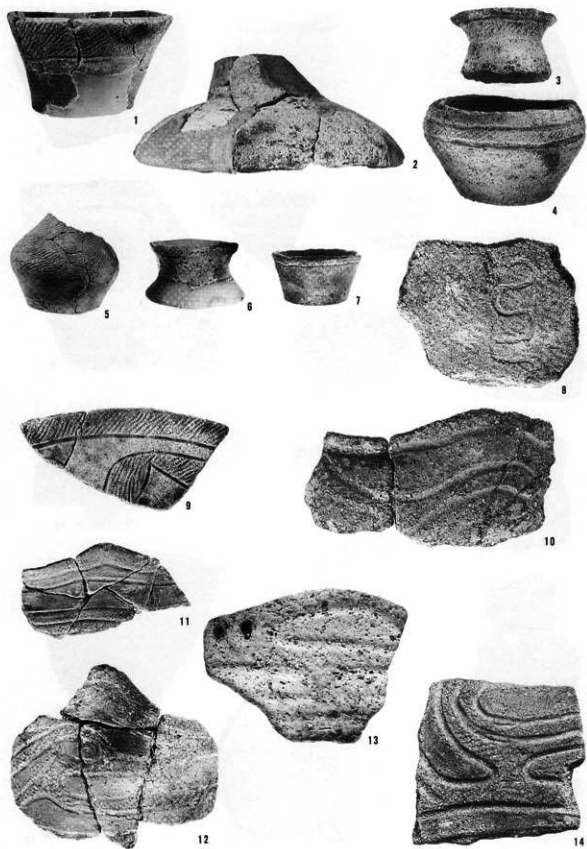


SK-26土坑出土遺物 3・4

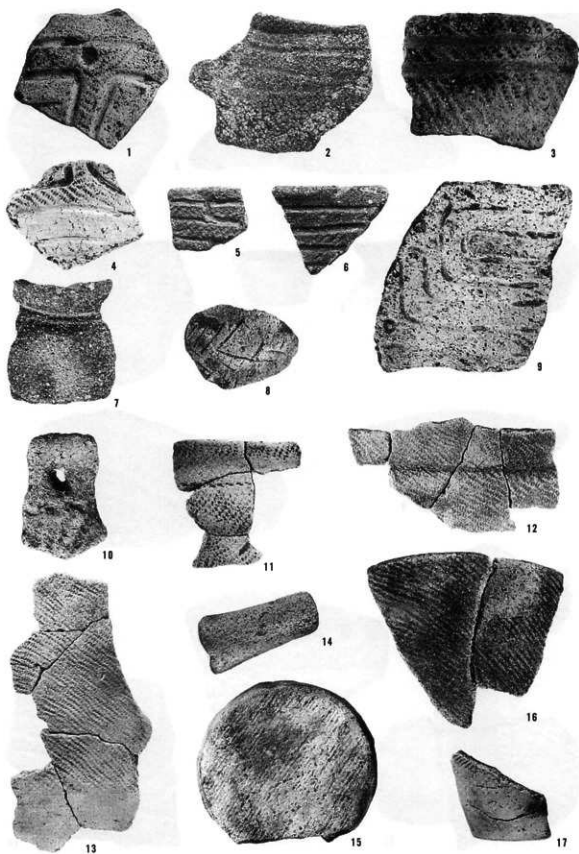


SKI-01出土遺物 5~11

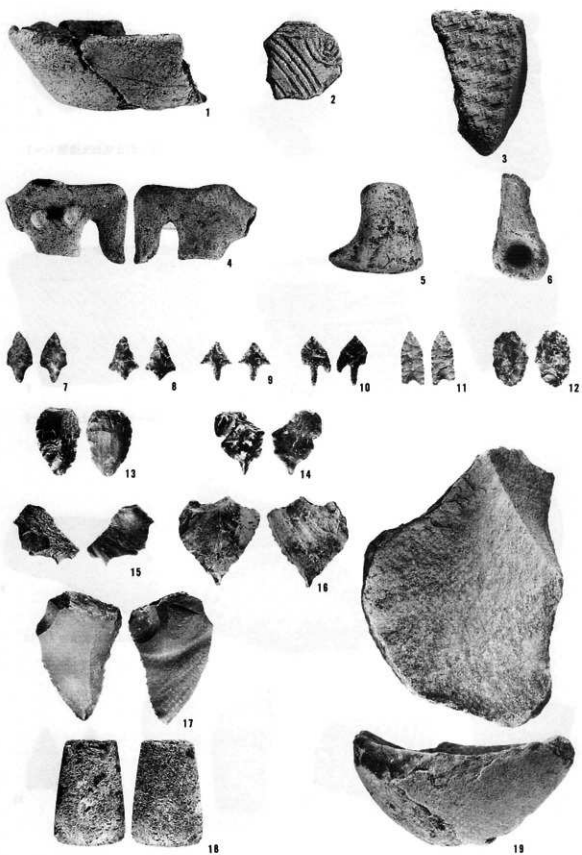
写真図版 20 : SI-10住居跡・SK-26土坑・SKI-01竪穴状遺構出土遺物



写真图版21：SK-01土坑出土遗物(1)



写真図版 22 : SK-01土坑出土遺物(2)



写真図版23：SK-01土坑出土遺物(3)



1



2



3

SK-03土坑出土遺物 1~3



4



5



6

SK-04土坑出土遺物 4~6



7

SK-10土坑出土遺物 7



8

SK-12土坑出土遺物 8~13



9



10



11

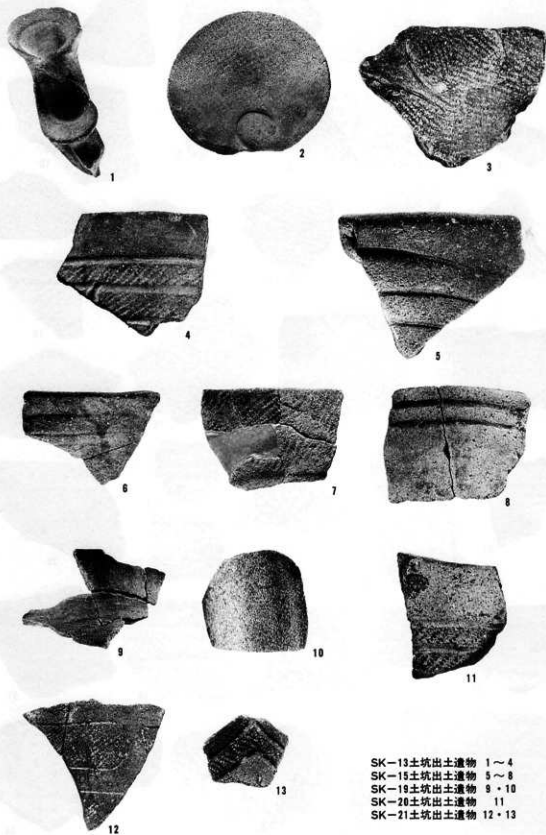


12



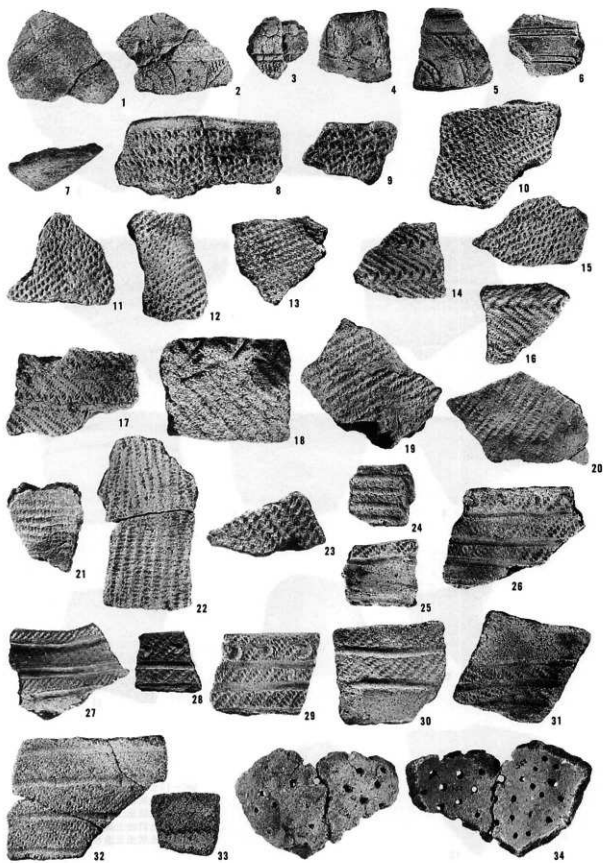
13

写真図版 24 : SK-03・04・10・12土坑出土遺物

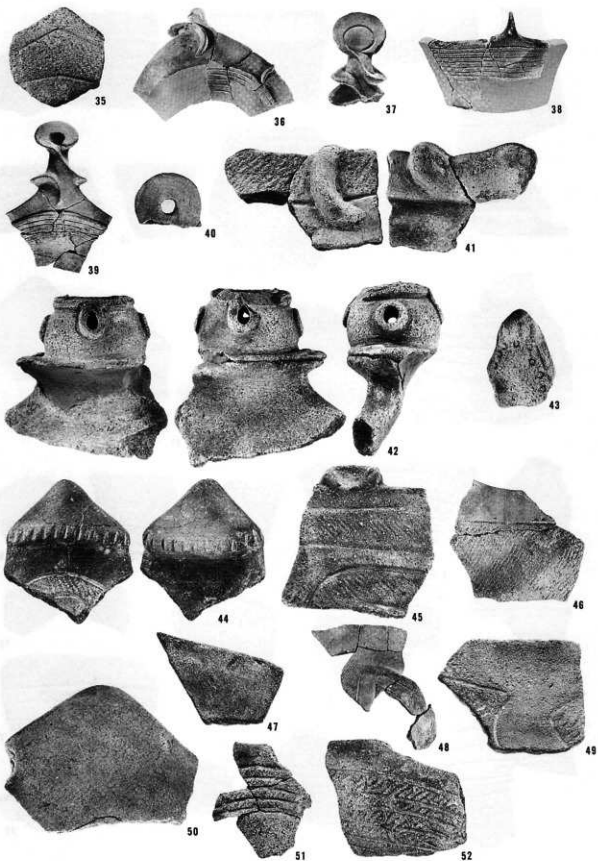


SK-13土坑出土遺物 1~4
 SK-15土坑出土遺物 5~8
 SK-19土坑出土遺物 9・10
 SK-20土坑出土遺物 11
 SK-21土坑出土遺物 12・13

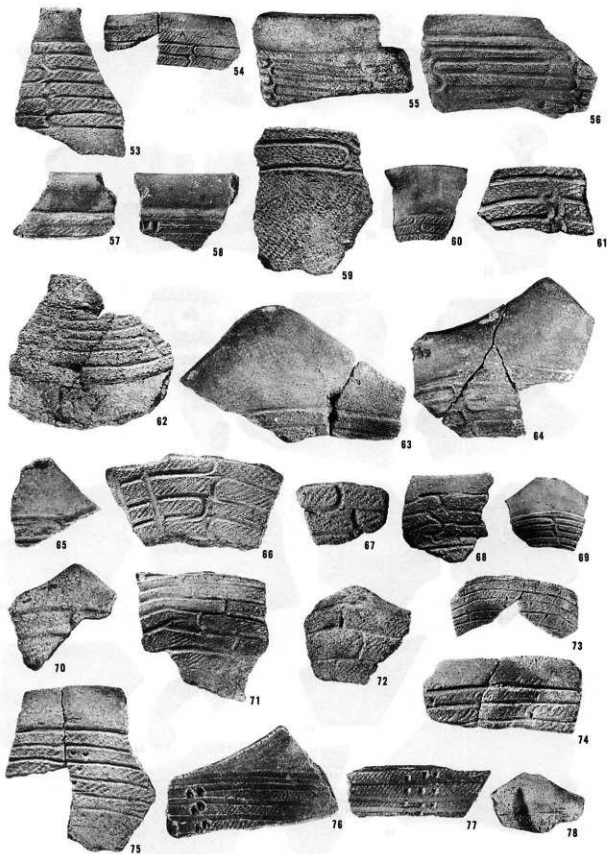
写真図版 25 : SK-13-15-19-20-21土坑出土遺物



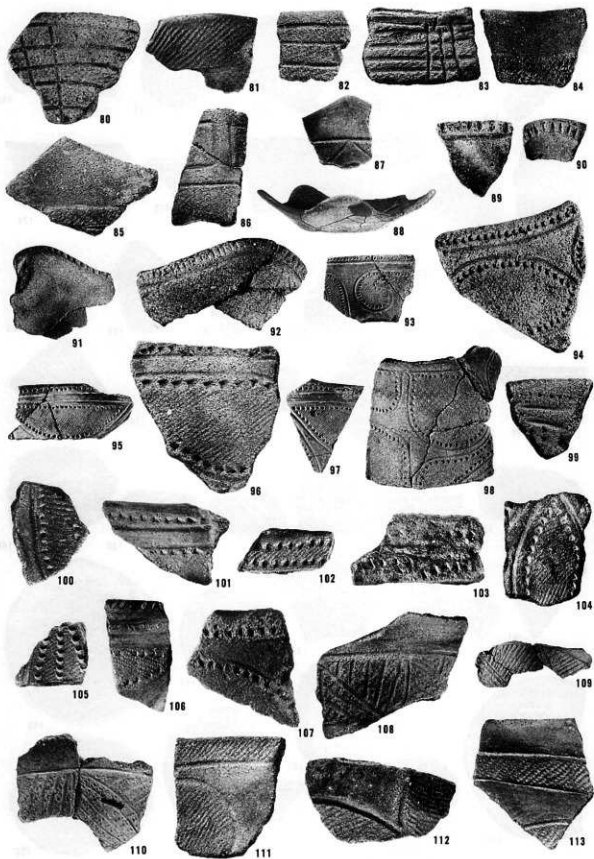
写真図版26：遺構外出土遺物(土器1)



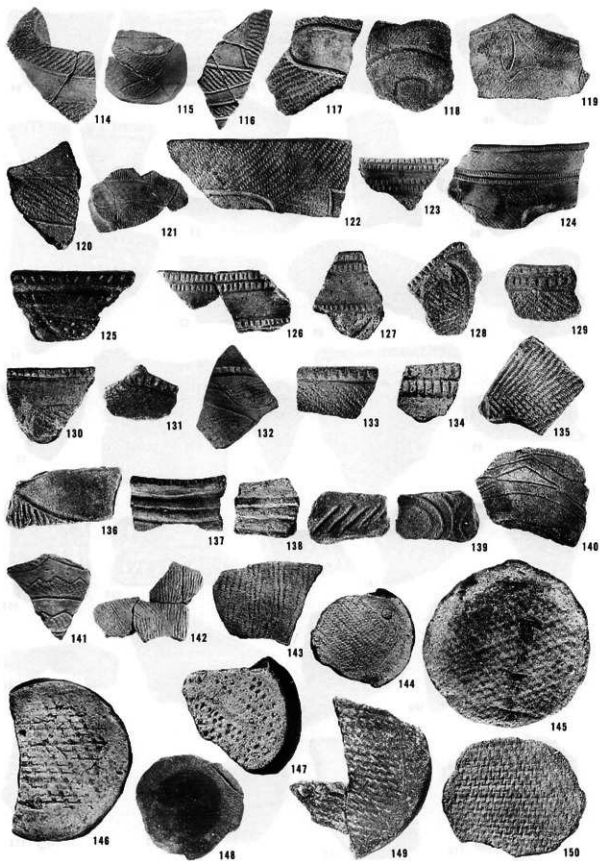
写真図版27：遠禰外出土遺物(土器2)



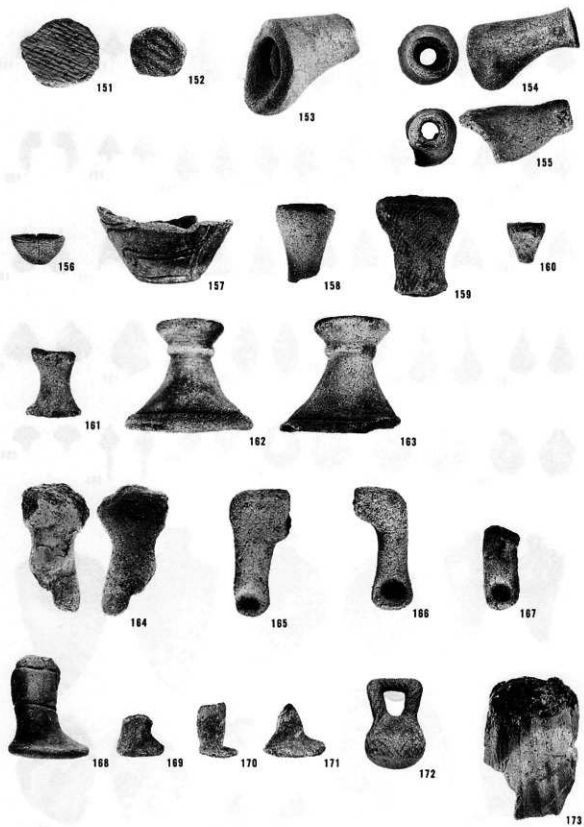
写真図版28：遺構外出土遺物(土器3)



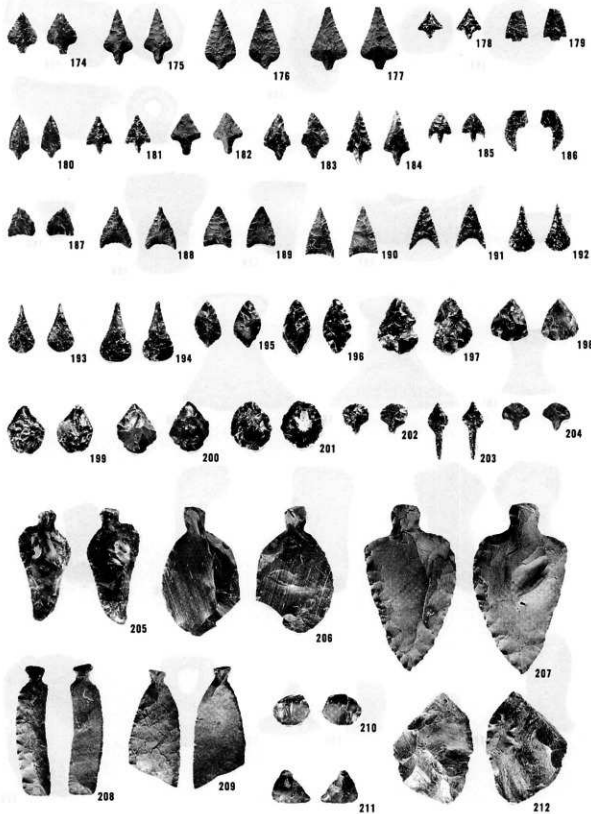
写真図版29：遺構外出土遺物(土器4)



写真図版30：遺構外出土物(土器 5)



写真図版31：遺構外出土遺物(土器6. 土製品)



写真図版32：遺構外出土遺物(石器1)



213



214



215



216



217



218

写真図版33：遺構外出土遺物(石器2)

報告書抄録

ふりがな	いたくらいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	板倉遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般国道343号高ヶ森地区道路改良事業							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第258集							
編著者名	吉田 充							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL. 019-638-9001							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 "	東緯 "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いたくらいせき 板倉遺跡	いわてけんひがしいわいん 岩手県東磐井郡 おひつちよ 大東町	03421	NF50-2064	39度 1分 10秒	141度 17分 55秒	1995 4.12~7.21	3,875㎡	道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
板倉遺跡	集落跡	縄文時代 時期不明	竪穴住居跡 14棟 土坑 35基 竪穴遺構 3棟 焼土他 3基 掘立柱建物跡 1棟 掘立跡様土坑群 3群 掘立柱建物跡 3棟	縄文時代後期の土器・土製品・石器・石製品	・土坑の中には墓壇と考えられるものが含まれる ・赤色顔料を伴う敷石住居跡1棟			

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉

副 所 長 鷹 羽 康 造

〔管理課〕

管 理 課 長 澤 田 寛

主 任 横 山 文 彦

主 事 千 葉 勝 彦

〔調査課〕

調 査 課 長 小 田 野 哲 憲

課 長 補 佐 高 橋 與 右 衛 門

〃 工 藤 利 幸

主 任 文 化 財 中 川 重 紀
専 門 調 査 員

〃 佐 々 木 清 文

〃 高 橋 義 介

〃 酒 井 宗 孝

〃 菊 池 人 見

文 化 財 小 山 内 透
専 門 調 査 員

〃 金 子 佐 知 子

〃 松 本 建 速

〃 菊 池 榮 壽

〃 宮 本 節 子

〃 下 田 隆 衛

〃 濱 田 宏 彦

〃 金 子 昭 彦

〃 晴 山 雅 光

〃 木 戸 口 俊 子

〃 阿 部 勝 則

文 化 財
専 門 調 査 員

羽 柴 直 人

星 雅 之

高 木 晃

杉 沢 昭 太 郎

大 道 篤 史

溜 浩 二 郎

村 上 拓

中 村 直 美

川 向 聖 子

佐 藤 良 和

篠 根 敬 志

柴 田 慈 幸

鈴 木 浩 二

鈴 木 聡 央

高 橋 実 央

千 葉 和 弘

平 澤 里 香

山 口 俊 規

山 下 浩 幸

期 限 付
専 門 職 員

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〔資料課〕

資 料 課 長 菊 池 強 一

文 化 財 伊 藤 拓
専 門 調 査 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第258集

板倉遺跡発掘調査報告書

一般国道343号鷹ヶ森地区道路改良事業

印刷 平成9年3月25日

発行 平成9年3月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

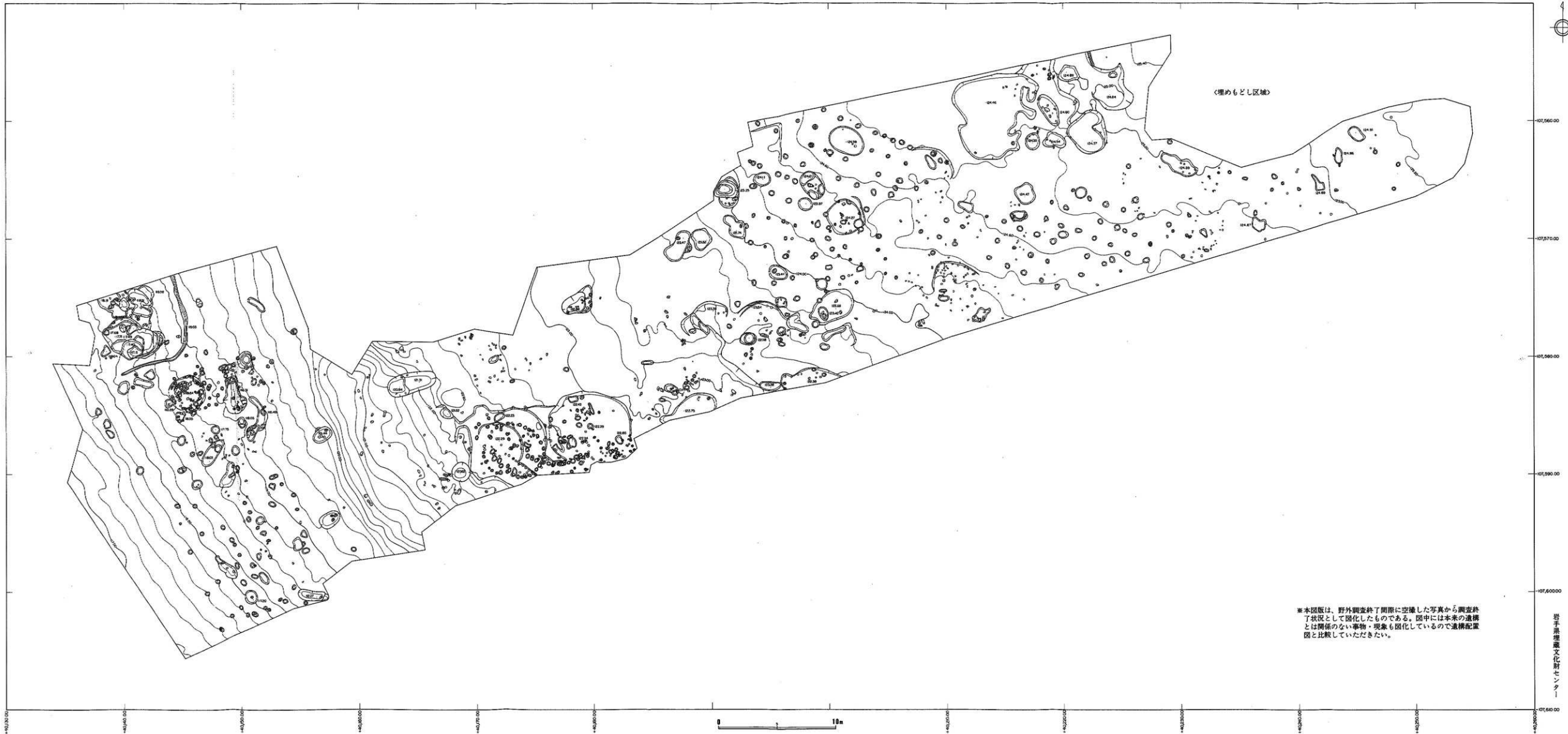
TEL (019)638-9001

FAX (019)638-9565

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田1丁目6番49号

TEL (019)653-4151



※本図版は、野外調査終了間際に空撮した写真から調査終了状況として図化したものである。図中には本来の遺構とは関係のない事柄・現象も図化しているので遺構配置図と比較していただきたい。

付図版：調査終了間際の状況(空撮図化)